



# フロレスリング牙 2ND BOUT

DOJIN  
**R18**  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止





FROM ノロスリンツキ -2nd Bout-

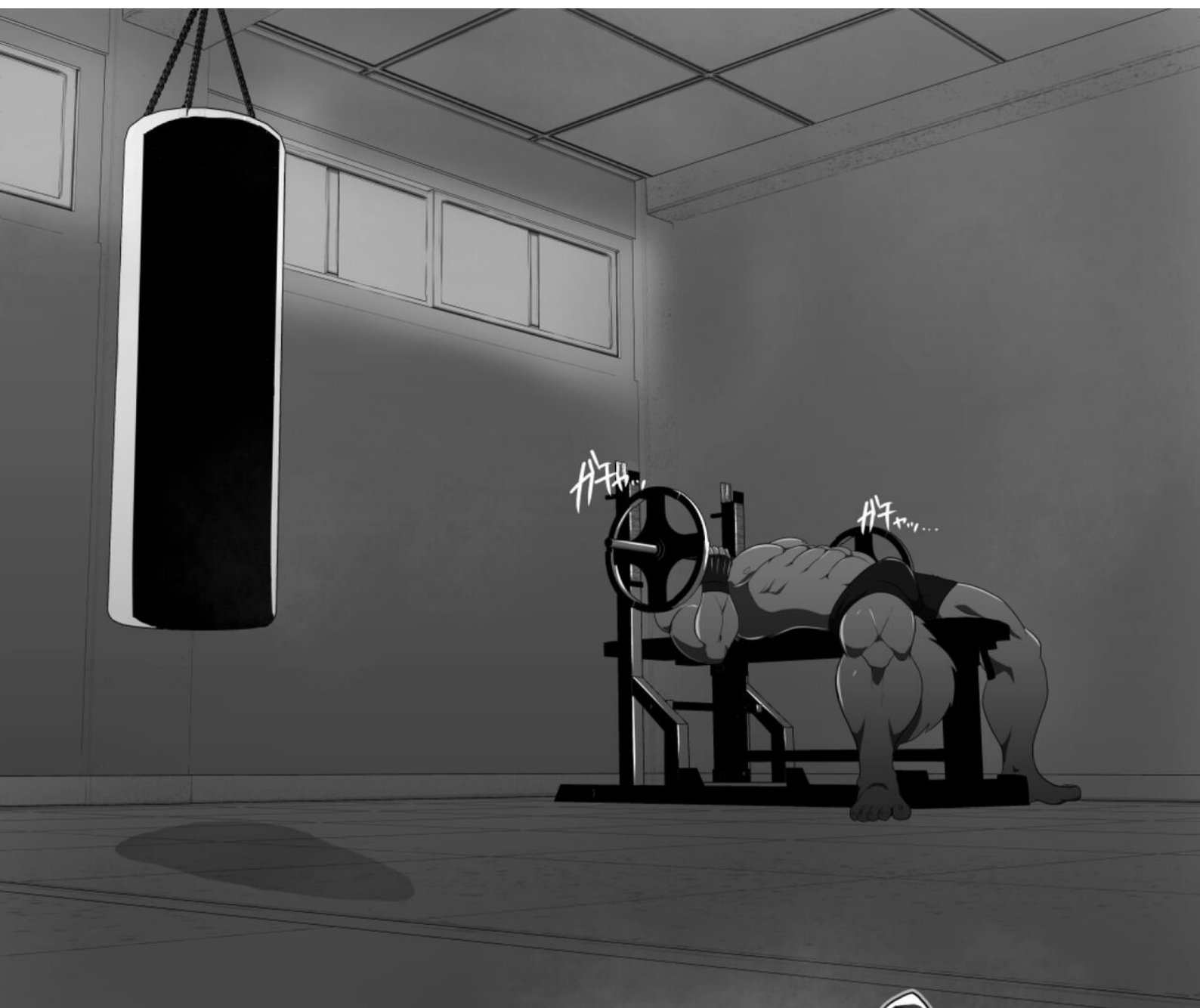
ウレシサ  
2ND BOUT

DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止



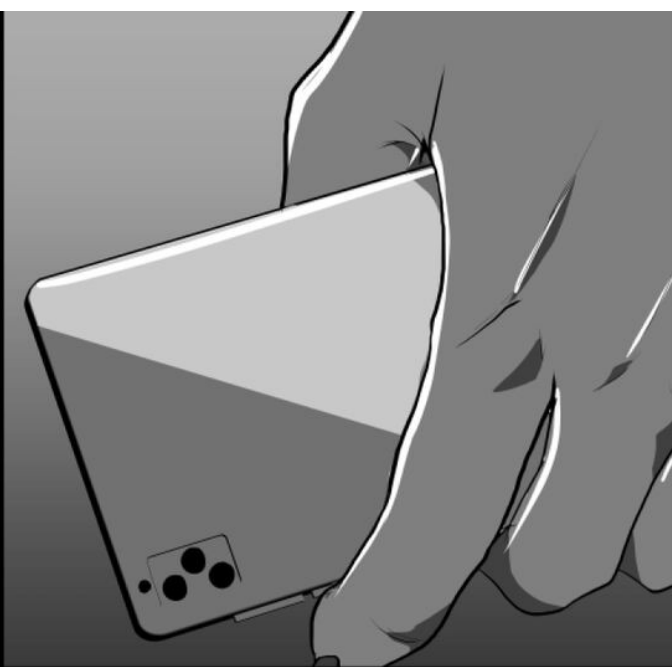














決まったー!!

アイスバーグ高峰  
得意の  
69式上四方固め!

圧倒的な体格差など  
物ともせず、  
アヴァランチ  
ウルスを射精KO!

雪崩の如き勢いで  
噴き出した白濁が  
高峰の顔を  
染め上げる!



アイスバーグ 高峰  
これで6連勝!!

流石は現役AV男優!  
暴君の雄汁タイツが  
また一枚! 高々と  
掲げられたーッ!



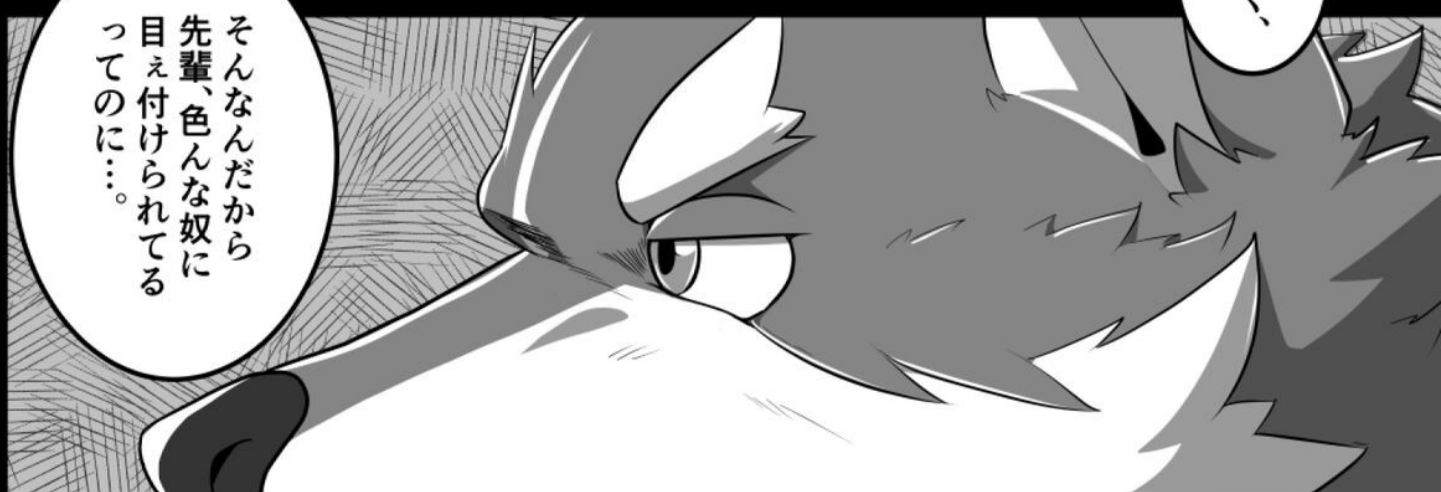






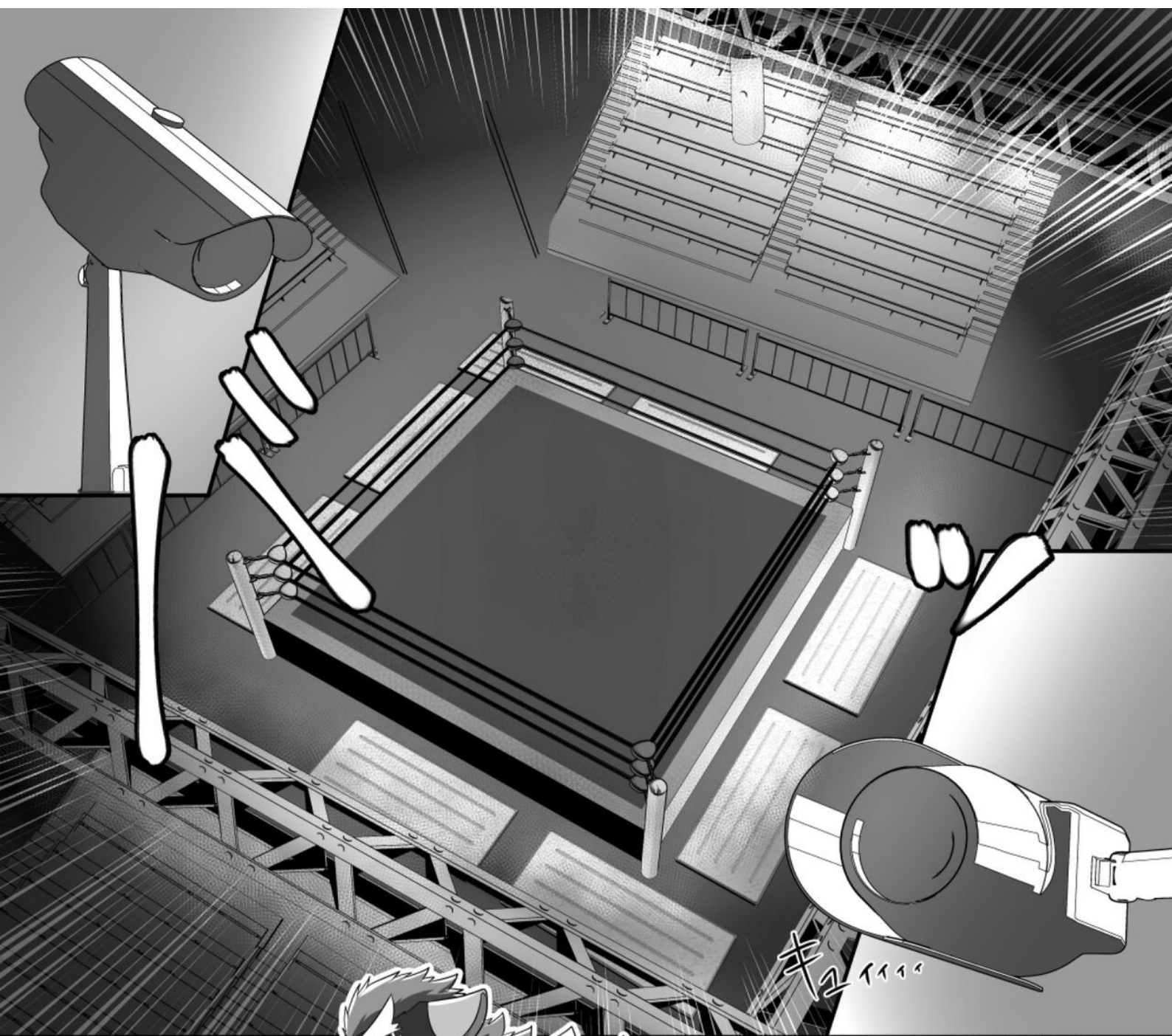






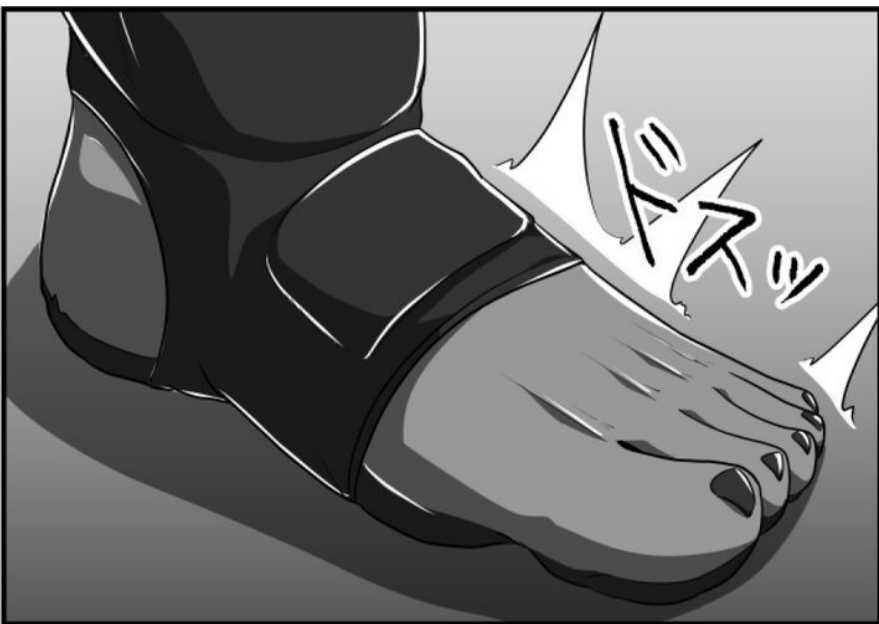
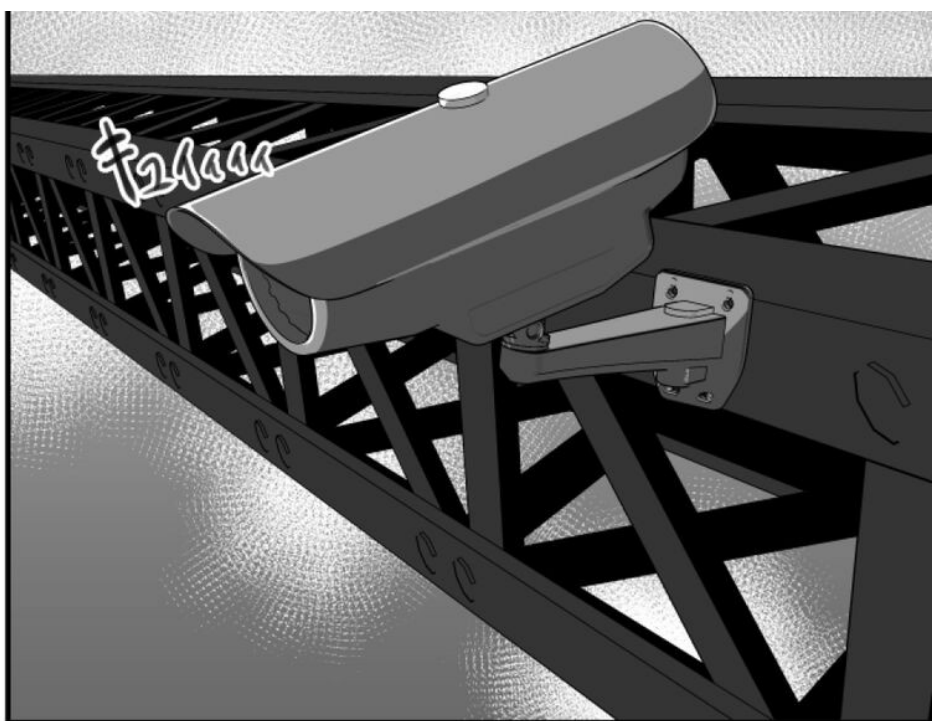


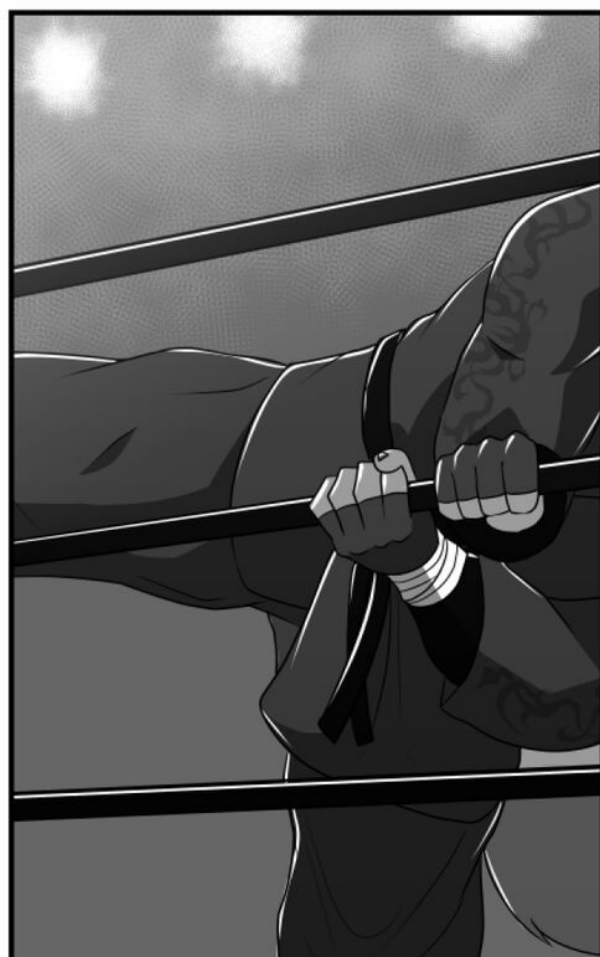
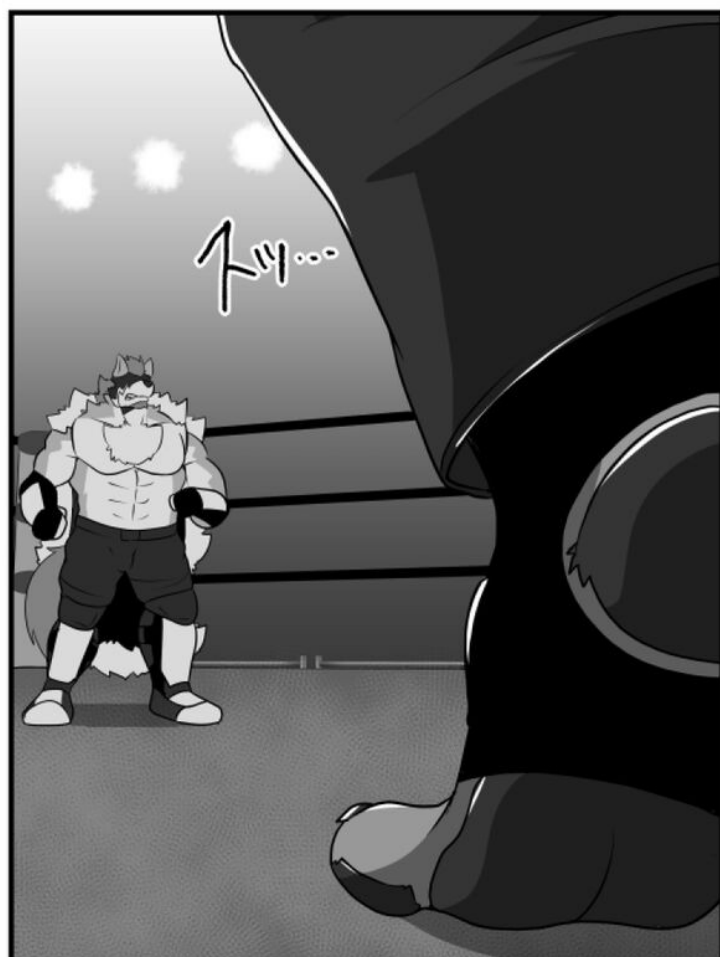
유리자카리  
2ND BOUT







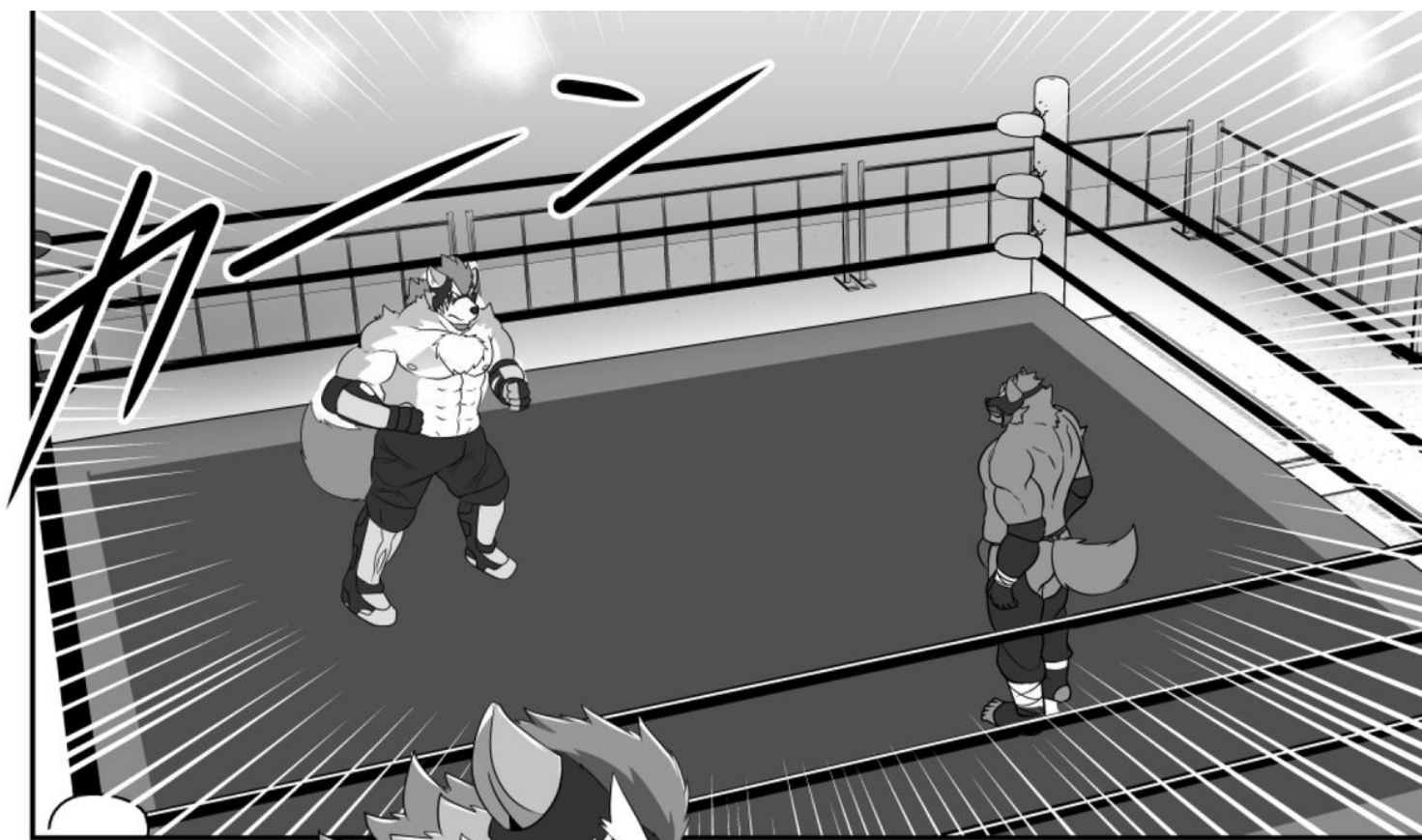






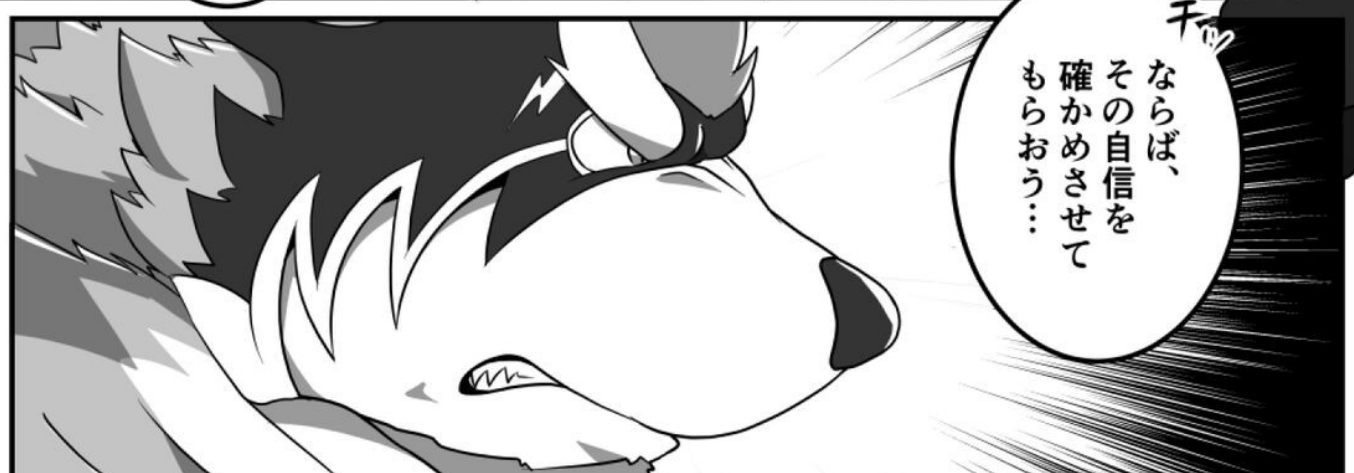






どうした？  
かかってこい。







…そんなものか？



ぐうっ…！









コイツ...  
中々っ...



キッ



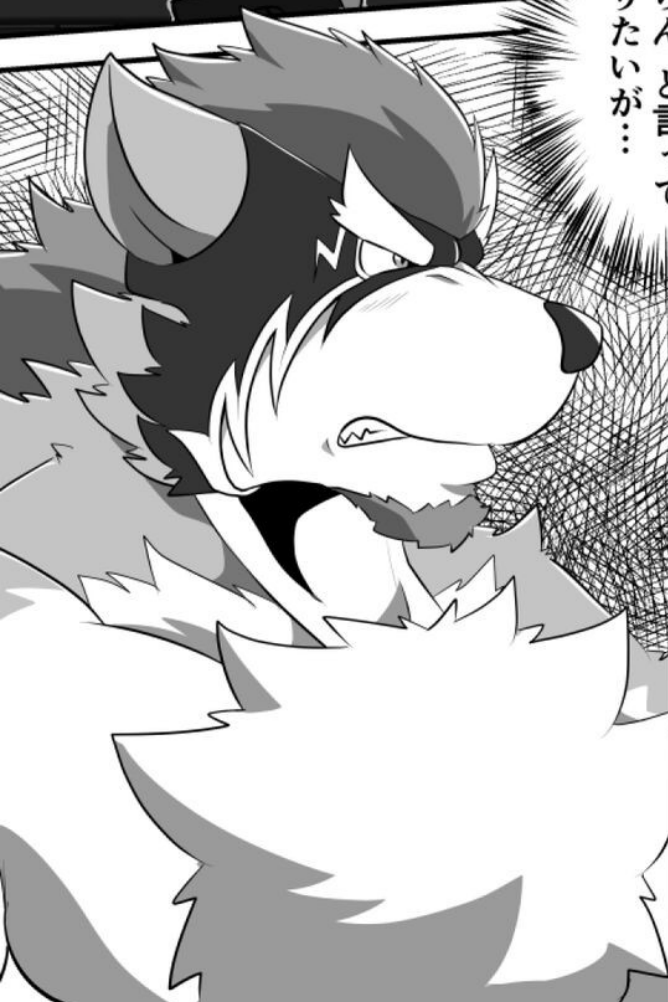
一度、  
仕切り直す...



ガッ



力比べか…  
下らん、と言って  
やりたいが…



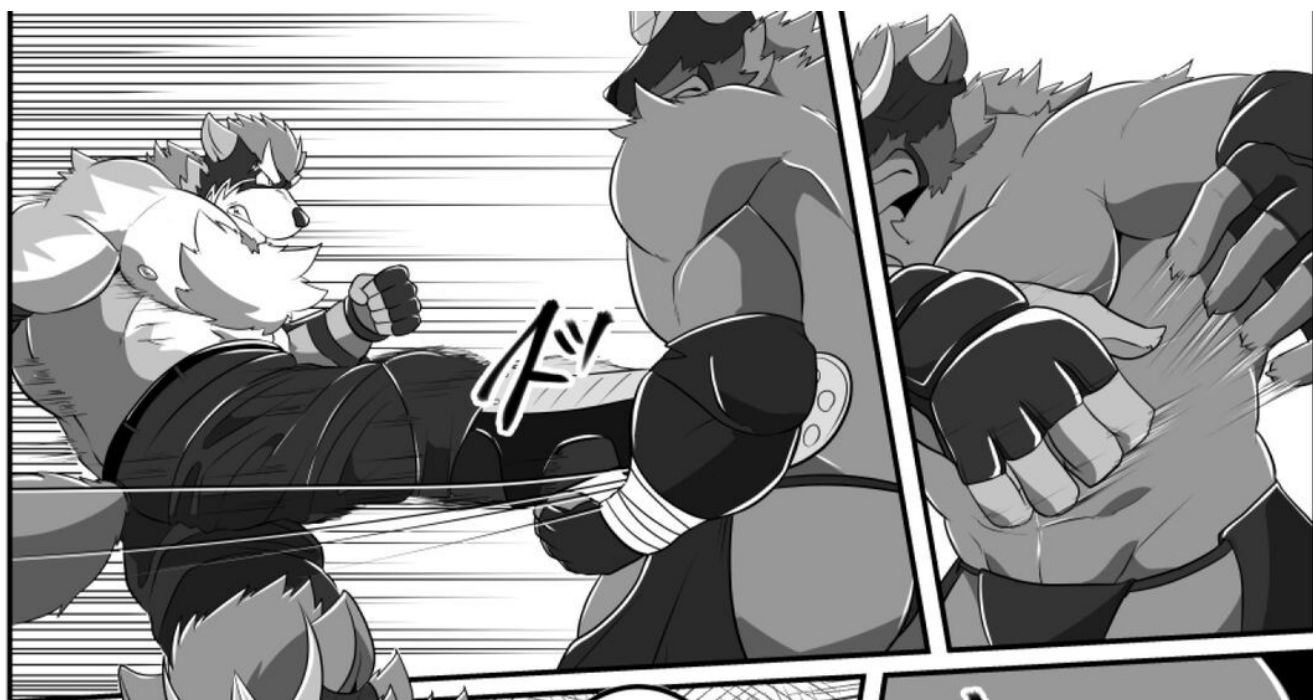




…どうした？  
押されているぞ？  
得意のは脚だけか？









させるかっ！

クッ…  
小癪な事を…













この程度の刺激で  
気を逸らせるとは  
随分と初心な  
ものだな？

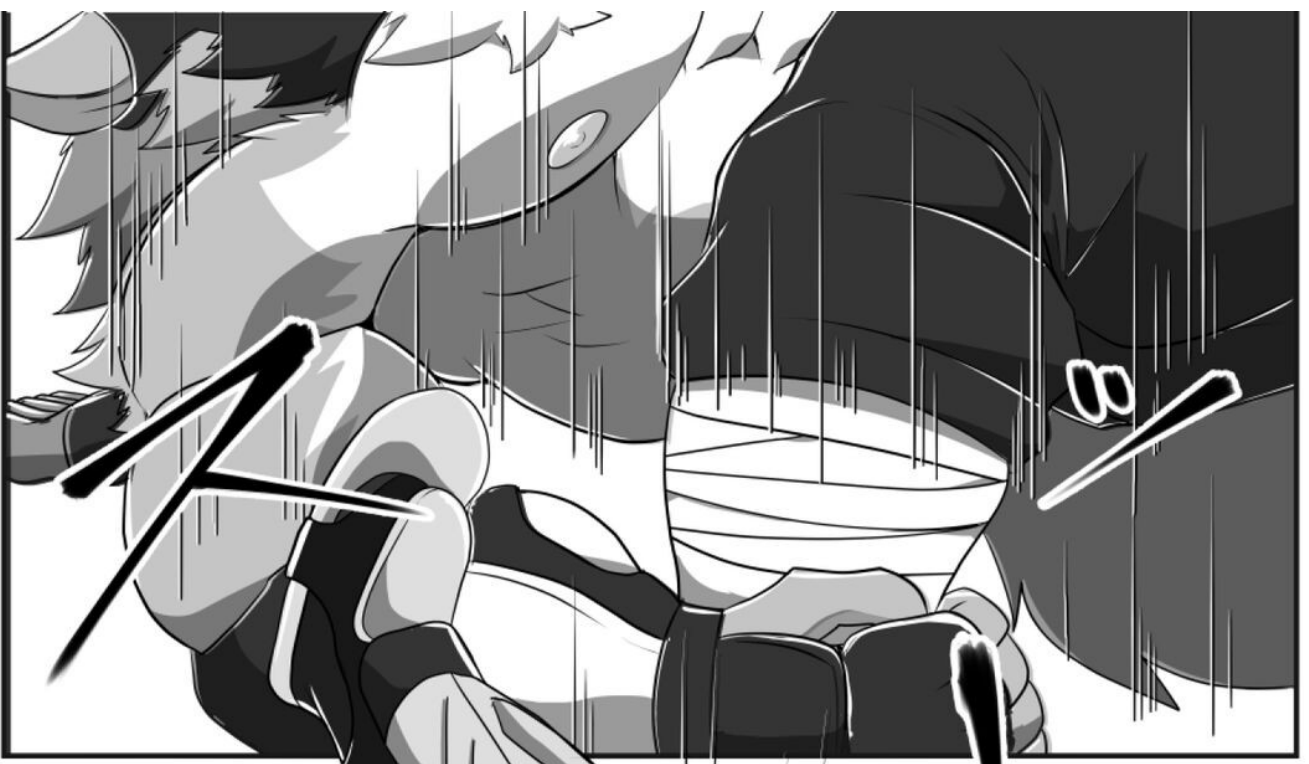
なん…  
だと？

隙だらけと  
言っただ…

くっ…！

47



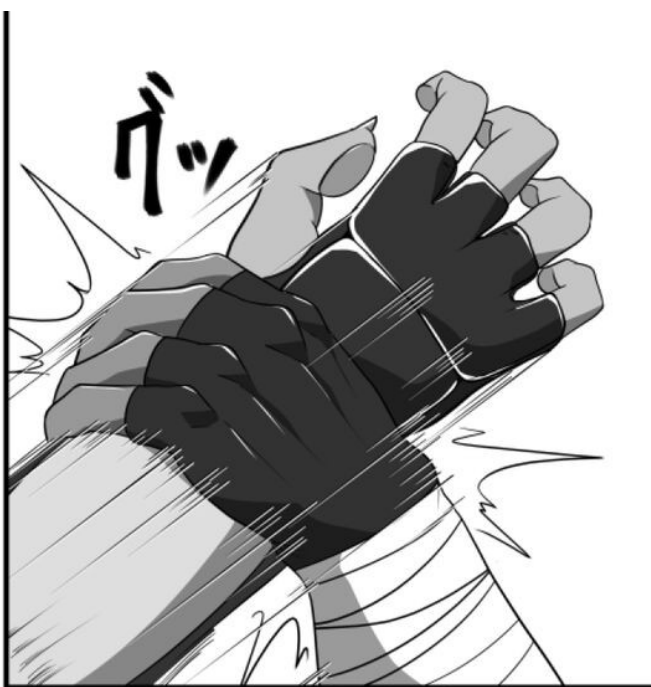


うぐっ…  
あっ!?

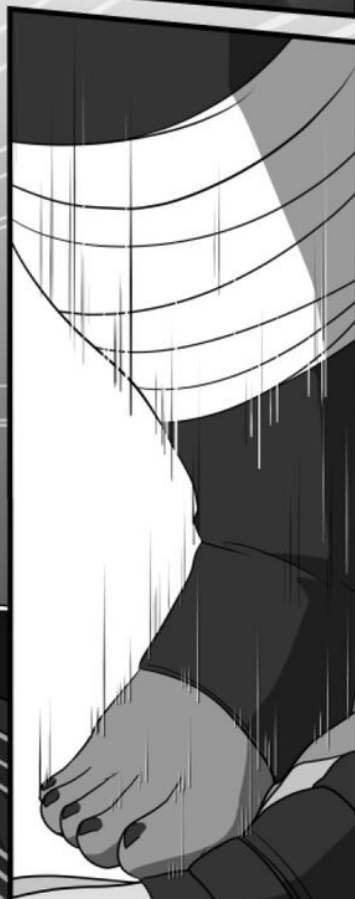








活きの良さは  
認めてやる…が、





少し大人しく  
している！

がはっ！

グッ

















んぐっ!?

なっ...!?



貴様っ!  
何処に舌を...



ピチャ

ピチャ





少しは大人しく  
したらどうだ？

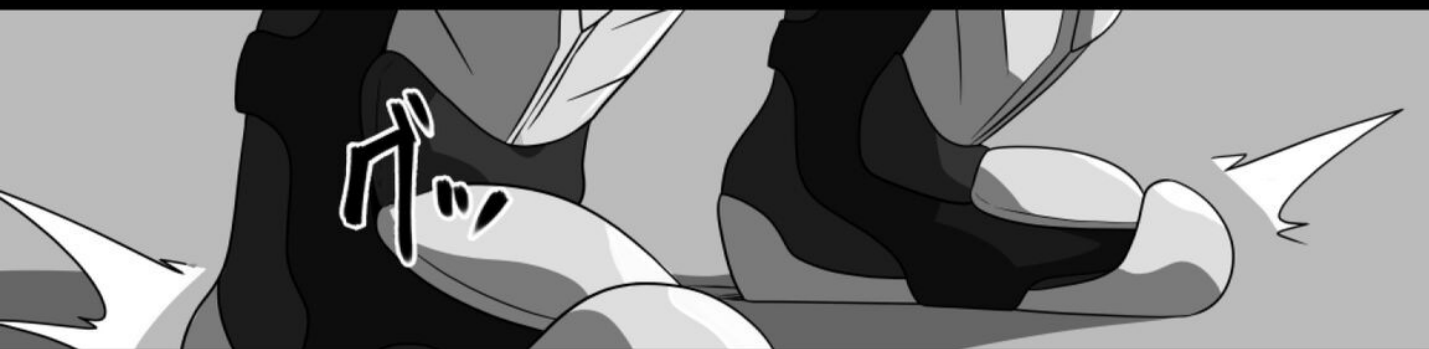
今更見苦しい…



クッ…  
ソッ…！











さて…  
そろそろ…



ハイ



貴様…  
まさかっ！

ハア…

ハア…





喰わせて  
もらうぞ…  
小僧！



うっ…！

アッ

アッ

アッ

大人しく  
している、

そうすれば  
貴様の事も  
善くしてやる。

バン

グッ

グッ

は  
あ  
あ

か  
あ  
あ

スト

スト







自分だけ  
気を遣って  
満足されては  
困るな：

あー!!

ハ

が…  
しかし…

締め付けも  
中の具合も  
上等ではないか、

レスラーよりも  
淫売の素質の方が  
あるのではないか？

ハア

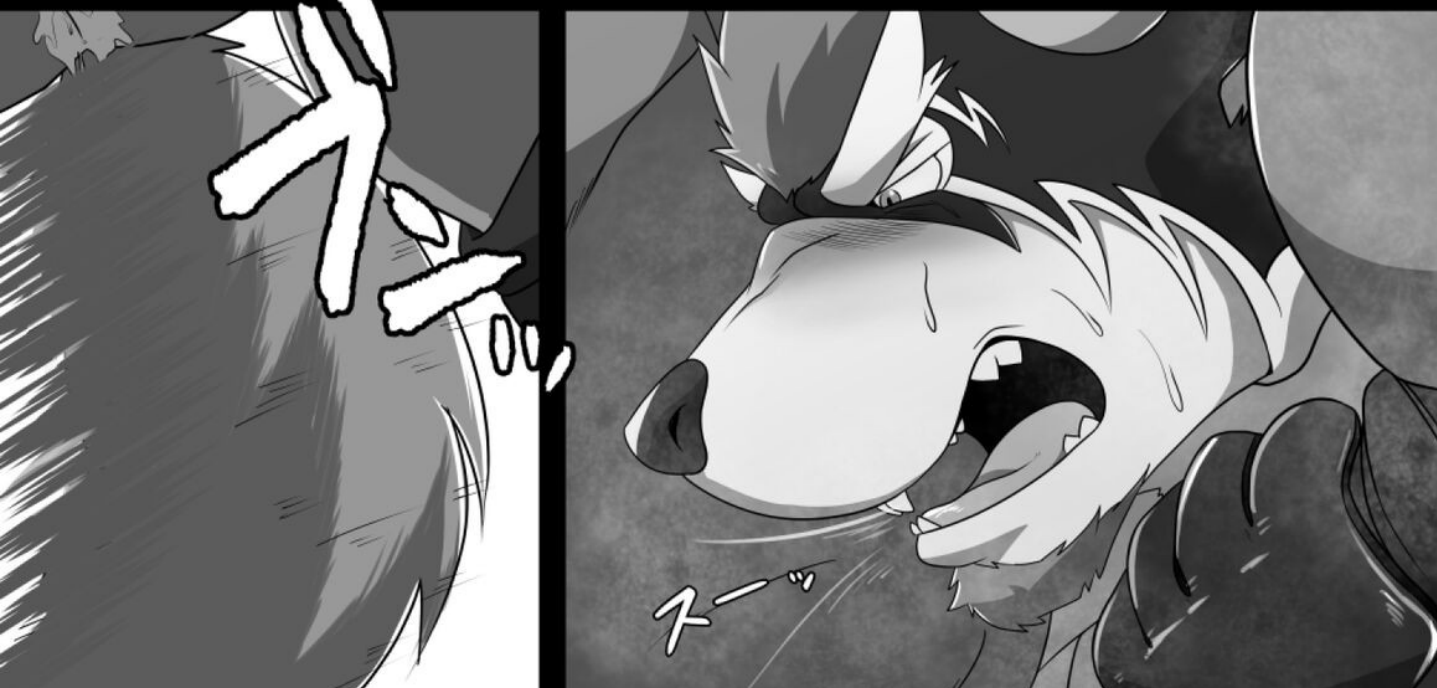
ハア...

ズッ

ズッ

シュッ

シュッ















終わりだ  
ああ!!





…  
ン



ツ  
ー  
…



スリー!!!

スリー!!!











貴様が熱を  
上げるのも  
分かるという  
ものだ。



小僧と侮りはしたが、  
なかなかどうして  
面白い存在ではないか、



1-1...



当たり前だろうが、  
俺様の教え子だぜ？











# 蒼月 凍夜

ソウゲツ トウヤ

■リングネーム

蒼月 凍夜

■年齢

23歳

■獣人種

狼獣人

■身体データ

197cm 126kg

ブラコン気質な蒼月朔夜の兄。元全国高校プロレス王者。表向きにはプロレスを引退し、現在は大学院生をしているが【とある理由】から秘密裏にレスラーとして復帰し、牙のリングに上がる事に…

リングネームは「ナイトオブフェンリル」 投げ技・関節技とオールマイティに使いこなすが、最も得意とするのは弟の朔夜と同じく蹴り技を主体とした打撃と金的。また、体格の割に身のこなしが軽く、連続でのバク転等も軽々と出来る他、空中殺法も得意としている。



# 影狼

カゲロウ

■リングネーム

影狼(かげろう)

■年齢

No Data

■獣人種

狼獣人?

■身体データ

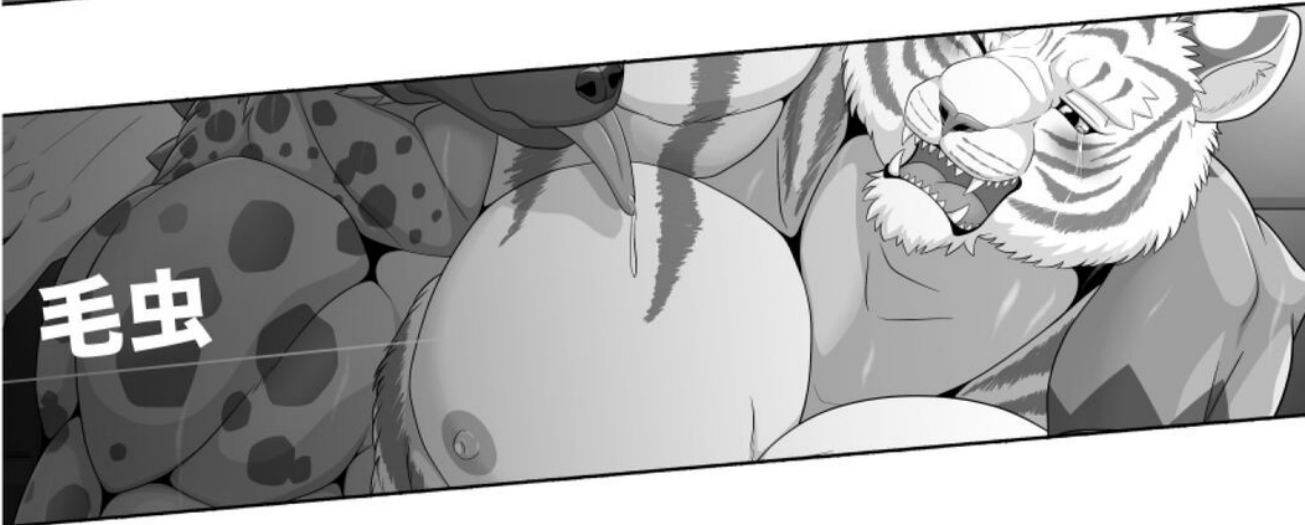
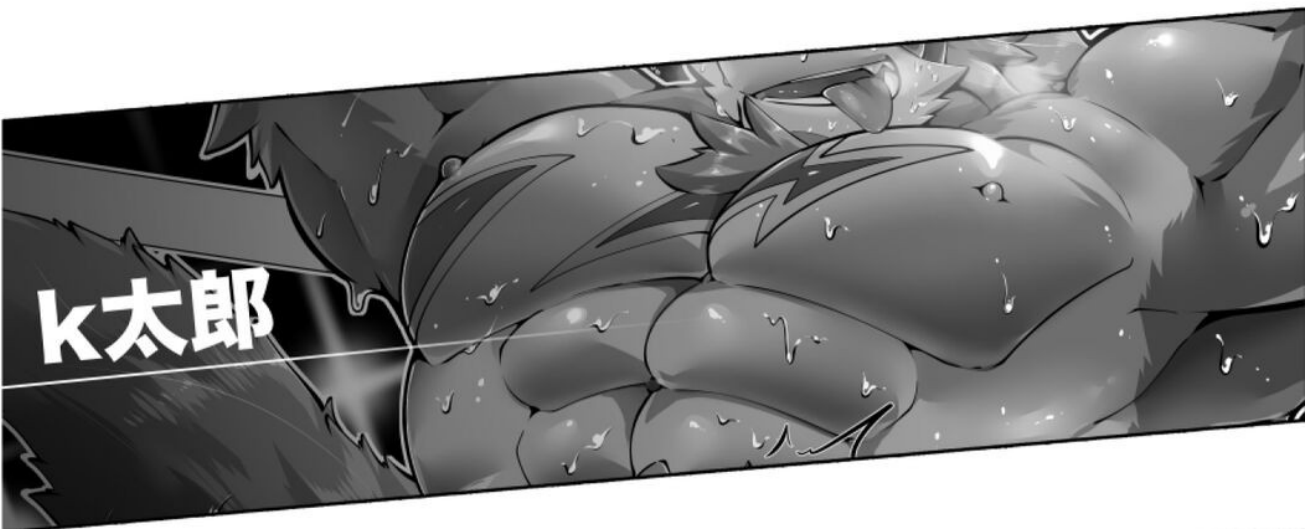
195cm 125kg (推定)

最近牙のリングへ突然姿を現した、謎の覆面レスラー。元々はプロレス以外の武術をしていたのか、構えや足運びから古武術の使い手ではないかと噂されており、実際ロープワーク等のプロレス特有の動きにやや不慣れな面が見え隠れするが、それ以外の実力は折り紙付きでデビューから現在まで負け戦はない。影狼というリングネームは、実態が掴めないまるで【陽炎】のような存在と彼の毛色や種族から掛けて出来た通称で、名無しともいえない為に牙内でも便宜上そう呼ばれている。





# GUEST WRESTLER PROFILES





## バルト・サンダース

■リングネーム  
バルト・サンダース

■年齢  
29歳

■獣人種  
狼獣人(灰色オオカミ)

■身体データ  
201cm 135kg

無口で冷静に見えるが頭の中では様々な思考を巡らせている。そのため視野が広く試合で主導権を握ることが多い。長い手足を駆使した絞め技を得意とし、恵まれた巨軀のおかげで相手の技をものともしない。役回りはヒールのため、徹底して悪役を演じてはいるが試合後の仲間たちへの気遣いを忘れない優しい一面も持つ。そのやさしさと無口が相まって誤解を生むこともしばしば。



@t\_kawakyun1

太郎





# ノイジーX

■獣人種      ■年齢  
ブチハイエナ      41歳  
■身体データ  
187cm 97kg

新マスクに模様替えしたうるさいハイエナおっさんルチャドール。飛び技に加え、最近では締め技が冴える。相手を煽って怒らせ、自滅に追い込む展開が多い。そのうえ観客を煽りまくり、激しいブーイングを要求する。

# 三川 直虎

■獣人種      ■年齢  
白虎      18歳  
■身体データ  
197cm 132kg

とある白虎のレスラーに憧れ、レスリングを始める。ベルトを獲るだけの実力はあるが、大人しい気性が災いして負け越している。恥ずかしいと興奮する性癖が後輩にバれてしまい、エロレスに引きずり込まれる。必殺技はホワイトタイガースープレックス。









# 狂愛と ノンケパパチャンプは 蜜より甘く

文：蒼葉カゲトラ

画：くっちー



スピーカーから流れてくる歓声に特徴的なギザ耳がびくりと動いた。

試合会場のロビー内に設置された大型モニターを、その大柄の虎の青年は食い入るように見つめていた。すぐ背後にあるソファーから勢いよく尻が離れてすでに一時間。半歩と動かないままその場に立ち続けている彼を夢中にさせているのは、プロレス団体大手『レススルスタードム ZERO』所属の現ジュニアヘビー級チャンピオンの引退試合に他ならない。

時間無制限のラストマッチはついに華々しいフィナーレを迎えようとしていた。

拳を握る青年から並々ならない気迫が喉を割って出る。

「よしっ、そこだ先輩っ！」

熱く叫ぶ彼が突如片肘を掲げた。上がった肘がそのままブゥンと唸りを放って宙を横に断つ。

直後、モニターに映し出されている狼獣人の片腕が青年の動きを模倣するかのように全く同じ軌跡をリング上に描いた。曲がる腕、突き出した肘、そして助走しながらのランニングエルボーが相手の頭部に勢いよく叩き込まれる。

「よっしゃあ！」

ガッツポーズを決める虎青年の大きく見開かれた目にマツトへ沈んでいく対戦者の姿があった。

「もうここで決めるしかねえっスよ士狼先輩っ、あの技を最後に！」

声を震わし、体を震わし青年は言った。

チャンピオンの無駄な贅肉の一切を省いた筋肉質な体がりりと翻る。シューズの先がコーナーを向いた時点で青年は大

きく頷いた。驚くことに、またしても彼の脳裏に描いていたイメージをなぞるようにしてリングネーム、士狼と呼ばれた選手がコーナーポストへと走っていく。

試合の筋書きを決めるブッカーなら試合展開を知っていて当然だが、彼はそうではない。

観客席ではなく関係者以外が立ち入りできないロビーで観戦している時点でただの素人でないことは明らかだが、玄人だとしてもはたしてチャンピオンの洗練された試合運びが手に取るようにわかる人は現役選手の中でもいったいどれほどいるだろうか。

おそらく数人といえないに違いないその一人がこの虎の青年だった。

「おおしっ、先輩のムーンサルトプレスを食らいやがれいっ！」

絵に描いたような肉厚のレスラー体型をわななかせて吼える。

130kgを超える大男の咆哮に何事かと振り向く人目を気にするでもなく画面を凝視するこの男もリングの上に立つ側の人種であった。チャンピオンの士狼と同じレススルスタードム ZERO に籍を置き、ヘビー級レスラーとして日々汗を流している。同じ釜の飯を食っている士狼の後輩にあたるのだから盗み見て学ぶ機会はいくらでもあるのだろう、鋭い観察眼さえあればチャンピオンの動きを予測することも可能なのかもしれない。並大抵の熱意と根気がなければならぬだろうが。それでも、それを成しえたのは彼が士狼を慕い、行動理念を理解し、心の底から心服しているせいかもしれない。

朴訥とした彼の、輝く琥珀色の瞳に敬愛の念が揺れていた。

この世界に自分を導いてくれた憧れの先輩の引退試合が今まさに行われているのである。

敬愛の念……いや、それだけではないだろう。

昂揚、そして悲哀すら含んだ複雑な感情に彩られている瞳に、王者の最後の試合が焼きついていく。画面越しなのが恨めしい。間近で見られる先輩たちがこれほど羨ましいと思ったことはない。

試合の流れが現役チャンプの確約された勝利に向かって急加速する。

「あつ……」

閉じることをとうに忘れていた青年の大きな口がわずかに鳴った。

瞬間、息すらも奪うほどの光景が画面の向こう側で繰り広げられたのだ。

何と鮮やかな身のこなしか。コーナーストまで走った土狼はその勢いを殺すことなく飛び跳ねると一気にトップロープ上に着地するや、たわみ終えたロープに押し出されるようにして身を宙に躍らせていた。軽業師もかくやと思わせる躍動する肉体。灰色オオカミの艶やかに濡れそぼった筋肉美が見る間に引き絞られていく。そして、弓形にしなう体から放たれる無数の汗の粒が眩いライトに燦然と輝く姿に、誰もが息を飲んでいた。

スピーカーからあれほど喧しかった音が消え失せていた。

その刹那、観客も、レフェリーも、興行主すらも土狼の雄姿に心奪われていたのだ。

コーナートップから高らかに飛翔する彼には見えているのだろう。後方を確認せずとも、起き上がって己へと突進してく

る対戦者の姿が。美しい放物線を描いて、ムーンサルトプレスはマットに吸い寄せられるがごとく再び対戦者を沈めやった。無音の会場に肉体同士のぶつかる音が響き渡るや、白昼夢から覚めたかのように今日一番の大歓声が渦を巻く。

「ぐおおおつ土狼先輩っ、くううーっ!!」

何たる妙技だろうか。虎の青年は歓喜に身震いしながら天を仰ぎ見た。

炸裂したチャンピオンのフィニッシュ・ムーブに熱い涙が込み上げる。鼻の奥に鈍い痛みがじんわり走る。必殺技のムーンサルトプレスの披露はこの試合が終了することを意味する。そして、――先輩の競技人生がついに終焉を迎えたということなのだ。

歓声に埋もれたスリーカウントがやがて先輩のフォール勝ちを告げた。

青年は再び画面を視界に収めた。

その瞳を見たら誰が数秒前の血気盛んな姿を想像できただろう。あれほど精気に満ちていた目から輝きがすっかり失せていた。がくりと肩が落ち、持ち上がった尻尾はぺたんと床を舐める姿に、彼から急速に興奮がしぼんでいく様が手に取るようにわかった。

土狼コールが巻き起こるなか、晴れ晴れとした笑顔の先輩が手を振っている。

リングに上がってきた関係者から花束を手渡され、マイクを手にとるとコールは潮が引くように静まった。未だ興奮冷めやらない会場で引退セレモニーは粛々と進められていく。ファンにメッセージを送る先輩の姿を、虎の青年は精気の抜けた目ではんやりと見つめていた。





うつすら霞がかった脳裏に出会った頃の先輩の姿がぼっと  
思い浮かんだ。

中学三年の夏回りだっただろうか。

始まりはテレビで見たプロレス中継だった。

自分でも理解できなかった。ザッピング中に流れていくはず  
だった興味の無いプロレス番組を指先がスキップしなかった  
のだ。

指を止めたのは、画面に映し出されていた灰色オオカミの選  
手が華麗に技を決める瞬間だった。

単純に思った、格好いい人だな、と。

単純ゆえに、多感な時期のその思いがけない出会いは強烈に  
印象に残った、将来を決定づけるほど。

技の名前もろくに知らないほどプロレスはもとより格闘技  
全般に興味なかったのに、気づけば試合終了のゴングが鳴るま  
で番組を見続けていた。そのあと急いでネットで検索した。あ  
の格好いい選手はいったい誰なのか、名前と、そして彼の姿が  
写った画像を。

『士狼選手、期待の新星瞬く間に王座へ』

後日購入したプロレス専門誌にそんな大見出しが載ってい  
た。

弱冠二十歳にして三桁の選手を擁する巨大プロレス団体の  
頂点に立った功績を褒め称える記事だった。

次のページで一面いっぱいファイティングポーズをとる  
士狼選手の写真が掲載されていた。

灰緑色の挑戦的な双眸がこちらを睨んでいた。まるでかかっ  
て来いと言わんばかりの眼光からしばらく目が離せなかった。  
白と灰の豊かな被毛と太いマズルも相まって、並々ならない王

者の風格に心臓を鷲掴みにされたかのような衝撃が体を貫い  
た。実際生でこの選手を見てみたい……、少年が試合会場に足  
を運ぶまでそう時間はかからなかった。試合の日程を調べて、  
貯めた小遣いで行った初めての観戦で選手たちの気迫を直接  
肌感じた。そして——その日に起こったあの出来事は……今  
も青年の記憶に赤裸々な思い出として刻まれている。

その出来事をきっかけにしてプロレスにも次第にのめり込  
んでいった。

高校はレスリング部に入り、大学はプロレス研究会に所属し  
た。その後学生プロレスの選手として腕を鳴らしていた実績  
を買われて、二十二歳のときに熱望していたレッスルスターダ  
ム ZERO の一員として名を連ねることができた。敬愛してやま  
ない士狼選手が在籍するプロレス団体への入団が許された決  
定通知は今も大切に引き出しの奥に保管している。

士狼選手の存在をテレビで初めて知った中学時代から早十  
年。

三十代に届こうとする先輩は当時と変わらずに格好よかつ  
た。

訊けば体重 **85kg** ほどだと言うから若い頃とそう体型は変わ  
っていないらしい。それどころか年齢を重ねて貫禄すら感じさ  
せる体はより魅力的に青年の気を引いた。筋肉の塊をぼこぼこ  
と寄せ集めたような筋骨逞しい肉体に、びっちり穿かれたツ  
ートンカラーのショートスパッツが似合っていた。脹脛まで覆  
うボクシングタイプのリングシューズと合わせて同じデザイン  
が施された特注品で、士狼モデルとして限定販売もされてい  
る。

レッスルスターダム ZERO 一番の人気レスラー。

自分がどんなに手を伸ばしても届くことのない絶対的スタ  
ーだ。そんな、王座に長年君臨し続けるチャンピオンのその広  
い背中が、追いかけていた背中が、突然消えてしまった……。  
引退——。

本人の口から直接その二文字を聞かされたのは、一ヶ月ほど  
前だった。

嫁に赤ん坊が出来たからだ、彼は言った。

あつからかんと、事も無げに、プロレスになんの未練も滲ま  
せず。

いつ大怪我をするかもわからない危険と隣り合わせのレス  
ラーという職を辞して、今後は指導者として若手の育成に携わ  
りたいというようなことを言っていた。正直、その辺りのこと  
は詳しく覚えていない。青年の脳味噌は、冒頭に吐かれた二文  
字にすっかり麻痺していた。ただ、照れ臭そうに白い牙を見せて  
笑っているその笑顔だけが印象的だった。

絶対的王者が赤子に負けたのだ。

膝を折ることを知らない彼に膝を折らせたのだ。

ジュニアヘビー級チャンプを玉座から引き摺り下ろしたの  
である。誰一人として成し得なかったことを、まだ産声すら上  
げていない無力の赤子が。

引退をそんな理由で決めたのか——、青年の空虚な胸中にポ  
ツと湧く思い。

青年の目には全幅の信頼を置いてきた士狼がどこか他人の  
ように映ったに違いない。

我武者羅に努力してきた姿を最も身近に見てきたからこそ、  
こうも簡単に榮譽を捨てる行為が信じられないだろう。平凡な  
一レスラーにすぎない青年にとって、チャンピオンとして遙か

な高みを長期に渡って見続けてきた士狼の胸の内など察せら  
れるはずもなかった。執心など持つ必要ないほどに士狼は強か  
ったのだ。

しんと静まり返る会場のなか、引退の「カウントダウン」が  
緩やかに鳴っている。

それはどこか鎮魂の鐘のように青年には聞こえた。

彼の英雄は今、死んだのだ。

栄光を極めた男の最後の姿をしつかり目に焼きつけようと、  
会場にいる誰もが瞬きすら惜しみながら涙を浮かべていた。モ  
ニターに次々と映し出される起立した観客、団体関係者、実況  
アナウンサー、そしてカメラは最後にチャンピオン士狼へと大  
きく寄っていく。目を閉じている。片手を胸にやっている。お  
そらく彼の胸に酸いも甘いもさまざまな思い出が去来してい  
るのだろう。

試合終了を告げる最終のゴングがしめやかに鳴る。

競技人生にピリオドを打つ鐘の音だ。

音の余韻が尾を引くなか、最後に高らかに士狼の名前が実況  
アナによってコールされる。それを合図にして彼の入場曲が爆  
音とともに響き始めた。リング内を一周し、満場の拍手を浴び  
ながらリングを下りる士狼の顔は晴れやかで一点の悔いも感  
じられなかった。第二の人生へと続く花道を元王者は力強い足  
取りで歩いていく。

見慣れた背中が入場ゲートの向こうに消え、中継が終わり、  
ついには灰色になった画面を虎の青年はただ呆然と空虚な瞳  
に映していた。

言い様のない恐怖が込み上げる。

覚悟はしていたのだ、引退の件を耳にしたときからこの日が

来ることを。毎日を怯えながらも仕方のないことなのだと必死に自分へ言い聞かせてきた。だが……現実はこちらも残酷なのか。こゝも胸を掻き毟られるものなのか。

今日、たつた今、目の前で突きつけられた事実が青年の喪失感を極限なく煽っていく。

足元から痺れを伴った悪寒が這いのぼる。

得体の知れない感覚に青年の体は大きくよろめいた。

吐き気がする。身が凍えるほどの冷たい血液が全身を駆け巡り、嫌な汗が毛穴という毛穴からどつと噴き出した。それでも震える口をどうにか結び、

「先、輩……」

しかしその後が続かなかった。助けて、と言語中枢から打ち出した言葉は紡がれることなく虚しく息となつて乾いた舌の上を通り過ぎていく。

胸が、苦しい――。

ただ激しく打ち鳴る動悸のリズムだけがいやに耳奥に響いた。

思考に霧がかかり、視野が急速に暗く窄まり始めた頃だった。もしこのとき、あと数分でも遅れていたら青年は気を失っていたかもしれない。暗転していく意識の中で、駆け寄ってくる誰かの足音を聞いていたかもしれない。卒倒して見知らない天井を見ずにすんだのは、入場門へと続く通路の向こうから流れてきた賑やかな喧騒が、青年の遠のく気を糸一本で繋ぎ止めていた。

近づいてくる複数人の声を鼓膜は的確に拾い上げた。

彼の顔ににわかに血色が戻っていく。爛々と目に精気が漲っていく。いったいどんな特効薬を処方すればこうまで劇的に

快方するというのか。

背後で靴音が止む。

やがて青年の背中へとかけられたのは、彼が学生時代からずっと敬愛し続けてきた男の声だった。

「よお虎鉄。俺の一番弟子よ、俺の有終の美はたつぷり堪能できたか？」

遠目からも一目でわかる図体のでかさは素直に羨ましかった。

とりわけレスラーとしてはそれだけで大きなアドバンテージになる。資質は置いておいたとしても恵まれた体格は望んで手に入れられるものではない。無論、無駄に脂肪ばかりつけただけの巨体は話にならないが、こいつは違う。

士狼は目の前に佇む後輩の背を屈託のない笑顔で見やった。

己の頭ひとつ分ほどは高い。近い身の丈はさながら大きな壁だった。超ビッグサイズのTシャツとスウェットパンツが手足を動かしただけでも破けんかというほどパツンパツンに突っ張っている。と言つても脂肪太りではない。初対面の人に彼の印象を訊いたなら、まっさきに頭に浮かぶのは筋肉達磨という四文字かもしれない。適度に蓄えた脂肪の下に何重にも折り重なった筋肉の束があることを容易に感じさせる体軀は厳つい一言に尽きた。対戦相手からしてみればこれほどやり辛い相手もないだろう、縦にも横にも広いのだ。それでなくても肉食獣の代表格、虎の、しかも最大の亜種であるアムール虎種なのだからなおさら威圧感がある。その凶悪な眼光に睨まれたら並みの選手ならそれだけで金玉が萎縮してしまうに違いなかった。



そんな虎鉄の振り返った顔を、しかし士狼の笑みはなぜか引きつって迎えた。

何も凄みの利いた眼光に心臓が跳ねたのではない。そんなものはとうに慣れている。

「お、おい虎鉄、お前なに泣いてんだ？」

士狼が面食らったのも当然。恐いものなしの大男が目を見つ赤に腫らしていたら笑顔も凍りつくというものだ。

「泣いてなんかいいえっすよ先輩。これは、その……水です」

「いや、そんなところから水は出んだろ普通」

照れ隠しに放ったボケか、それとも真つ当な理由だと思つて大真面目に言ったのか。いずれにしても『鬼の目にも涙だな』と喉まで出かかった台詞を士狼は飲み込んだ。これが普段なら容赦なく茶化していたのだけれど、今はさすがに躊躇<sup>ためら</sup>われた。士狼自身も、たつた数分前に観客の熱い涙を見て涙腺を刺激されたばかりなのだ。

太い腕でごしごしと涙を拭う後輩へ、

「いや、まあ……泣いてくれるほど感動してくれたなら俺も嬉しいけどよ」

かける言葉としては最もふさわしいだろう台詞が素直に口から転<sup>ま</sup>び出る。

「うス……先輩の最後の特技、一生目に焼きつけときます」

涙を拭い拭い言う虎鉄へ士狼はマズルから長い息を漏らしながら微笑んだ。

同じプロレス団体に所属する先輩と後輩、三年間続いてきたその間柄は本日をもって解消されるのだ。私的な関係はこれからも続いていくとしても、レッスルスターダム ZERO を去る以上はどうしても距離があく。毎日見てきた顔が見られなくなる

と思うと、一抹の寂しさが士狼の胸に湧いた。

しんみりした雰囲気<sup>ふんいき</sup>を吹き飛ばすように士狼は虎鉄の腕を景気よくはたいた。

「おらっ、俺の新たな門出にいつまでも辛気臭くしてんじやねえぞ！」

「うっす」

「よしっ！ まあなんだ、まだ時間あるならもう少し俺につきあえや、おら行くぞ」

士狼はトレーナーやマネージャーたちに別れを告げると選手控え室へと足を向けた。

使い慣れた個室も今日に限っては少々居心地が悪い。

ドアノブを回し一歩足を踏み込むと、むせ返るほどの芳香が鼻を衝いた。

「ったく、マネにはあれほどドアは開けっ放しにしとけと言つたのによ……はあ」

朝から数えて何度目の溜息か。士狼は黒鼻をむず痒そうに鳴らして言った。

昨日まで白黒の無彩色や金属色しかなかった室内は今朝からうるさいほどの色彩で溢れている。壁に沿ってずらりと並ぶ豪華なスタンド花のせいだった。勇退祝いや感謝がこもった花の贈り物はどうかやら彼には鼻梁の皺を増やすだけだったらしい。立て札に書かれた、親交のある友人やスポンサー、他プロレス団体の関係者がこの場にいたらきつと彼の洪面に苦笑しただろう。

自分好みだった殺風景な景觀を最後の最後で乱されたことに辟易しながら、首にかけていた汗拭きタオルを後ろへ放った。すぐ背後にいた虎鉄がさつと受け取る。

「このことも別れだなあ。次は誰がこの部屋の主になるんだか。……俺はお前だと思つてたんだがな」

「……」

士狼は無言を背に受けながら、私服が無造作に投げられている長テーブルの方へと進んだ。

チャンピオンともなれば専用の控え室が宛がわれる。室内にシャワーブースやトレーニングスペース、仮眠所まで揃った厚遇ぶりだ。

今回の引退試合はレッスルスターダムZEROが所有するアリーナ『レッスル武闘場』でのホームマツチであった。ちょうど団設立二十周年ということも重なって、客入りや贈答の花々を見るに大々的に広告や宣伝を打ってくれたらしい。そんな資金力のある大手プロレス団体なのに、設備の整った個室を宛がわれるのは王者だけというのは、選手たちの競争意識を煽るためもあつただろうか。

テーブルそばの壁に嵌められた畳二畳分ほどの大きな姿見の前で士狼は足を止めた。

その極狭い一部分だけ足元の床の色がくすんでいるのは何も清掃員が拭き忘れたからではない。

そこは試合前のいつもの定位置。

闘いへと挑む己を鏡に映し、もう一人の自分へ問いかけ、精神を研ぎ澄ます場所。

明日以降、この鏡は誰を映し続けるのだろうか——灰緑色の瞳が自嘲気味に揺れる。今はただの一般人となった狼男が一人映っているだけだ。

見続けたまま士狼はゆっくり口を開いた。

「虎鉄。お前が団に入ってきたときは、ヘビー級チャンプにな

るのはお前しかいないと思つたもんだ」

「……うす」

「俺が直々に指導してやったのにまったく……。ついに三年経つても芽すら出ねえじゃねえか。しかし俺の目が節穴だったとは思えねえ。確かに見抜いたんだ、お前が本気になれば天辺を狙える。……なぜ本気にならねえ？」

「……」

面と向かつてではなく、独り言のように淡々と流れる説教だが抑揚に棘はない。不肖のレッテルを貼りはしたもののそこに悪意は乗っていないかつた。

「……すんません」

間をずいぶん置いた返事に士狼は口角を崩した。

「そこで謝るな、そこは一生懸命に頑張りますだろうが」

「うす……すんません」

「お前つて奴は。出来の悪い後輩ほど可愛いとは言つてやりたいが、お前は可愛げの欠片もないほど図体でかいからなあ」

苦笑いを浮かべながら言うや士狼は着替えようとニーパッドを外した。

虎鉄を控え室へと招いた理由は他でもない。先輩として最後の手向けの言葉を何かかけてやりたかったのだ。まさかそれが説教から始まるとは当の本人が一番驚いているかもしれない。「そういえば中坊の頃からでかかったと言つてたよな」

リングシューズに手をかける士狼の脳裏に当時の光景がよみがえる。

三年ほど前に虎鉄と出会った。団オーナーから引き合わせられた学生プロレス上がりの新人の第一印象はただ『でかい』で埋め尽くされた。見上げて話す経験はそう憶えがない。訊けば、

士狼がプロレス界の新星と呼ばれて世間から脚光を浴び始めた頃、中学生だった虎鉄の立つ端はすでに士狼と同程度には高かったというのだから驚きだ。

そんな将来有望株候補が開口一番、

『初めて士狼選手を見たときからずっと憧れてましたっ！』

それは王者にとって耳にタコができるほど聞き慣れた台詞だった。

胸に募る熱い感情をどうにか形にして伝えようとするのだろうが、結果、緊張も手伝って陳腐極まるありふれたものに落ち着くのである。誰もが緊張と憧憬に頭を下げて耳まで真っ赤にしながらその台詞を言う姿を何度も見てきた。

しかし、虎鉄は他の奴とはどこか違っていた。

具体的にどここと上げるとは難しかったが、纏う雰囲気は違った。

言葉の端々に、一挙手一投足に、度を越すほどのリスペクトが込められていた。

上辺だけ取り繕ってヘコヘコと頭を垂れるだけの後輩はごまんといる。だが虎鉄のそれは少しばかり常軌を外れていた。例えば、後輩たちに雑用を頼むことがたまにあるのだが、彼は御用聞きのように毎日『何か用はないスカ』と訊いてきた。声をかけたら言い終らないうちに作業を放り出して猛ダッシュで駆けてきた。きつと奴の入浴中に呼べば素っ裸で飛んでくるに違いない。忠犬でもここまで篤実ではあるまい。

そんな姿を見て、士狼は心動かされたのだ。

こいつは心底、俺を敬い、真摯にプロレスを愛しているのだと。今どき珍しい若者じゃないか——トレーナーに任せずに後輩を直接指導してみたいと思ったのは初めてだった。

それから公私を共に過ごす時間が多くなった。

時間が許す限りマンツーマンで基礎から叩きなおした。普通なら弱音を吐いてもおかしくない厳しいトレーニングも黙ってついてきた。その甲斐あって驚異的とも言えるほどの数値を叩き出しはするものの、それが今もって試合結果に結びついていないことが、甚だ不思議でならなかった。

はきはきとした当初の初々しさからはだいぶ角が取れたが、それでも士狼に対する姿勢は少しも変わっていない。確かに図体は可愛げがない。しかし、学生時代から長年慕ってくれることについては、頬が緩むことも事実だった。

元来面倒見のいい性格ではない。だから虎鉄は例外だ。

それまでひたすら一人でストイックに体を苛め抜いてきた。士狼は最後に残っていたショートスパッツを躊躇うことなく足元に落とした。

鏡の向こうに生まれたままの姿になった己が映っている。

高負荷トレーニングに耐えてきた肉体は逞しく、どこもかしこもくつきり深い陰影を刻んでいた。汗に寝てしまった体毛の下で弾力に富んだ筋肉が弾けんばかりに膨れきっている。厚く広がる胸板は今まで何回打ち叩かれてきただろうか。静かに波打つシックスパックはどれほどキックを受け止めてきただろうか。筋繊維を極限まで太らせたような太腿はいったい何人の首を固めてきただろうか……。

敗れ散っていった幾人もの猛者に思いを馳せていたとき、意識がスッと引き戻った。

鏡に大きな影が落ちているのに気がついたのだ。

いつの間にか虎鉄が背後に突っ立っていた。

「先輩、やっぱ辞めんといってください……」

切々と訴えるような哀訴がすぐ真上から降ってくる。背中に虎鉄の体の温もりが伝わってきた。

「急にどうした虎鉄？　らしくねえな」

そう問うのも無理はない。すっかり承知していたと思っていた引退を今さら引き止められるとは頭の中に露ほどもなかったのだ。それも彼らしくない弱々しい声色で言われたら誰でもぎよっとする。己を背後からすっぽり包み込むほどの大きなガタイを鏡越しに見やったが、肝心の表情は俯いていて窺い知ることはできなかった。

体にびったり寄り添ってくる姿はまるで親に甘える子供のそれだ。

「おい、そんなくつつく暑苦しい」

「嫌っス」

「お前なあ……俺の汗でお前の服まで汗臭くなるぞ。お前がいなら構わんが……いいや俺がよくない」

そう言って体を揺すってみたものの離れる気配は一向にない。

しかし、今まで何事でもハイッ！　と首を縦に振ってきた虎鉄の、それが初めての拒絶だということを士狼ははたして気づいたのだろうか。

離されまいとする虎鉄の手が士狼の両脇腹を押さえていた。

「まったく……お前は乳離れもできてねえ大きな餓鬼かよ、手に負えねえな」

「餓鬼でもいいス」

「阿呆。何も今生の別れじゃねえんだぞ、寂しいならいつでも俺んとこに来ればいいじゃねえか」

「そういうんじゃありません。やつぱり先輩が隣にいないと自

分は……」

「お前……」

埒が明かないやりとりに士狼は絶句した。

先輩後輩の垣根を越えて親しい友人のように甘えてくることはこれまでも度々あった。五歳しか年齢が違わないこともあって士狼も兄貴分としてその都度親身に接してきたが、ここまです露骨に甘えられたのは初めてだった。裏を返せばそれほど士狼の引退がショックだったというわけだ。

無下に振りほどくわけにもいかず、かといってこのまま徒に時が過ぎるのを待つわけにもいかず。気まずいというか照れ臭いというか、どうにも言いがたい感情に体中がむず痒くなる。何かないかと慰めの言葉を模索する士狼の思考がふと途切れた。

剥き出しの尻に加わる圧が強くなっていた。

「くすぐつてえだろうが」

自身の押し潰された尾に尻をくすぐられて、たまらず士狼は口を尖らせた。

「……………」

「おい聞いてんのかよ？」

なぜか無言のままの虎鉄。

問うた士狼ははたと気づいた。

鏡の中の己の脇腹に回っていた虎鉄の手が、いつの間にか際どい位置にまで下がっていたのだ。一本の指の先が濃い陰毛の草叢に没していた。

それを自覚した瞬間、下腹部に這わされる指の感覚が生々しく士狼の触覚を刺激した。

虎鉄の熱い湿気を帯びた吐息が鼓膜を撫でたような気がし



た。

とつさに虎鉄の腕を振り払った。士狼の局部が大きく揺れる。  
「馬鹿野郎！ いい加減にせんと俺も本気で怒るぞ！」

なぜだか叱責しなければいけない気がした。理由はわからない。得体の知れない何かによって雰囲気の問題が名状したいものに変容していた。決して受け入れられることのできない何か……。本人も自覚することのない本能の部分が、それに蓋をして見て見ぬふり、つまり遮断したいがために叱責という強い行為で強制的に流れを断ち切ったのではないか。

「……すまん、冗談だ」

士狼は鬱々と込み上げる不明瞭な苛立ちを払拭させるかのように話題を変えた。

「ところでよ、お前少し前に俺のために私的な引退試合を組みたいとかって言ってなかったか？ その案件はどうなった？」  
その話が虎鉄から持ち込まれたのは、引退を世間に公表してから数日経った頃だった。

「先輩、覚えていてくれたんすね……」

テーブルの上に置いておいた私服を身につけていると、士狼から一步距離を置いた虎鉄が言った。あれほど沈鬱だった気配は消え、何とも嬉しげな表情を浮かべている。

どうやらそんなに心配しなくてよさそうだ。士狼は胸を撫で下ろした。

「そりゃあ、そんなサプライズを用意してくれるなんざお前ぐらしいかいねえからな。日頃から昼飯奢ってやるもんだな、殊勝な心がけだぞ我が愛弟子よ」

愛嬌を滲ませて言うのと、

「うっす師匠っ！」

押忍のポーズを取った愛弟子は牙を見せて笑った。

先ほどの雰囲気は嘘のように霧散していた。いったいあれはなんだったのか。士狼はワイシャツのカフスボタンを留めながら考えたが、やがて疑念は弾む会話に押し出されるようにして頭の隅から消えていった。

虎鉄から持ちかけられた私的な引退試合というのは彼としての願いらしい。

レススルスタードム ZERO に虎鉄が入団してきてからこの三年間、両者のマッチが実現したことは、シングル・タッグ含めて一度もなかった。理由はいくつかある。所属する選手が多いことや、実力差、実戦経験の差などあるが、体格差も要因のひとつに挙げられるかもしれない。単純にパワーだけなら階級が上の虎鉄が上回る。一方的な試合になることを幹部が忌避した結果という線もあるが、ただ縁がなかっただけとも言えた。

引退するまでに一度は胸を借りてみたかったと言われて、さして断る理由もない士狼は二つ返事で承諾していた。

「で、いつやるよ？ 全部お前が仕切ってんだろ？」

スケジュールの都合上、現役のうちというわけにはいかなかったが、まあそう違うまい。

「うす、今のところ一週間後の土曜で、試合開始は夜七時を予定してるんすが」

「ナイトマッチか、いいネエ、OKだ……場所は？」

「その件なんすが、初めは前にお知らせした通りこのレススル武闘場を使わせてもらおうと思ってたんすけど、予定変更して自分が休みの日にプライベートの練習試合で使ってるところがあるんす。百人入るか入らないかぐらいの小さな会場で恐縮なんすが、先輩さえよかったらそこで……」

心底申し訳なさそうに虎鉄が言う。

「へえ意外だな、俺に隠れて鍛錬を積んでいたとはな」

初耳だった。休日を費やしてまでプロレスに励んでいたとは。もしかしたら彼なりに試合で活躍できていないことを気に病んでいたのか。先ほど成績が振るわないことを冗談でもなじってしまったことを今さらながらに後悔した。

「本当にすんません、レッスル武闘場はやっぱり自分にはまだ分不相応で」

「気にすんな。お前が使っているリングも見てみたいしな。いやあ、そんな小規模な所で闘うのは新人以来か……逆に新鮮かもしれない、楽しみだ」

「ありがとうございますっ、自分も精一杯お相手します！」

念願叶って満面を喜色に染めて頭を下げる虎鉄に、士狼は破顔した。

それから小一時間かけて当日の試合展開を二人は話し合った。

公式試合ではないから、わざわざブッカーに筋書きを頼むこともせず、自由気ままに段取りを編んでいく。もちろん虎鉄がジョバー、つまりやられ役だ。熱く試合を盛り上げて最終的には予定通り敗北する。ジョブが下手なら観客は白けてしまうから、いかに主役を立てて盛大に負けるかにかかっている。合間に士狼の華麗な技巧技を挟みつつ、血湧き肉躍るような流れを決めていく。

何て楽しいのだろう。

士狼は学生時代に入っていたプロレス同好会を思い出していた。熱血野郎ばかりの集まりで、普通のサークルでは出会えないような人たちがいっぱいいた。他校との交流会ともなると

試合は言わずもがな、技の研究で議論を交わすと侃侃諤諤の一言に尽きた。つまり皆口々に言い合うから收拾がつかなくなるのだ。それがまた面白かった。

当時と同じように筋書き作りは白熱した。

虎鉄がこうしようと言えば士狼はああしようと言う。逆もまた然り。

お互いに少年のように目を輝かせながら話し合う姿は、プロレス好きという共通の趣味を持つ親友のように傍目には映っただろう。

粗方固まってきたところで虎鉄が鼻息荒いま言った。

「それで最後は先輩の必殺技、ムーンサルトプレスをぶっ放すんスッ！」

士狼の返答は差し出した右手だった。虎鉄ががっしりと握手に応える。

後輩が己のために催してくれる私的な引退試合。こうも嬉しい贈り物があるだろうか。そんなに器用とも言えない虎鉄の手作り感あふれる試合を是非とも成功させてやりたい。士狼は握り返してくる大きな手の温もりをじんわり感じながらそう胸に誓った。

そして、申し訳ない気持ちと言葉となってこぼれ出る。

「さつきは本当にすまんかったな……急に怒鳴ったりして」

後輩の心中を察し切れなかったことを素直に詫びた。

虎鉄は寂しかったのだ。

犬っころのように毎日付き従ってきた姿が脳裏に浮かぶ。言い渡した用件を嫌な顔ひとつせずにもしろ喜んで聞いてくれた。オフ日に試合観戦に誘おうと声をかければ数秒も待たずにすぐ頷いた。それはもしかしたら、さつき言っていた休日のプ

ライベートな練習試合を裏でキャンセルさせていたのかもしれない、俺のために。こいつならきつとそうする、そういう奴だった。

この三年間で結んだ絆の太さは殊のほか太かったのだ。少なくとも虎鉄にとつては離れがたいと思うほどに。

今日をもつて互いの顔を見ることは極端に減るだろう。慕い続けてきた人が突然いなくなってしまったら俺ならどう思うだろう。虎鉄の気持ちを自身に置き換えてみれば、先ほどの意味不明な苛立ちで突っぱねてしまった行為がとても残酷なもののように思えた。今さらながらに酷い仕打ちをしてしまったと後悔の念が込み上げる。

やはりこいつは可愛い後輩だ。

「お前が後輩でよかったよ。三年間ありがとうな……」

虎鉄はただ黙って首を横に振っていた。その目尻にうつすら輝きを見たのは光の加減かそれとも気のせいかな。

「本日限りでレスラーは辞めるが何もプロレスに関わることを辞めるわけじゃねえ。パーソナルトレーニングジムを開いたら後進の指導や養成をするつもりだからな。お前がもし今後鳴かず飛ばずでここを首になつたら、そのときは俺が雇ってやるよ」

土狼はすこぶる似合わないウインクを送りながら鼻を鳴らした。

「先輩……自分、ずっと不甲斐なくて本当すみませんでした……」

「しゅんとすんな。お前も早く嫁をもらえ。守る人ができたら望まなくても強くなる」

肩を落としてしまった後輩へ送る最後のアドバイスを、

「そう、っスね……」

虎鉄は弱々しい声でそう言いながら受け取っていた。

\*

欲望にまみれた都会の繁華街は夜の帳に包まれようとしていた。

大通りは夜遊びに興じようと繰り出す人たちで賑わうなか、横へと少し道を曲がれば、薄暗い路地を抜けた先は大抵この繁華街も様相が一変する。

例に漏れずこの裏通りもまた、華やかな世界とは無縁だった。耳を澄ませばどこからともなく漏れてくるアツペンポの音楽がひっそりと流れる通りに人気はない。空調設備か何かの低い駆動音や表通りの喧騒が染みる空間を、切れかかって明滅するクラブの妖しい色のネオンだけがただ一つの華を添えていた。

路地裏の空は大概狭い。

見上げれば、雑居ビルの角々に雑に切り取られてわずかに残る夜空は、欲を発散しようとする者たちを今夜も桃源郷へと誘おうとしていた。

その空の下、また一人、また一人と人影が吸い込まれていく場所があった。

建物と建物のわずかにできた狭間に細い下り階段が口を開けていた。

周りにこれといった店看板もなく、取り立てて人目を引くような物がないのにもかかわらず、先ほどとは違う男がまた一人、暗い階下へと姿を消していく。

下りた先には一本の通路がまっすぐ伸びていた。

左右に等間隔に灯された照明が剥き出しのコンクリート壁を淡く照らし出している。極シンプルだが洒落た雰囲気がある。通路の先、突き当たりにある重厚な樫の扉にこの場所の手がかりがあった。一本の細いダウンライトの光に浮かび上がっている、扉に掲げられた金属プレートには、『1st RING』の横文字が刻まれていた。

1st RING——完全会員制のプロレスリング会場だ。

扉を夜間の六時から九時の三時間のみ受け付ける専用カードでロック解除して開ければ、その先に高級感あふれる調度とシックな駱駝色で統一されたラウンジが広がっていた。まず初めて足を踏み入れた客なら、一瞬、入ることを躊躇するだろう。なんせ裏通りにある薄汚れた階段からは想像もつかないほど瀟洒な空間なのだ。

タキシード姿の受け付け員がいるフロント前を横切り、通路を右手に曲がってドアを開ければ試合会場となるリングがあった。

リングを中心にして設置された座席数はざっと百席。

余裕をもって設えられた革張りの一人掛けソファは遊興慣れた人たちですでに満席状態で、これから三十分後に開催される試合を今か今かと待ち侘びていた。

リングへと続く通路の反対側、左手を進んでいくと選手用の控え室が並んでいる。

そのなかの一室に今夜の主役の一人となるべき男の姿があった。

男は椅子にどっかり腰を下ろすと深く息を吐いた。

そして今度は肺いっぱい息を吸う。

マズルを飾る針のように長く太い白髭がわずかに揺れる。ゆっくりと視線を投げれば向こうの姿見に己が映っていた。山吹色と黒の虎柄も勇ましい顔の中で、研ぎ澄ませた刃のような双眸が睨んでいる。男を知る者が見たら喜怒哀楽の一切を省いたその表情に肝を冷やすだろう。いや、今夜だけは愛嬌の欠片もない凄烈なそれにもなる。

この日が来るのをどれほど待っただろうか。

刻一刻とその時が迫っている。

これよりコスチュームに着替え終えたとき、おそらく鏡の中には別人格となった己の姿が映っていることだろう。はたして平常心が保てているかどうか。ともすれば昂揚するあまり気が触れてしまうかもしれない……それほどまでに今夜の一戦は男を惹きつけてやまなかった。

ふと鏡面に小さな輝きが宿った。

「笑うか……」

男の口角の皺がさらに深くなる。固く閉じていた口元から気づけば牙が覗いていた。そう、男は笑んでいたのだ。

隠し通せない喜悦は、しかしドアのノック音にたちまち消え失せた。

許可を得て一人の青年が入ってきた。精悍な顔をした二十歳前後のシベリアンハスキー種の若者だった。彼は懇懇に一礼してから、

「あと三十分程でお時間となります。何かご用がございましたら何なりと仰ってください」

「俺の相手はどうしてる？」

「はいっ、士狼選手はつい先ほどご到着されて今はウォーミングアップに体を動かしておられます。大牙さんと一戦交えるの



が楽しみだと仰っておりました」

「……随分と余裕だな」

「はい？」

舐められたものと、男は内心で舌打ちした。

入り時間もその台詞も舐め腐っている。だがそれも仕方あるまい、俺は人様に誇れるような結果をろくに残せていないのだから、あちら側では弱者に対しては王者も驕るといふものだ。だからこそ倒し甲斐があるというものではないか。下が上を討つ。その図式は観客が最も盛り上がり、また求めるものだ。1st RINGでのリングネーム、大牙——虎鉄は脳裏に描いた己の勝利する姿にニヤリとほくそ笑んだ。

「あの、なにか仰いましたか？」

「いや……おい、黒峰こっちへ来い」

人差し指をくいと曲げて椅子の横に青年を呼びつけるや、虎鉄が太い腕をぐっと伸ばした先はその黒峰の股間。

「あつ？」

ジャージ越しに無造作に一物を握られた彼の口から驚きの声上がる。

「知っているぞ？ お前、俺のことをそういう目で見ていたんだな」

「な、何を仰って……」

ハスキー青年の凛々しい顔が見る間に赤くなる。

「図星か。従業員のなかにお前が便所で俺の名前を呟きながら千摺りこいてる姿を見かけた奴がいる」

「えっ……」

絶句して微動にもできない黒峰をいやらしい目で見上げながら、

「体は正直だな、もう硬くなってきたやがった」

揉んでいくうちに、柔らかかった肉塊に急速に芯が通っている。

ここの従業員かそれともレスラー見習いか。Tシャツを着た青年の上半身は遅しく盛り上がり、首の太さや雰囲気から一目で格闘技を嗜んでいることがわかった。そんな、簡単に力に屈しそうな若者が一方的に与えられる恥辱に耐えている。見れば瞳はうつすらと濡れ、半開きのマズルからは甘ったるい息が漏れ始めているではないか。

すっかり出来上がった突起の先端を、虎鉄の指が妖しく這いまわる。

「はうつ、はあつ……もう止めてくださいっ、大牙オーナー……」

なるほど、その肩書きを持つ者には容易には逆らえない。

しかし、完全会員制プロスリング『1st RING』を主宰するのが本当に虎鉄本人なのだとしたら、いったいその資金力はどこから来ているのだろうか。土狼から不肖のレッテルを貼られたこの男のどこにそんな才覚が眠っていたというのか。

虎鉄はもう片方の手を加えて激しく揉みしだいた。猛る陰茎と迫り上がりつつある陰囊を。

「どうだ気持ちいいだろう？」

「い、嫌ですっこんなっ、こんな恥ずかしいことっ」

二人きりの部屋で男が男の股間をまさぐっている。一人は興奮に海綿体へ限界まで血を巡らせ、もう一人はその硬い充血ぶりを吟味するかのように手を這わす。今この瞬間、誰かが訪れたならその人の目にはこの光景はどのように映るだろうか。

だが、この青年、解雇覚悟で逃げ出せば辱めを受けずにす

むはずなのに、そうしないということは、従業員からの報告はあながち間違っていないということだ。好意を寄せている者の手によって愛撫される気持ちよさは、どうやら格別にいいらしい。

「くうつうう、本当にやめ、てくだつ……これ以上は俺つ」

「営業中におつ勃てやがってけしからん奴め。この厚かましい愚息は俺をオカズに臭い汁を何度ぶつ放したんだ、んん？」

爪先で裏筋辺りをくすぐりながら言った。

「くうつ！ ああう、か……数え切れないぐらいですつ、あああつ！」

虎鉄の口の端が満足げに吊り上がる。

羞恥極まることを自白させられた黒峰は、もう観念したのか、荒くなった息遣いを殺すことなく露骨に喘ぎ始めた。高まっていく射精感にすっかり涙目になりながらも虎鉄へと落ちる視線は訴えていた、早くイかせてほしいと。

先っぽの濃い染みをなぞった指を舐めると、先走りの塩気が舌に染みた。

虎鉄は勃起しきった肉柱をがっしり掴むや容赦なく上下に扱く、扱く、扱く！

「はあつはつはああーっ！！」

襲い来る快感に必死に耐えていた青年の口からたまらず大きな嬌声が上がった。天井を見上げ、だらしなく口を開き、ガクガクと脚を震わせて。

黒峰の全身が硬直した次の瞬間、

「大牙さん俺いくついくうつ………つぐつはああああつ！！」

マズルをさらに大きく割って若者は絶頂に打ち震えた。

布越しでもわかるほどペニスが脈動していた。おそらく下着の中で夥しい量の精液が噴き上がっているに違いない。尿道口から勢いよく射出する子種に押されて布地がぶつくり盛り上がる。そして瞬く間に編み目から濃い粘液がどろりと滲み出てきた。

牙の先から一筋の涎が糸を引いて落ちる先、ジャージの裾口からも白い体液がぽとぽと滴っていた。

肩で荒い息をつく青年の、その恍惚に蕩けた表情を見ながら、虎鉄は指に付着した精液の臭いを嗅いだ。

独特の青臭さが鼻を衝く。

鼻腔を通る搾りたての強烈な精液臭に目を細めた。

それを口に運ぶと、青年も嬉しげに目を細めるのを彼は見逃さなかった。新しい楽しみを見つけた瞬間だった。

「辛抱できなくなったらいつでも俺のところに来い。たっぷり相手してやる」

そう言ってから心ここにあらずといった顔の黒峰を部屋の外へ送り出すと、虎鉄は椅子から立ち上がった。鏡面一杯を巨体が埋め尽くす。

「……さて、頃合か」

また一人となった空間に独白が静かに染みる。

時間が差し迫る。そろそろ世俗にまみれた衣を脱ぎ捨てねばならない。虎鉄は姿見に映っているＴシャツとスウェットパンツ姿の己を冷ややかに見やった。

何と凡庸な格好だろう。

これからリングで一世一代の一戦とも言うべき試合を披露する男の姿ではなかった。品性の欠如、見苦しく浅ましいと思えた。まったくもって度し難い、虎鉄という図体のかさ

が取り得だけの愚鈍なレスラーは。

「消え失せろ」

侮蔑の一言は瞬く間に男から醜い衣を剥ぎ取った。

そして、生まれたままの姿になった男はようやく鏡の中の己を享受するのである。

鏡の前で着替えるようになったのは士狼の影響だった。模倣することで多少なりとも彼のことを理解できると考えたのだ。すっかり習慣化した今では、日常から非日常への切り替えや、試合へ臨む己を鼓舞する言わば儀式のような役目を担っていた。もう一人の自分に生まれ変わるのである。

はち切れんばかりの堂々たる肉体美が目の前にあった。

筋肉の鎧とはよく言ったものだ。どこもかしこも分厚いそれに覆われた体は、雄の頂点そのものを見るようであった。男すら見惚れる男というやつだ。もし銭湯ですれ違ったなら誰も彼もが思わず振り返ってしばらく虎鉄を視界に収めようとするだろう。彼らの羨望を掻き立てるのは言わずもがなその武骨な裸体と、あとひとつ、下半身にゆっさゆっさと揺れている男たり得るその部分が脳裏に焼きついたまま離れないに違いない。鏡の中で、股間に息づく暴力的な性器が重たげに頭を垂れている。

男は深呼吸した。雄の醸すむわりと噎せるほどの体臭が鼻を刺激する。

若い肉体が猛っている。

自身でさえ御しきれないほどの精力が毛穴という毛穴から噴き出していた。

この今は眠りにについている体の中にいったいどれほど煮え滾る血潮が渦巻いているのか。すぐにでも発散しなければ

ば暴発しそうだった。だが今しばらくの辛抱だ。悶々としたこの行き場のない感情を鎮める、最善かつ唯一の方法を己は知っている。もうすぐだ、もうすぐ……男は不敵に微笑んだ。

足元に置いてあったナップサックの中からショートタイツを取り出す。

レスラー大牙となる男を彩るのは黒地に炎をデザインした色鮮やかな赤。レススルスターダムNEO時のレスラー虎鉄が身につけるただ黒いだけのチープなそれとは打って変わって華のあるコスチュームは人目を引いた。特別に作らせたこの世に二つとない代物なのだから当然だ。

窮屈なサポーターの中へ愚息をどうにか押し込めるや早速それに足を通す。

アムール虎の柄も美しい黄と黒になんとその真紅が映えることか。鏡を見る男の尾が楽しげに揺れる。

「大牙となるにはまだ未完だが、それでもこれほど心躍らせてくれるとはな……」

タイツ一枚穿いただけだというのに早くも胸の高鳴りを覚えた。

「そうまで嬉しいか、王者士狼と一戦交えられることが」

大牙への変貌をすぐに遂げたいと逸る胸のうちへ男が意地悪く問う。

その返答か、白髭が震えるのを武者震いととらえた男は鷹揚にうむと頷いた。

「敬愛する先輩の引退試合だ、華々しく送り出してやらねばならん」

事前に二人で決めた段取り通りに試合を運べば必ずや客席を盛り上げることができるだろう。はたしてどちらが先に勝機

を見出すのか、そしてどちらに軍配が上がるのか、先の展開が読めない手に汗握る筋書きを作った。竜攘虎搏を演じるべく、袋から大牙のパンツをまたひとつ手に取ると、

「そう、華々しくな……」

そのアームバンドを腕につける男の言に微かに嘲弄めいた響きがあったのは気のせいかな。

腕に続いて今度は太ましい手首にリストバンドが乾いた音を鳴らすと、一段と男の表情が引き締まる。それはリングシューズを履く頃にはさらに顕著になった。

静かに息を吐く男の体から発するのは研ぎ澄まされた覇気か。

体を締めつける闘いの装具が男の精神を高みへと導いていくというのか。

今や近寄り難いほどのオーラを纏う姿のどこにも付け入る隙はなかった。男はコスチュームを装着しただけで歴戦のレスラーが帯びるにふさわしい強靱な精神力を手にしてみせたのだ。だが張り子の虎では話にならない、肝要の技量はいかほどか、それは後のリング上の楽しみとしておこう。

男の膝が再び折れる。

そして、立ち上がった彼の手に握られているのは覆面だった。それこそが大牙を成させる最後のピース。

揺るぎない自信に満ちた顔が覆面の下に封じられていく。泣く子も黙る冷厳な形相を隠すそのハーフマスクもまた異質であった。男の素顔を完全に封印するや、漂い始めた気は邪気か妖気か。こちらも他の装具と同じく黒と赤の二色で構成された色合いや、首周りまですっぽり覆う特異な形状と炎の意匠がそう思わせるのか。それとも、鋭角に空いた穴から覗く肉食獣の

獐猛なまなこか、はたまた、晒された口元に光る凶悪な牙か……。

全身黒と赤の炎に彩られた禍々しい姿は、地獄の業火より生まれし魔人を彷彿とさせた。

虎鉄から大牙へと転生した男はまっすぐに鏡の中の己を見やつた。

覆面の奥から常人が見たら悪寒を覚えるような眼光が炯々と漏れている。

「もう辛抱ならねえよ、辛抱ならねえ……」

体が熱い、燃えるように熱い。どうにも性欲が高まって仕方がない。ここ数日禁欲を続けてきたせいかな。戯れで青年を弄んで昂ぶりを落着かせようと思ったのだがどうやら逆効果だったようだ。

大牙は横にある小さな卓の上から一枚のタオルを引っ掴むと鼻に押し当てた。

「先輩……」

それは先日、レッスルスターダム ZERO の控え室で士狼が放った汗拭きタオルだった。

汗の匂いはだいぶ薄れてしまったが、それでも残っている匂いを大牙は嗅いだ。

「ああ、たまんねえぜ士狼先輩っ！」

名前を呼びながら何度も鼻をひくつかせて嗅ぎに嗅いだ。初めてこの匂いを覚えたのは中学三年の夏だった。鼻を通っていく先輩の体臭が、懐かしい十年前の昔に思いを飛ばす。

士狼選手を初めてテレビで知ったあの十五の夏――。

小遣いを貯めて足を運んだ試合会場で生の士狼選手を見たあの暑い夏の日――。



リング間近で観戦できる幸運に恵まれた少年は、瞬きすら忘れて彼の姿を追った。対戦相手など目にも入らなかった。ただ王者だけを網膜は貪欲に焼きつけた。美しくしなう肉体や艶やかに濡れる毛の一本一本、飛び散る微細な汗一粒一粒までも事細かに。

憧れの一言では片づけられない感情が自身の胸に芽生えて、いることを知った。

それは初めての、恋だった。

その感情の意味に気づいた瞬間、少年の想いは爆発的に膨れ上がった。

テレビで初めて見かけたときの胸の高鳴りは一目惚れだったのだ。選手としての士狼ではなく一個人としての、恋愛対象として士狼を好いていたのだとようやく自覚した。

リング上での勝利インタビューを終えて、客席へと投げられた彼のタオルが偶然手に舞い落ちてきたときの記憶はあまり残っていない。

気づいたら屋外の片隅にある静まり返った公衆便所の中にいた。

心臓が張り裂けそうなほど激しく拍動していた。

手の中の湿っているタオルの感触だけで、もうどうにかなくなってしまうかと思えるほど気が動転していた。個室にこもって震える手で扉の鍵をかけると、その震える手がおずおずとそれを鼻先に持っていく。鼻をスンと鳴らすと、白いタオルにぐっしより濡れる汗の香りと染みついた男の体臭が少年の頭の中を真っ白に染めた。

理性はもう片方の手を止められなかった。

ベルトを外しズボンとブリーフを下ろすと勃起していたペ

ニスが勢いよく飛び出した。

うだるような真夏の暑いなか、小便の饒えた臭いの残る個室に閉じこもって少年は汗だくになりながら一心不乱にペニスを擦った。覚えてたの千摺りを無我夢中になってやった。自分の体から匂う汗と士狼選手の汗、混ざり合う二人の汗の香りが途轍もない快感を生んでいた。まるで二人が素っ裸で激しく求め合っているような錯覚さえ覚えた。

射精はすぐさまやってきた。

腰の痺れるような感覚のあと、完全に剥けきれていないペニスの先から噴水のように白濁が迸った。頭の高さにまで飛んだ飛沫が便器にタイルにと所構わずボトボト降りそそぐ。恍惚感に襲われながらも少年は必死にタオルを嗅いだ。嗅ぐたびに精液が何本も綺麗な白線を宙へ引いていった。

どれほどの時間、自慰に励んでいただろうか。

包皮に精液が泡となってこびりつく姿と、扱くたびに鳴る淫猥な音は、少年を甘美な快楽の渦に巻き込んでいったに違いない。おそらく極度の虚脱感に襲われるまで射精し続けていたはずだ。

それが十五の夏の出来事だった。

鮮烈によりみがえった中学時代の青い性の記憶。

鏡を見ると、すっかり欲情を示している己と目が合った。そしてそこより視線を下げれば異様に膨れ上がったショートタイツで目は止まった。自然と大牙の手がその中に伸びていく。やがて取り出された男根は自身でも驚くほどまっすぐ天井を睨んでいた。そしてあの頃と同じようにタオルを嗅ぎながら竿を握った。当時と変わらない汗の匂い。変わったのは己の体のかさと、ふてぶてしく成長した男の証だけだった。

ふと、一週間前に見た光景が脳裏に浮かんた。鏡に映った先輩のすぐ背後に立ったときのあの――。

先輩の背中に寄りすがった。

密着する体に先輩の熱い体温を感じた。それだけではない。先輩のやや硬い毛触り、汗だくに蒸れた獣臭、そして、丸く引き締まった生尻を直に感じて正直、湧き上がる性的興奮を禁じえなかった。

もしかしたら下心に気づかれただろうか？

そう焦りはしたものの腕は勝手に落ちていく。先輩の脇腹に回していた手がゆっくり、またゆっくりと下がっていった。脇腹から腰へ這い、そして、指の一本がじつとりと生温かい陰毛の茂みに包まれるのを感じた。全身の汗腺が開いて汗が一気に噴き出した。禁断の域に立ち入ってしまったのだとわかった。しかしその瞬間、指はぴたりと動きを止めた。恐れたのだ、この先に待ち構えているだろう逆鱗を。

だが、あのとき微かに爪の先が触れていたのは紛れもない先輩の――。

「くっ……」

そこに思いが至るや大牙は苦しげに呻いた。

爪先にこびりついていて感触の残滓が性欲を異常なまでに掻き立てる。気づけば手がせわしく前後に動いていた。瞬間に快感が腰の奥から込み上げる。鏡に映った先輩の陰部を思い出しながら扱きに扱いた。目を閉じると瞼の裏に三十路男の成熟しきった露茎が重たげに垂れていた。試合で火照った熱を発散しようと陰囊がだらんとだらしなく伸びて揺れていた。

それはどんな猥褻物にも勝る極上の眺めだった。

「くっ糞っ、先輩なんですっ！」

グンッと大牙の男根が狂ったように青筋を浮かせていきり立つ。前後する太い指の輪っかに圧されて、赤黒く変色した龟头から止め処なく透明な粘液が押し出されていく。激しい手淫にそれもついには長い糸となつて辺りに飛び散り、床に点々と淫らな染みを作っていた。

快楽に身を任せる大牙の、だが、その眉根はきつく寄つていた。

「俺を捨てていかないでくれよっ、なんで、なんでなんだ先輩っ！」

食いしばった牙の間から漏れる荒い息に混じった、本音。

「嫌だ、なんで俺を見捨てるんだ！ 献身的に俺は、ずっと俺は尽くしてきたのに……っ！」

興奮に掻き立てられた感情のうねりに煽られて、隠していた本音がつい口走ったか。

彼の表情は襲いくる快感と耐えがたい辛苦の狭間で揺れていた。その熱く潤んだ瞳の先には、沸々と胸の底から上がってくる思いを代弁するかのように愚息が怒り狂っている。涙を浮かべて泣いている。

「俺を、一人につ、しないでくれ士狼先輩っ、俺の傍にずっと、ずっといてくれよお！」

一方的に関係を断たれた。

何よりも最優先で先輩を立ててきたのに。気に入られたい一心で、好かれたい一心で、一途に身を捧げてきたのにその結果がこれか。

互いの関係はどの先輩後輩よりも緊密だと思っていたが、どうやら勘違いだったらしい。

身勝手に、理不尽に、これまで丹精込めて紡いできた絆を一

刀両断に断ち切られたのだ。あまりにも酷い仕打ちではないか。何の相談もなしに、気まずい顔ひとつせず、引退を告げられた日から今日まで俺は胸が張り裂けそうなほど悲嘆に暮れているというのに。

大牙は吼えた。

空気を震わすその雄叫びは嘆きがためか、それとも高まる射精感がためか。

それまでの青年の胸中にはいったいどんな青写真が描かれていたのだろうか。

おそらくそれは、ずっとこれからも想い人と共に競技人生を歩んでいけられたら……そんな慎ましい未来図を思い描いていたのかもしれない。恋が実らないのは百も承知。ただすぐ傍にいられるだけで幸せなのだと、そんな幼稚で甘つちよろい絵空事を。

虎鉄という男は、あまりに純真すぎたのだ。

それが音を立てて崩れてしまった今、瓦礫に灯った愛憎の炎が激しく身を焼いていた。炎の舐める肉体に、拗れてしまった情愛が歪な快感となって押し寄せる。炙られた生殖器官にグツグツと沸騰した精液が満ちていく。迫る絶頂の気配。今までに感じたことのない屈折した快楽が脳髓をも痺れさせた。

陰茎から手を離し、両手を腰の前の宙へと据えた。

「先輩もう我慢できねえ、挿れてやる……挿れてやるぞ今っ！」

大牙は妄想の中で土狼の尻を抱いていた。

先走りまみれの指をがっしりと土狼の尻たぶへ食い込ませ、間髪いれず腰を前へ突き出すと、

「ううっ凄え、先輩……おおうっおおう……」

貫いた男根にねっとり絡みつく柔肉の感触にたまらず喘ぐ。

蕩けるほどの心地よさが体を襲う。試合の緊張感から解放されて程よく解れた肉壺の塩梅は最高だった。それでいて腸の弁がキュッキュと締めつけてくるのだから申し分ない。根本を肛門括約筋にがつり咥え込まれて最大限まで充血しきった陰茎に襲が妖しく絡みつく。排泄器官はもっぱら男の精を放出させるためだけの搾精器官と化していた。

独りだけの控え室に低い嬌声が染みていく。

逞しい腰遣いに、手綱を失った怒張が激しく頭を振っている。ひたすら幻の土狼を犯し続ける青年の輝きの失せた瞳には何が見えているのか。

目の前の姿に映っているのは、覆面越しに締めりのない恍惚とした笑みを浮かべる一人の男が、虚しく腰を振り続ける姿だった。そこには青年の朴訥とした雰囲気は見える影もなかった。男が短く唸る。

鏡に映った姿はやがて、しとどに流れ落ちてくる白濁の向こうへと消えていった。

\*

土狼は目を見張った。

ラウンジや控え室の造りも大概だったが、なかなかどうして試合会場もまた会員制を敷くにふさわしく洗練さと重厚さを兼ね備えていた。

「いったいどれほど金かかってんだよ……」

入場ゲート前で試合の幕が上がるのを待ちながらつい、そう苦笑とともに独りごつ。

古代西洋の円形闘技場でも模しているのか、ギャラリー席は二階にのみ段状に設えられ、そこから見下ろす格好で一階部分にリングがあった。照明を絞った暗い客席から見れば、リングを囲むようにして設置されたアップライトに純白の正方形が煌々と浮き上がっている。その真つ白なキャンバスも、おそらく試合が始まるまでの余興としてか、今は直上のプロジェクターからプロレス関連のコミーシャルが投影されていた。想定外だった。

この私的な引退試合を組んでくれた発起人の経歴を考えれば、そこらの町にある体育館にパイプ椅子を並べての仮設リングか、常設リングのある小さなジムで行うものとはばかり思っていた。彼の収入や懐具合もそれなりに把握できているから尚更だ。それが、言うなれば身分不相応とも思えるこんな会場を用意していたとは。

先刻そこらの係員に訊いたら完全防音だと言っていた。なるほどそれも頷ける。

客席の最上段、その背後の壁に沿って大型モニターが会場の周囲に横一列になって嵌め込まれていた。その総数、数十台はあるうか。画面にはそれぞれ日本や海外の錚々たるレスラーたちの過去の名勝負が大音量で流されていて、好き好きに見入っている客たちの歓声がそこかしこで沸き起こっている。先ほどの係員曰く、試合中はこのすべての画面が中央のリングを映すカメラへと切り替わるらしいからさぞかし圧巻だろう。

まったく、金はあるところにはあるということか。士狼は呆れ気味に鼻を鳴らした。

収容人数の少ない会場だとは前もって本人から聞かされてはいたが、どうやら意味合いが違ったようだ。それにしても地下に、それもこれほど凝った造りにかかった建設費を想像するとそれ相応の収益がなければやっていけないだろうに採算は取れているのだろうか。

そんな余計なことまで考えたところで、士狼は頬を力いっぱい叩いた。

雑念が一瞬に頭から吹き飛ぶ。

これこそ、最後の最後にふさわしい闘いの場ではないか。贅を凝らした空間で、目の肥えたギャラリーが見下ろすなかで、可愛がつてきた後輩と初めて一戦交えられるのだ。叶うことのない師弟の勝負、愛弟子から手向けられた引退試合、実に最高なエンターテインメントとなりそうだ。

俺とあいつで会場を沸かせてやる。

気分が弾む、体が弾む、自然と士狼の足は軽快なステップワークを踏んでいた。

彼の闘志の昂ぶりを待っていたかのようについに試合の幕が上がる。

大型モニターの帯から光が一斉に消え、変わって黒い画面に派手なサウンドビジュアルライザーが躍り出す。それと同時に刻み始めた激しいビートは、聞き慣れた士狼の入場曲だ。誰もが知る王者の降臨に会場内のボルテージが一気に上がり、その熱気と歓声が渦巻くなか士狼は悠々と花道を歩んでいく。

「上々……」

満足げに口角を上げつつ彼は片腕を高らかに掲げて声援へ応えた。

赤いムービングライトが縦横無尽に走る先のリングで待つ



のは、華々しい勝利だ。その確信に微塵の揺らぎもない。約束しよう、一秒たりとて退屈はさせない、と——そんな強い意志が天を衝く彼の人差し指に表れていた。

リングインすると、変わって反対のゲート側から今度は青いムービングライトが闇を切り裂いた。続いて、青白く浮かび上がった花道に大きな影が登場するや客席から万雷の拍手が沸き起こる。それは士狼に勝るとも劣らなかったが、はたして士狼本人は驚愕に目を見開いていた。

決して、己を凌ぐほどの喝采に驚いたのではない。かといって、いつもの虎鉄の入場曲と違って驚いたことに驚いたわけでもない。

何だ、あのふざけたコスチュームは？——思わずそう眉を曇らせてしまうほどの身なりに士狼は目を剥いたのだ。

いつもの黒一色の地味な既製品で試合に臨んでいた姿から一変していた。

紅蓮の炎を連想させる真つ赤な攻撃色と闇より深い漆黒色の組み合わせでコスチュームを統一させるとこれほどまで禍々しくなるものなのか。手首の赤、腕の黒いバンドから始まり、炎が大胆にデザインされたショートタイツ、履き口の後ろが炎の形にカッティングされたリングシューズ、そして何よりも目立つのが特徴的な頭部だった。

厳ついハーフマスクが虎鉄の顔の上半分を覆っていた。

同じく赤と黒で統一されたそれも彼専用に誂えられた特注品か。首元を隠すように垂れた、兜の鍔を思わせるような部分にも炎の意匠が施され、こちらも炎型に開けられた目元とい

い一際異彩を放っていた。

堂々と歩んできた巨魁がリングに上がる。

そう、それは実に巨魁という呼び方がふさわしかった。悪者の頭領然とする仰々しい姿はどこからどう見てもヒールではないか。今日まで善玉のベビーフェイスとしてやってきたはずなのだが一片の面影すらない。

青と赤、会場を駆け抜けていた二色のライトが中央に集束し、薄紫の帳がリングを包んだ。

真正面へと対峙する、変貌した虎鉄へ、

「いつの間に覆面レスラーなんぞに転向したんだ？」

口調にたっぷり皮肉を乗せて言った。

返答は鼻が微かに鳴ったただだった。せせら笑ったかのように露出した口の片端が歪んでいる。

士狼は眉ひとつ動かさずにまじまじと虎鉄を見やった。

瓜二つの別人、というわけではなさそう。マスクの天辺から特徴的なギザ耳が突き出ている。虎鉄本人に間違いない。しかし何だ、こいつから伝わってくるこの凄まじいほどの威圧感……。体格の違いだけでこうも気圧されるものではない。

士狼の背中を冷たいものが走った。

交わる視線、見下ろしてくる眼光に今までに感じたことのない光があった。それは闘争心が放つ光とは別種のもの、仄暗い嗜虐性が瞳の奥に息を潜めていた。

到底、相容れられない光だ。

「マスクを被ると性格が豹変する奴がたまにいるが、どうやらお前もそのようだ」

士狼の口端も不敵に吊り上がった。

だが、面白い！ここにきて後輩の別の一面にまみえることができるとは。レスラーとしてはうだつが上がらなかったがどうやら趣向の才覚はあるらしい。ベビーフェイスが闇堕ちして

ヒールに転向というギミックチェンジを仕掛けてくるとは露ほども思っていなかった。なるほど、目の前に立ちはだかる巨悪を、体格に劣る俺が打ち倒す構図は確かに客も盛り上がるだろう。このサブライズには驚きはしたがなかなか愉快的試合となりそうじゃないか、なあ虎鉄よ。

すでに悪役になり切っている後輩へと内心で賛辞を送る。

薄紫から変わった眩い白光が両雄を照らすなか、リングコールが会場に鳴り響く。

「赤コーナー、176cm、95kg、弱冠二十歳にして頂点を極め、王座に君臨し続けること十年、その牙は今宵も獲物を屠らんと輝くばかりだ。LESSLUSTスターダムZERO所属、ジュニアヘビー級チャンピオン、士狼ーっ!!」

名が呼ばれるや、左胸を二度叩き、沸き返る客席へ向かって拳を上げる士狼。

否が応でも募っていく闘魂は、しかし、虎鉄のコールが終わる寸前で思わぬ水を差されることとなる。

「青コーナー、198cm、137kg、11の男の前に敵はなし、振り返れば無残に散った対戦者の山に今宵も一体、新たな骸を積み重ねるのか。獣神リングス所属、ヘビー級チャンピオン、大牙ーっ!!」

耳を疑った。

リングコールで冗談とは、いくら公式戦でないとはいえ悪ふざけが過ぎる。度を越したファンサービスに士狼は一瞬腹を立てたものの顔には出さなかった。すぐさま訂正が入ることを信じて数秒待ったが、だが一向にその気配がない。

いや、冗談ではなく何かの言い間違いか。とっさにリングアナウンサーや相手のセコンドを見たが誰の顔にも焦りや戸惑

いの色はない。

さらに数秒を要して、士狼が思い至ったのは――。

まさか……最後に当の本人へと視線を動かして、そして呆然と言葉を失った。

覆面の奥から明度を恐ろしいほど削ぎ落とした瞳が覗いていた。暗い琥珀色の眼光がまっすぐにこちらを射抜いている。そこには微塵も戯れの意思はなかった。

「お前が、チャンプ……だと？」

半信半疑な問いを口にする己に驚いた。

一笑に付すつもりが、完全に否定できないほどその眼力は真実味を帯びていたのだ。

チャンピオンの称号を是として受け入れている者の眼だった。少なくともこいつは王者としての自覚を持っている。王者としての矜持を持ってこの場に臨んでいる。たとえそうであっても到底、認めることのできない話だが。

赤い覆面頭がゆらりと揺れる。

「いかにも。今夜は先輩に敬意を払って青コーナーに甘んじてはいますが俺も実は玉座の座り心地を知っているんですよ。元王者になってしまったあなたに付度するかどうか最後まで迷いましたかね、感謝してくださいよ」

妙に落ち着き払った声色だった。

「お前ごときが俺を煽るとはな……余興としても笑えない冗談だ」

士狼は苦虫を噛み潰したような顔をしながら言った。

雰囲気どころか口調や人称まで変わっている。そこまで役に徹するとはたいしたものだが、演じているにしても少々度が過





ぎている。虎鉄の言にもわかには信じがたいが、だがこの演技の迫真ぶりを見るに、万が一の可能性を拭いきれないこともまた事実だった。

「冗談、に聞こえるでしょうね」

「当然だ。實力不足なお前が冗談でも軽々しくチャンプを名乗るんじゃねえよ。皆真剣に頂点目指してんだからよ。それに何だ、さっきの団体名とリングネームは？」

「獣神リングス、俺が所属しているところです。大牙は今あなたが知っている男の名です」

「……獣神リングス、聞いたことねえな」

「仕方ありませんよ、表のプロレス界しか知らないあなたにはコ・コは無縁の世界でしょうからね」

その含みのある物言いに士狼の舌が派手に鳴る。

「気に食わねえな、何を企んでいやがる？ それにレフェリーはどうした」

先ほどから気になっていた。本来あるはずの姿がリング上になかった。

「ああ、このマッチは少々特殊な決着方式を採用してましてね、不要なんですよレフェリー」

「……………」

背中に入った怖気に身震いした。虎鉄の瞳の奥に黒い炎が灯るのを見たような気がした。

胸糞悪い。

反吐が出る。

そんな目をするお前を見たくはなかった。試合進行にレフェリーの存在は不可欠だ。これだけの会場を用意できる団体にレフェリーが所属していないはずがない。何を考えているか知ら

んが、事ここに至って虚言を弄する意味はなんだ？ この無味乾燥なやりとりはなんだ？ 心理的に揺さぶりをかけて動揺を誘う作戦か、そうだとしたらまんまと俺は術中にはまったというところか。

「名はしようがねえ、今夜だけ大牙を使つてやるよ」

すっかり興を削がれた士狼は息を静かに吐きながら苛立ちを落ち着かせた。

チャンプの肩書きなどしよせん箔をつけるだけの飾りだ。実力が伴わなければすぐ剥がれてしまう薄っぺらなものだ。それでも、分不相応に名乗った落とし前はつけさせねばならない。目にかけてきた可愛い後輩だからこそ徹底的に王者とはなにかを体へ教え込まなければならぬ。それが俺に残された最後の使命――。

灰緑の眼光が凄絶に輝く。

全身の毛が鬨志に逆巻く。

失いかけていた闘魂が急速に沸騰していく。怒りを含んだ戦意が毛の一本一本の先まで漲り、肉体が臨戦態勢にギリリと引き締まっていく。

引き絞られる獣の瞳孔。

ただ映すは狩るべき獲物のみ。

微かな音をも拾うべくそばだてた耳を、試合開始を告げるゴングが高らかに叩いた。

六十分一本勝負。

「おおっしつ、俺から行くぞ大牙ーっ！」

裂帛の気合が戦端を開く。

俊足を駆つて士狼がしかける。泰然と立ちはだかる肉壁まで一瞬で間合いを詰めるや、すぐさま身を横へ翻す。顔のすぐ脇



を大牙の豪腕が唸りながら通り過ぎていった。

士狼の残像を掴むしかないその腕を手早く絡め取る。

捕らえた片腕を後ろへ捻って関節を押さえると大牙から苦鳴が上がった。

「うすのろチャンプ、簡単に取られてんじゃねえよ」

「ぐっ！」

大牙が牙を食いしぼる。なにも罵られたからではない。次の瞬間、士狼の両足がリングから離れていた。なんという怪力か、可動範囲を封じた腕に体を持ち上げられたのだ。95kgをぶら下げたまま大牙が走る。気づけば眼前にコーナーポストが迫っていた。

激突する直前、離れた腕を今度は大牙に掴まれると勢いよく反対側のロープへ振られた。

さすがは大牙、その臂力だけは俺にはない。

たわむロープに背を委ねながら士狼は心底羨んだ。臂力だけはお前に分がある。だがそれだけだ、お前にあるのは。

「俺をこれ以上失望させるなっ！」

ロープに吐き出された体が宙に躍る。揃えた両足が吸い込まれていく先は大牙の胸倉。

炸裂したドロップキックに巨体が崩れ落ちる。そのままうつ伏せになった体に馬乗りバックマウントを取るや大牙の片脚を脚で絡め取り、さらには両腕をも羽交い絞めに絡め取る。流れるような複合関節技に会場からどよめきのような感嘆が上がった。

サブミッションマスターと呼ぶにふさわしい王者ならではの妙技。

士狼の手が相手に触れた瞬間、相手の関節は音を立てて砕け

散るのみ。

「ぐぬぬあああつ、ぐうううう!!」

覆面から覗く口元だけ見てもどれほどの苦痛が襲っていることか。力頼みに解かれてしまった片腕をしかし士狼は再び絞り上げた。そして指、手首、肘、肩と体の端から連動させて次々と関節技を決めていく。

打撃系や実践的な技術を用いるシュートスタイルを士狼は得意とした。

スピードと技巧を凝らした多彩な技の数々には自信があった。

客を魅せるための試合をつねに心がけていた。血湧き肉躍る展開を彼らは求めているのだからこれに応えない理由はない。己の技に相手が苦しめば苦しむほど、次のターンに相手の技を食らってしまった際の客のボルテージは倍々に上がる。どちらが勝つかわからない状況を保ちつつ最終的には勝利を掴むのだ。

だから今はとことん苦しめ大牙よ。

さらに一段、靱帯が伸びる寸前まで追い込む。

鮮やかなサブミッションの入りに沸く客席と苦悶の呻き声が競うように増すなか、ただ一肢自由を与えていた大牙の片脚がロープブレイクを告げた。

激痛に起き上がることが出来ないのか右腕を押さえながら体を縮こまらせている。

関節に着々とダメージが積もっているようだ。

それは勝利への布石となる。だが、もとより関節技だけで勝とうとは思っていない。関節技は一瞬の隙が命取りになるが、基本的にはある程度の力の差があるとなかなか決まらない。大

牙より力で劣る土狼が少々、の優位性と、勝つための説得力を持たせるにはやはり大技の披露が必須であった。

未だ立ち上がれない手負いの獲物へもう一撃与えるべくコーナートップへ上がった。

「無様だな……」

眼下に敷かれた肉蒲団へ辛辣に言い放つや、力強く支柱を蹴った。

狼の肉体が空中に美しい弧を描く。決めるは途中で宙返りを加えての華麗なダイビング・セントーン。背面から急速落下する体はしたたかに大牙を押し潰す——はずであった。

ダンツという激しい衝撃音が場内に響き渡った。

土狼の体を引き裂かれるような激震が走る。

呼吸ができない。意識が白く弾け飛ぶ。

それもそのはず、そこにあるべき背を受け止める肉の感触はなく、ただ硬いマットに叩きつけられたのだから堪らない。

「ぐくつ……なっ、なぜだっ！」

混乱する土狼を大きな影が覆う。

顔を上げると、大牙が冷ややかな笑みを浮かべながら見下ろしていた。

「大牙、お前……」

ありえない事態に二の句が継げない。

ここは見事ダイビング・セントーンの餌食にならないといけないのだ。それでもなんとか立ち上がってそれから大牙が反撃の大攻勢に転じる。それが事前に両者の間で決められていた筋書き……ブックであった。

試合開始早々の土狼の関節技ラッシュから今のダイビング・セントーンの流れは台本通りだ。だがそれが避けられると

は頭の片隅にもなかった。

逆光に黒ずむ覆面からこぼれる眼光が異様にぎらついていた。

「初っ端からセメントにしてもよかったんですがね、ちよっと先輩の関節技を本番の試合で体感してみたくなっただけですよ、今夜がラストチャンスですから。はは、さっきはさすがに痛かった」

セメント、つまりシナリオを一切無視したガチンコ勝負ということだ。

それを身勝手に独断で決行してそのうえ愉快げに笑うか。

「……てめえ」

「ほらほら先輩いつまで尻餅ついてるんですか、お客さんたちが飽きちゃいますよ」

「な、なにをするっ！」

髪をむんずと掴まれ強制的に立たされる。

「台本ではこれから俺のターンです。披露する技は何か教えませんが、先輩、見事耐え切ってみせてくださいよ」

そう言う大牙の片脇にまだ状況を理解できずにいる頭を挟まれた瞬間、体が浮いた。そのまま後ろに倒れていく巨体によって脳天がリングに打ちすえられる。

「ぐぶっ！」

「まずはDIT、手始めに首の頸椎いつときましょ。お次は」

神経に触れたか、痺れる腕を大牙に引き上げられると、背後を取った彼の手によって体が高々と持ち上がっていく。そしてそこから急降下して臀部を待ち受けるのは大牙の立て膝だ。

「アトミックドロップウウーッ!!」

「ぐおおっ！」

尻に強烈な鈍痛が走った。

「まだまだいきますよお！」

脳内に星が散るなか、首元と片脚に添えられる分厚い手の感触。抵抗する間もなく大牙の肩に担ぎ上げられるや、反っていく背骨がメキメキと軋みを鳴らす。決まるアルゼンチン・バックブリーカー、そしてそこからの垂直落下。

「んぐうううっ！」

「さすが先輩、並みのレスラーなら俺の技を立て続けに食らったらもうギブアップかノックアウト寸前なんですがね。どうです、もう二、三いけます？ いけますよね、俺が憧れる先輩なんですから」

何たる物言いか。まるで生殺与奪の権利を握っているかのような高慢ぶりはまったくの別人を見るようだった。どうしてここまで変わってしまったのか。思考のおぼつかない脳味噌が答えを弾き出せるはずもなく、ただ一つ、勝利が揺るぎかけていることだけを訴えていた。

それだけは断じてならないのだ。

王者だったこの俺が一敗地にまみれるなど決してあつてはならない。

「先輩のお前なんぞに俺は負けんっ！」

勝利への強い欲求が瞳を凜と輝かせる。

投げられた体を受け止めるロープが大きくたわむ。吐き出されるや足が力強くマットを蹴る。増す加速に風切り音が唸りを上げる。肉薄する標的に打ち込むのは再度のドロップキック。憤怒と、疑念と、そして矜持を乗せた重い飛び技が、空間を横に切り裂く。

その直後、士狼の網膜はただ虚しい現実を映していた。

「なっ?」

足の裏を大牙の重ねられた掌が受け止めたのだ。

勢いを殺すべく上手いこと後方へ受け流されたその手に足首を掴まれる。そのまま体がリングに落下したときにはすでに足関節が押さえられていた。

上にのしかかってくる巨魁がさも当然のように、

「同じ技は食らいませんよ。だって俺、ヘビー級チャンプですから」

そう淡々と囁きつつ、足首から足4の字固めへと流れるように関節が支配される。

「ぐくっ……俺を、長年たばかっていたのか、いつ、からだっ！」

右足にかかる強烈な負荷に耐えながら、激しく問うた。

問わざるをえなかった。

大牙の技の切れ、尋常ではない。

これまで対峙してきたどんな猛者と比べても一歩も引けを取らない。いや、それどころか俺の顔に汗を浮かせるとは。額の

の毛に滲む脂汗に士狼はうろたえた。

両者の実力差は歴然と開いていたはずだ。指導してきたなかで幾度となくその非才ぶりに溜息を吐かされたことか。それなのに、たったこの数日間差を埋められるはずがない。となれば、先ほどからこいつがのたまっているチャンピオンの称号も虚偽りのない事実。こいつはずっと鋭利な牙を隠し続けてきたのだ。それを今、剥き出しにして俺の首筋へ突き立てようとしている。

「言え、大牙っ！」

パワーファイトが取り得だけのただの傲岸不遜な男ではな

い。『同じ技は食らわない』豊かな技術に裏打ちされた確かな実力がこいつにそう言わせたのだと士狼は確信した。

しつかり足4の字固めを決める大牙が言い放つ。

「先輩と出会った頃からですよ」

奇妙な告白であった。

「……どういう意味だ？」

「先輩、前に俺へ言いましたよね。『お前が本気になれば天辺を狙えるのになぜ本気にならないのか』と。あの時は答えられませんでした、今なら言えますよ」

「……なんだ」

「俺が興味あるのはプロレスなんかじゃない。先輩、あなたに興味があるんです」

やはり奇妙な告白であった。

プロレスラーを目指してレッスルスターダム ZERO の門戸を叩いたのではないのか。自身への憧れが募って入門してきた若者をこれまで何人ともなく士狼は見てきた。そんな彼らの根底にはしつかりとプロレス愛があり、だからこそレスラーとしての己を慕ってくれるものだと思っていた。大牙もそのなかの一人だと認識していたのだが。

「俺はあなたに近づきたいためにプロレスを始めた」

抑揚を落とした低く重い声がリングに染みる。

「戦績や評価などどうでもよかった。なぜ俺が茶番な退屈くだらない表のプロレス界にそれでも居続けたのか、それは先輩の近くにいたいからです。先輩から受ける指導を無我夢中になつてこなす日々だけで満足だった。どれほどきつい修練にも耐えてこられたのは、ひとえにあなたの傍にいられるだけで幸せだったから。それなのに……」

「……………」

「それなのに、あなたから引退と聞かされたとき俺がどんな気持ちだったか。どれほど胸が張り裂けたか。毎日、毎日、毎日、毎日、毎日、毎日だけ泣き腫らしたか！ どれだけあなたの家族を、生まれてくる赤子を恨んだかつ！」

あれほど風いでいた声色が波濤のように荒く波立つ。

激しく吹きつけてくる感情の嵐に士狼は愕然とした。

「いったい、なにを……言っている？」

大牙の言っていることが理解できなかった。厳密には理解を試みようとするにはあまりに内容が突拍子なく、そして時間を要した。

ただ、確かなことがひとつある。

恐ろしいほどの執心だ。男の放つ粘つくような負の雰囲気が生狼の体をべつとりと覆おうとしていた。

大牙は言う。たつぷりと情感を込めて、

「狂おしいほど先輩、あなたを愛しています」

それは、あまりにも狂気を帯びた愛の告白。

脚の関節がさらに深く、深く軋んでいく。技をかける者の脚が太ければ太いほど強烈に締まる。もはや容易に抜け出せそうになかった。

「ぐううっ！」

「ふふ、先輩わかりますか？ 俺の熱い思い、そしてこの熱い滾りを」

右脚に走る痛烈な痛み顔に顔をしかめながらも、士狼はある異質な触感を左脚に覚えた。

ちようど大牙の腹部へと伸びるその片脚の裏側、脛脛の部分になにか硬い物が押し上げていた。それがなにか士狼は瞬時に



理解した。そう、男なら誰もが持っている物が隆々と屹立していたのだ。

背中を戦慄が走った。

この男は試合中にもかかわらず、しかも衆人環視のなかで、欲情している。興奮を催すなど場違いが過ぎるような場所で堂々と一物を奮い立たせている。神聖なリングの上で何たる冒瀆か。

その背信行為に、そして己が性的対象として見られていた事実には士狼は齒嚙みした。

「糞野郎が！ 放しやがれ一発ブン殴ってやるっ!!」

どうにか抜け出そうと必死にもがいてみるが、分厚い太腿の間に挟まれた脚はどうにも抜けない。そしてその抵抗が刺激になったか、当たっている一物がますます硬くなっていくではないか。ふと耳に意識を向ければ、大牙の息遣いがやや荒くなっていることに気がついた。

「はああっ先輩、そんなに動いたら俺っ……」

声に甘美な響きが混じっていた。

今や鉄棒のように勃起しきったその硬い肉の感触に身震いした。そこを見なくともわかる。ショートタイツにくっきりと生々しい陰影をつけた下腹部が脳裏に浮かぶ。

男になど毛頭興味はない。

世の中には同性を好む男がいることは承知している。それを否定はしない。野郎同士でも相思相愛なら好きにすればいい。だが、それが自分の身に降りかかってくるとなれば話は別だ。その想いを受け入れることなど断じてありはしない。俺が愛するのは妻ひとりだ。

この危機的状況をなんとか打破しようとする強い意思が士

狼を動かす。

渾身の力を振り絞って大牙ごと反転させようと体を捻るや、見舞うは切り返し技の裏足4の字固めだ。今度は大牙が痛みで悶絶する番であった。

しかし士狼は気づいていなかった。

己の体はすでに底無し沼に捕らわれてしまっていることを。

一步、足が抜け出たところで、その足がつく先もまた沼の上。

足掻けば足掻くほど、もがけばもがくほど、ずぶずぶと深みに嵌まっていく定め。

体が裏返る寸前、するりと大牙の脚が抜けた。

瞬時に察したが時すでに遅し。その巨体からは想像もできないような機敏さでマウントを取られると、137kgの超重量が体をマットへ縫いつける。士狼はとつさに脇を閉めた。体格が勝る者に上から腕十字をかけられるとチョークよりも逃げることは難しくなるからだ。

腰の上へ馬乗りになった大牙がほくそ笑む。

「先輩、そんなに顔を真っ赤にして……可愛いですよ」

「くっ!」

上半身を倒してのしかかってくる男へ牙を剥いて唸るがどうにもならない。その体勢を取られては、さすがに体重差が<sup>もの</sup>近々あるとブリッジで返すにも無理がある。

生温かい吐息が顔を撫でた。

「近くで見ると本当に愛らしい……。この鼻も、この口も、そしてこの瞳も何もかもが愛おしい」

目が合った。

恍惚と琥珀色の瞳が濡れていた。三十男を掴まえて愛らしいと言う男の顔が覆面越しでも赤く上気しているのがわかった。

覆面頭が土狼の首元へと沈む。

「ああっ先輩の匂いにする……この汗の匂いにどれだけ俺は興奮してきたことか。嗅ぐだけでもう果ててしまいそうだ。はあ……体が熱い、俺の体が先輩を求めている」

抑制の効かない激しい性衝動が言葉に乗っていた。

「離れろっ、臭いを嗅ぐなっ！」

言ってもどれほど効果があるかわからない。それでも大牙の良心は腐っていないと信じて訴えた。今日まで可愛がってきた後輩がこうも道を踏み外した行動を取るはずがない、一時の気の迷いであれと願った。

大牙の鼓動が胸に伝わってくる。

大牙の荒い鼻息が鼓膜を叩いてくる。

大牙の大きな尻が股間を弄ってくる。

まるで尻で陰部をぐりぐりと愛撫するかのようその動きに土狼はハッとした。

男が男を求める——男同士の肉体関係はどうやって結ばれるのか、大牙の肉体が今なにを求めているのか、この尻の男の性的興奮を呼び起こすような艶かしい動き。そこから導き出した、ぼんやりと頭に浮かんだ最悪の答えは喉から怖れに強張る声を引きずり出した。

「まさかお前……ここでするんじゃないだろうな」

「ご名答」

絶句するほかない。

いや、冗談であつてくれ。だがそんな一縷の望みはすぐさま絶たれた。

「んむうっ!? お前な、なにをすっ……んんんっ！」

マズルを丸々咥え込むような大胆なキスは雄弁に語ってい

た。こいつは本気なのだ。本気で俺を愛し、そしてなんの躊躇いもなく俺を犯すのだ。土狼は悟った。

唾液まみれの舌が容赦なく唇を割ろうとしている。

声を一言でも放った瞬間、おそろく侵入されるだろう。技を仕掛けられるのを覚悟して、脇のガードを解いて殴打するか。しかしそれだと敗戦がさらに濃厚になる。このような名も知れない場所、目にかけてきた不出来の後輩に惨敗することはスラー人生最大の汚点に他ならない。

元王者としてのプライドさえなければ、もしかしたらこの苦境を脱することができたかもしれない。

土狼のマズルを太い指が強引に割っていた。

こじ開けられた牙の間から、ぬうっと肉厚の舌が入り込む。長い舌だ。止まることなくマズルを貫くように奥へ奥へと無遠慮に這い入っていく。

「んんうーんんんーっ!!」

呻くことしかできなかった。圧倒的な肉の塊に氣道を塞がれて息もままならない。

込み上げる嫌悪感を吹き飛ばしてしまうほどに荒々しい口づけだった。まさに食うようなキス。熱い吐息とともに押し入ってくる舌が土狼の舌を弄び、牙を舐め、口腔を我が物顔で蹂躪する。

涎の糸を引きながら唇が離れたのは数分経った頃だろうか。

「先輩、もう辛抱できません……俺、先輩とひとつになりたい」

「そこはっ、よ、よせっ、やめろっ！」

尻を撫でられて土狼は顔を青くした。

「無理言わんといってください。だってほら、俺のこんなになっちゃってるんですから。ね、責任取って可愛い後輩のために今

からこれを慰めてもらいますよ」

熱っぽく言うや、大牙が大きく盛り上がっているショートタイツをずり下ろす。

解放されて勢いよく飛び出た怒張の腹を打つ音がやけに耳に響いた。どれほどの硬度か容易に想像できる音だった。

士狼の目は瞬きすることを忘れていた。

突如として現れた肉茎を呆然と凝視した。視神経が結んだ映像に脳が激しく揺さぶられるのを感じた。初めて見る他人の勃起したペニスだった。その初めてが、大牙の物だったのが運の尽きというべきか。

完成された雄の性器が目の前にあった。

肉の鈍器、いや凶器と形容するにふさわしかろう。

大牙の体格に見合った20cmはあるかと思われる立派な逸物が、収まる穴を求めてひくついていていた。青い血管が陰茎にとぐろを巻き、厳つく赤黒い傘を広げた亀頭が脈動にあわせて揺れるその姿は正体不明のグロテスクな生き物を見るかのようだった。

これを慰める、だと？

誰が？

俺が、か？

先ほどの大牙の台詞に問答する。

馬鹿な！

あり得ない！

答えは拒絶一択にもかかわらず錯乱する頭が問答する。もう現実逃避に近かった。置かれている境遇を認めたくないのだ。己の体がいま性処理役として求められているなど。

士狼は嫌悪に顔をしかめた。

むっわあと汗に蒸れる熱気とともに男の臭いが顔まで漂ってくる。それは成熟しきった精の臭い。雄の肉欲を煮るに煮詰めた濃密な性臭。いったいどれほどの精液がその片手に余るほど大きな玉袋の中に溜まっているというのか。

亀頭の先に一粒の透明な粘液が生まれていた。

ふてぶてしくもその潤滑液で性交をスムーズに進める気であるのだ、この生殖器は。

ふんぞり返るほどいきり勃たせて相手の体奥深くで射精する気であるのだ、この生殖器は。

粘液の玉が脈動のたびにゆらゆら揺れている。

雫に宿るふしだらな光も揺れている。

光が大きくなっていく。粘液の玉も大きくなっていく。

やがて堪えきれなくなった雫が緩やかにこぼれ落ちながら粘糸をゆつくりと士狼の腹の上へ引いていく。左右に振られながらもやがて毛々の先と結びつくと、そこに新たな玉が生じていった、一つ二つ三つ。

待て。

死中に活を求めている士狼にふと一筋の光明が差した。

この最悪の状況を脱する手段がひとつ残されている。それも決定的な手段が。残されていなければあまりにも理不尽すぎる。そうだ、このような蛮行が決して許されるわけではないのだ。衝撃的な展開にすっかり失念していた。士狼は愚かな後輩を引きつった笑みで見やりながら言った。

「お前の反則負けだ、大牙」

前代未聞だが、試合中に局部を露出させる行為が反則に当たらないはずがない。

青ざめる顔を覆面で押められないのは残念だが、なにより汚

点を残さずすみそうで士狼は安堵した。随分と後味の悪い勝利になってしまったが仕方ない。

「さっさとそこをどけっ！」

一向に腰を浮かす気配のない彼に声を荒らげる。

それが数秒待っても変わらない。

沸騰する血が一気に頭へと上り、怒鳴り声が進る寸前、異常に気づいた。

大牙の目に動揺の色が微塵もなかったのだ。それどころか喜悅すら滲ませている。もしや狂気に毒されてもしたか。偏愛をさらに拗らせるあまり違反を違反と認識できないほどに狂ったか。

にたりと、大牙の口が悪辣に歪んだ。

「反則？ 誰が、俺が？」

やはり認識できていない。常軌を逸してしまっている。

「あつたりめえだ馬鹿野郎、試合をぶっ壊しやがって」

「ブハッ、ガハハッ、ハッ、これは愉快！」

太い牙が歯肉まで覗く。大牙がこうも大口を開けて哄笑する姿は初めて見た。

「なにがおかしい」

「どうやら表の眩しいプロレス界で御活躍されてきたあなた様は知らないようですね。いや、知る必要もなかったわけだ。ここは裏、地下プロレスの世界。急所攻撃、凶器の使用、暴行、姦淫、どんなラフファイトも容認されているんですよ」

「なっ、馬鹿な……」

「脛に疵を持つ者、莫大なファイトマネー目当ての者、ただ暴力を振るいたい者、いろんな輩が集ってくる。地下プロレス団体『獣神リングス』はそんな奴らの集合体。そしてここは獣神

リングスの専用アリーナ『1st RING』。ちなみに主宰は……俺です」

差していた一筋の光明が無慈悲にも消えていく。

崖の上にやつとかかっていた手が崩れた土塊もろとも離れていく。

冥い奈落の底へと落ちる体を受け止めるのは硬い岩肌でも凍える川でもない。降ってくるのを今か今かと待ち構える大牙の広げられた腕の中にすっぽりと収まるのだ。そして受け止めた男は震える狼の耳元で妙に甘ったるい声で囁くのである。

さらに深みへと突き落とすべく。

愚かにも這い登ろうとする気持ち二度と持たせぬよう。

「絶頂デスマッチ。この試合の決着方式は互いに相手をオーガズムに導いて先にギブアップした方の負け。扱き合い、舐め合い、犯し合い、全身が幾度と噴き上がる白濁まみれになりながらも精根尽きるまで快楽を食……レフェリーがいらないのはルールという無粋なものが必要ないからです。ただ欲望のまま男が男を騎り、どちらがよりタフな男か決めるだけ……考えただけで股間が疼きませんか？」

狂っていた。

その決着方式が。いや、もはやこの試合自体が狂気の沙汰であらう。そしておそらく大牙自身も狂気に魅入られているのかもしれない。

「さあ先輩、一緒にイキ狂いましょう？」

瞳の奥に燦っていた黒い炎がごとく渦を巻いて燃えていた。

「馬鹿なっ！」

士狼はとっさに場外の最前列に並ぶ獣神リングス関係者と思しき男たちの顔を見た。



こちらを見るその目が大牙と同じ色に染まっていることに愕然とした。

「馬鹿なっ馬鹿なっ!!」

反対側に顔を向けると、エプロンサイドを激しく叩いて抗議していた自身のセコンドが強面の男たち数人にどこかへ連れていかれるところだった。

「趣旨を理解して頂けない異分子はお一人だけで結構です」

「大牙お前っ!!」

そうだ客だ! 俺を応援する客がたくさんいるじゃないか!

縫<sup>す</sup>るような思いで周りの客席へ視線を馳せる。誰か一人でも声高に非難してくれたらそれが大混乱の呼び水となって試合どころではなくなるはずだ。

そんな淡い望みは、しかし冷酷な声によって打ち砕かれた。

「客へ期待しても無駄ですよ、異分子は先輩だけと言ったでしょう? 彼らはプロレスを性的な視点で嗜好するために来場しているんですから。この会員になれる絶対条件は二つ。入会費一千万の即時支払いが可能なことと、もう一つ、男であること。今回の現王者と元王者という好カードの観戦料は百万の設定です。皆大枚をはたいてでもあなたの乱れる姿が見たいんですよ、ほら聞こえるでしょう? 興奮する男たちの荒い息遣いが」

そのための大型モニターか。土狼はようやくよく理解した。

客席を囲むように壁に設置された数十台分の画面には土狼と大牙の姿が大映しになっている。死角がないようにどうやら全方位からカメラが狙っているらしい。様々な角度から撮られた映像が流れるなかに、大牙の股間に焦点をしばったショット

がいくつかあった。その猥褻映像がいま客たちの鼻息を荒くしているのだ。

人通りの少ない路地裏にある地下施設、それも完全防音のおまけ付き。

狼の遠吠えといえども地上まで貫通すまい。万事休す。

「やってくれたな大牙……だが、レスルスターダム ZERO のリングネームをバラされたくなければ大人しくそこをどくんだ。こんな愚行が明るみになればただでは済まんぞ」

これは完全なる脅しだ。

元王者が格下を恐喝するなど情けなくはあるが、もうなりふり構ってはいられない。

「暴露ですか、構いませんよ。先輩のいないあちら側にはもう未練ないです。それに元々そこまで名も売れてなかったですから意味ありませんよ」

自嘲の笑みを浮かべて大牙が覆面を脱ぎ捨てる。

こいつは少しの逡巡すら見せずにレスラー虎鉄の名を消し去ったのだ。

チャンピオンの突然の行動に場内にどよめきが湧き起こった。

覆面レスラーが覆面を失うことはアイデンティティーの喪失に他ならない。それは覆面を剥ぐ行為がほとんどの団体で原則と見なされていることから明白だ。言わば覆面は覆面レスラーの命。その命とも言うべきマスクをこうも潔く脱ぎ捨てることができるとは。

いや、大牙なら躊躇はしないだろう。

本人の弁より先輩ありきのレスラー人生だったからこそ瑣末な問題なのかもしれない。

そうは言っても観客はそんな内情を知るはずもなく、輝くライトの下に露わになった大牙の素顔に驚きは尽きない。表のプロレスでは名が通っていないとはいえ、目ざとくあれは虎鉄本人だと気づいて驚嘆するプロレス通がいたかと思いきやその隣には、顔は知らなくても想像していた通りだったのか、好みの男臭い素顔に悩ましげに熱い息をつく好色家がいたりと反応は十人十色だった。

そんな客の素振りなど気にかける様子もなく、

「見損ないましたよ、俺を脅迫するなんて先輩らしくない。なら仕返しに俺も言いましよう、先輩、試合放棄を考えているなら御法度ですよ？ 交わした契約書に記載されていた違約金の額覚えてます？」

大牙からの意趣返しは痛烈だった。

サインした契約書の最終頁に添えられていた違約金についての項目が脳裏によみがえる。目にしたときに馬鹿げた額だと思っただけなのに。私的な試合、それも全幅の信頼を寄せる後輩との試合だからという油断がついて視界の外へとそれを流してしまっていた。こいつとの間に例外的な事案など起こるはずがないと。

どこまでも用意周到に準備されていた事実心胆が寒くなった。

「大牙……」

「そんな恐い顔しないでください。俺は先輩にも気持ちよくなくてほしいんですから」

尻を弄っていた大牙の手が股の内側へと這っていく。

寒気を催すほどいやらしい手つきだった。マスクを捨てて暴かれた満面がうっとりとして好色に染まっている。五本の指が伝え

てくる内腿の肉感を堪能しているに違いない表情だった。

そのなかの一本がさらに深みへと潜った。

「よせっ、それ以上はやめるんだ大牙っ！」

動悸が一気に跳ね上がる。

それ以上進んではいけない。いけないんだ大牙。そう必死に願ったが、だが、無情にも指は沈んでいく。そしてついに到達したのは士狼の排泄口。

「くううっ！」

屈辱が食いしばった牙の間から漏れる。

「そうなんです、ここが先輩の……ああ、スパッツ越しでもわかる。ここだけ確かに感触が違うし湿り気も強い、これが先輩の肛門……」

秘肛を探り当てた指先が今度は円を描くようにゆっくり動き始めた。

「やめろ、本当にやめてくれっ」

男として情けない声が出る。哀願だった。そのような所を他人に触れられるなど一生ありはしなないと思っていた。それがどうだ、まるで愛しい小動物でも愛でるかのように優しく愛撫されているではないか。

指の腹で外周をなぞるように撫でられたかと思えば、窄まる穴を興味深げに爪先が小突く。刺激されるたびに括約筋が勝手に収縮を繰り返した。

「あああ、このケツ穴の触り心地たまんねえ、早く挿れてえ……」

独り言か、大牙の口から下卑た言葉が漏れていた。

それは性欲の暴走を意味するのか。今や指先に全神経を集中させる男の表情はだらしなく蕩け、見れば怒張から止め処なく

流れる先走りが二人の腹の被毛を濡らしていた。

布が裂ける音を聞いたのはそれを目にした直後だった。

そして、はつきりと体は感知した。

排泄口が直に触られている！ スパッツとサポーターが爪に掻き裂かれたのだ。

「なにしている大牙っ、馬鹿な真似はよせっ、そんなとこ触んじやねえっ!!」

「……………先、輩」

必死の抗議も彼の耳に届いていないのか、焦点の定まらない不安定な視線が土狼の顔の辺りに落ちている。

一旦引いた指が今度はふんだんに唾液を纏ってまた潜っていた。

布を隔てた愛撫とは段違いの刺激が秘部を襲った。粘膜が擦られた。唾液のぬめりが卑猥な音を鳴らした。

大牙の頭の斜め後方に見えるひとつのモニターに土狼の尻がアップに映し出されていた。綺麗に裂けたスパッツの切れ目から覗く灰色の尻毛と、双丘の谷間に潜り込む太い指までぼちりと客席に伝えている。羞恥の極みだ。土狼の体を恥辱が炎となつて熱く焦がした。

鈍い痛みが肛門に走った。

指が侵入を試みているのだ。

大臀筋に力を入れてどうにか阻止した。一度突破されたらもはや侵入を止める手立てはない。しかしそれは一分と続かなかつた。呼吸に一瞬緩んだ隙を突いて瞬時にこじ開けられる。それでも何とか抗おうとする括約筋は、しかし節くれ立った虎男のごつい指に虚しく押し広げられていく。

「おっおっおっぐうううっ、やめろ大牙あぁっ!」

異物が入ってくる妙な感覚に、腹の底から異常なほど低い唸り声が生まれ出る。

中で指が蠢いているのがわかった。腸壁をもこの男は愛しく愛撫しているのだ。壁面が押されるたびに何とも言いがたい鈍痛が生じた。内臓が圧迫される痛みなのか。

それから何度も大牙は指を抜き差しした。

何度も、何度も、何度も。

しまいには閉じることを忘れた肛門が、指が出入りするたびに淫らに粘ついた音を発するまでになっていた。すっかり弛緩してしまったようだ。それでも異物感は拭えなかった。顎を上げ、顔を左右に振り振り土狼は襲ってくる鈍痛に耐えた。

異変は急にやってきた。

初めは肛門の搔痒感だった。

ムズムズするような軽い痒み程度だったものが、しだいに熱を伴って腰全体にまで及んだ。だがそこで留まらなかった。局所的だったそれがなぜかじわじわと全身に広がっていく。やがて異常とも思えるほどの発汗が始まると頭が妙に熱っぽい。体が軽いついとか浮遊感に包まれたかのような夢心地の感覚だった。そんな不思議な感覚のなか、心音がやけにこめかみに響いていた。胸の外に轟かかというほど大きく鼓動しているようだ。理由はわからないがおそらく血流が急速に速まっているのだろうか。

何なんだ、この感覚は。

吐く息すら熱い。熱せられた皮膚に当たる空気がやけに冷たくて気持ちいい。

「尻に当たっている先輩のチンポ、だんだん大きくなってくる……………はぁあ凄え」

……大牙はなにを言っている？

「でっけえなあ。ああ早く啜えてみてえよお、チンポもきつと美味えんだろなあ」

……だから、さっきからいったいなにを。

上の空だった意識が、股間に生じた違和感に一気に引き戻される。

なぜ俺は勃起しているのだ！？ 士狼は狼狽した。

股座に走るのは硬く勃起したペニスが超重量物にゴリゴリに押し潰される痛みだった。

なにに対して性的興奮を覚えたというのか皆目見当がつかない。虎男のごつい尻に敷かれてこの状況のどこに、むさ苦しい野郎どもの臭いが満ちたこの空間のどこに、欲情を誘う要素があるというのか。

だが確実に勃起している。その事実を無視することはできない。

「俺は、どうかしてしまった……のか」

異常な亢進状態はなおも続いている。それが原因なのか。

「くっ……」

士狼は思わず呻いた。

股間へ与えられている痛みが快感へと昇華していくのだ。

重量級の尻肉にぐりぐりと押し潰されるペニスが心地いい。まるで痛覚がそこだけ消えてしまったかのようにただ快感だけが増していく。それだけではない。依然、直腸に収まっている大牙の指が絶え間なくアナルを犯し続けていた。外から内からの同時責めに、さしもの異性愛者も熱い吐息をついた。

「くはっ……はあああっ」

腰の奥がじんわり痺れるこの感覚、思春期を過ぎた男なら誰

しもが身に覚えのあるこの甘く切ない疼き、射精欲がうつすら紗のかかった意識に生まれていた。

「や、やめろーっ!!」

拒絶の雄叫びが場内を震わせる。

それを認めてはならない。ただでさえ野郎からの刺激で勃起という生理現象を起こしてしまつて自己嫌悪甚だしいのに、そのうえ絶頂に達したとなればもう立ち直れそうにない。

逃げるなら大牙が上半身を起こして腰にまたがっている今だ。

切迫した状況が士狼に火事場の馬鹿力を与えたか。

あらん限りの力を振り絞つてブリッジした。大牙の体が一瞬浮いた隙を狙つて、体を半身に傾けるや、素早く相手のくるぶしに踵をかけて引つ張りながら同時に肘で脚を押し出す。そうして縛めが解けると迅速に大牙の下から抜け出した。

愛撫に耽るあまりに気の緩みがあつたようだが、お陰で助かった。

どうにかマウントエスケープが成功したことに胸を撫で下ろす。

それにしても恐ろしい男だ。士狼は荒い息を整えながら、のっそりと立ち上がっていく大牙を見やった。奴のレスラーとしての手並みはチャンプの称号に恥じないものだ。対戦相手としては申し分ない。しかしだ、たとえ技量が互角だったとしても、この体格差のなかで己に勝機がはたしてどれほどあるのか。

顎から垂れようとする汗を士狼は拭いた。

青写真を描くにはあまりにもこの状況は異例だった。打つ手なしと言っている。

「先輩、よく抜け出せましたね。さっきの腰の突き上げ凄かつ



たですよ」

「……糞野郎が」

いやらしい顔つきで露出したままの股間を揉んでいる大牙を蔑む。

この状況下で勝機を得るにはもう綺麗事ばかり言うてはいられない。それよりも——士狼は忌々しげな視線を自身の下半身へ落とした。

勃起がスパッツを押し上げていた。まったく鎮まる気配もなく大きな染みを作っている。

……やはりおかしい。

それに先ほどから眩暈がする。

一瞬でも気を抜けば膝から崩れ落ちてしまいそうになるほど、足元がおぼつかない。浮遊感がさらに増していると言うべきか。

「はあはあ……くつ、大牙お前、俺の体になにかしたか」

「さあ？ 発情期が来たんじゃないですか？ 皆が見ているというのになんて恥ずかしい」

「その物言い、やっぱりお前なにか」

詰問しようとした瞬間、視界が大きくぶれた。前に倒れていく体を一歩足を出してどうにか支える。

「糞がっ!!」

体が燃えるように熱い。

ますます酷くなっていく体の異変に一刻の猶予も残されていない気がした。寸秒を争う事態なのだとしたら、まだ踏ん張りのきく今を置いて他にない。

士狼は爪先に全力を入れてマットを蹴った。

駆ける先は大牙の真正面。

「飛んで火に入るなんとやらですよ先輩」

「ほざけっ!」

両者がぶつかり合う直前、士狼は踵の向きをわずかに内側に傾げた。手四つに組み合うつもりだったのか、腕を持ち上げる大牙の横を神速に駆け抜けるや、その際、捕らえた片腕を思いつきり前へ放りやった。

「ぬおっ?」

コーナーへと大牙を勢いよく振る。

ポストに縫いつけられた標的に見舞うは、側転からのエルボ―攻撃。後ろを追走していた士狼の天地が入れ替わる。流麗にたゆたう狼の豊かな尾が宙に一回転を描き、突き出た片肘が大牙の胸を強襲する。

「まだだっ!」

鮮やかなスペース・ローリング・エルボーを食らって前によるめく男を背後から追撃するのは、フェイスクラッシュャーだ。大牙の後頭部を掌に押さえて容赦なくマットに叩きつける。顔面から突っ込み、漏れるくぐもった呻き声にしかし士狼の顔に余裕の色はない。目を血走らせ、滝のように全身から汗を噴かせながらすぐさまトップロープへ上がると高らかに跳躍した。

時間がない。焦る心が続けざまに技をしかけさせていた。

仰向けになって苦しげにのたうつ男の腹に打ち込むダイビング・フット・スタンプは、だが両の足裏は虚しくリングを挟った。身を回転させて素早く避けた男が尻をマットから離れたとき、さらに機敏を誇る士狼はすでに彼の背後を奪っていた。「ラフファイトは容認されてるんだよな」

凄みの利いた声とともに士狼が片脚を跳ね上げる。

繰り出すのは渾身の急所攻撃。ドゴツという鈍い音が犬牙の股間に響く。剥き出しのままの陰囊が潰れるような嫌な感触が足の甲にあった。

「うぐっ!? ……が、はっ……」

犬牙が片膝をつく。

言葉になるまい。臓物が飛び出んかというほど大きく開かれた犬牙の口から掠れた声が漏れる。昏倒してもおかしくないほどの猛烈な激痛に襲われているのか、硬直しきった体の全身の毛が針鼠のように立ち上がっていた。微動だにしない。睾丸は鍛えようがない男の急所中の急所なのだから、金的蹴りをされたら悶絶するほかない。

脂汗が虎柄の背中にじっとり浮くのがわかった。

これでしばらくはまともに動けないはずだ。

小休止によりやく深い息を入れようとした刹那、その当て推量は粉々に砕かれた。

なぜ動けないと判断したのか。なぜ距離を置こうとしなかったのか。金的という破壊的なダメージを与える印象が土狼の油断を招いたか。否、すでに冷静な判断を下せないほど体力的、精神的に磨耗していたのかもしれない。

驚きに見開かれた目には、己に濃い影を落としていく巨体が映っていた。

「……俺の愚息を可愛がってくれて嬉しいぜ先輩」

「バケモンが」

「お互いに、だ。しかし試合運びが性急すぎる。いつもの先輩なら確実に相手の体力を削る箇所に技を打ち込むのに、先のはどれもミリずれている。らしくねえなあ精彩を欠くとは。どうしてだろうな？」

長年トップにあり続けた土狼に技術面で意見するとはこの男、さては増長したか。いや、その粗暴な口ぶりとは、眉間に皺が寄っているところを見るにどうやら先ほどの金的が相当頭にくたらしい。

「ありがたいご指摘どうも」

「フッ、後輩からのアドバイスに耳を傾けてくれるなんぞ俺にはもったいないほい先輩だ。……ならお節介ついでにも一つ。金的つつうのはな、こうやるんだよッ!」

よろよろと立ち上がる緩慢なモーションに完全に隙を突かれた。

犬牙の目が燐光を発するがごとく凄絶に輝いたときにはすでに遅かった。リングを蹴った彼の太い片脚が不気味な風切り音を立てるや、まったくの無防備状態だった股間を急襲する。

「くっはっ!」

息ができない。

股座に足がめり込む感覚を覚えた瞬間、吐き気を伴うほどの悪寒が下腹部から全身に伝播する。それは体中の細胞という細胞を縮こまらせるような耐え難い鈍痛だった。寸分の狂いもなく、的確に両の睾丸が打ちすえられたのだとわかった。

脳髓が激しく明滅し、立ち続けることを放棄した脚が折れマツトの上へ横倒しに体が崩れ落ちる。

これが地下プロレスで鳴らしてきたチャンピオンの金的——。荒くれ者たちの睾丸をいくつも破壊してきただろう熟達した一撃。それを今、己はまともに食らったのだ。苦悶に嘔き出す唾が土狼のマズルの端に無数の泡となって生まれてはこびりついていく。

「使いもんにならなくなっちゃったらすまねえ先輩」

「ぐっ、うう、がつ……」

「わかるぜ、今は痛みでそれどころじゃねえってことは。けど安心してくれ、先輩の子種がなくなっても俺の愛は変わらねえからよ。はあああ、それにしても何て可愛らしいんだ、先輩の痛がる表情もまた俺の股間にガンガン響くぜえ」

体を丸く屈めて悶絶し続ける土狼の鼓膜を震わす、歪な愛の宣告。

一切の余裕を奪われた元チャンプはただそれを甘んじて受け取るほかなかった。決して容認することのできない台詞を、ぼんやりと何やらのたまっているとしか理解できていない状況では不条理な告白の一蹴まで及びようもない。

屈辱ここに極まれり。

己の引退スペシャルマッチとして招かれ、その実、見事に欺かれてあられもない痴態を観衆の見つめる前で曝け出している。そして今はこうして無様に金的を食らい、痛みの中のうち、挙句の果てにその姿を金的をお見舞いした本人から、ずっと目のかけていた後輩から、邪な想いでもって見守られるなど誰が想像しただろうか。

夢なら覚めてくれと願う土狼に、しかし狂宴の続行が告げられる。

「それはそうとそろそろ決着をつけさせてもらう、ぜっ！」

怪力が足をすくう。

瞬く間に足首が持ち上げられて体が宙吊りになった。片脚を大牙の首の後ろへとかけられると完成したマフラーホルドが膝関節を襲う。

「ぐああっ、があっ！」

頭に血がのぼるうえに関節ダメージがなけなしの体力と精

神力を奪っていく。

しかしこの大牙という男、片手に大の大人を吊るし上げるとはその怪力は無尽蔵とでもいうのか。惨めに逆さ吊りにされたその構図は、肉屋の大男と捌かれるのを待つ哀れな獲物の姿を彷彿とさせた。

そう、獲物は今まさに捌かれようとしていた。

土狼も自覚していた。大股が開いてしまったこの体勢は非常に危ういということを。

肛門に生温かな息が触れている。大牙の目と鼻の先に、コスチュームの裂け目から無防備なそこが丸見えになっているに違いなかった。

「絶景だ……」

頭上から感嘆が降ってくる。

至近距離、おそらく穴の皺の数まで仔細に数えられるほど近い。

そして、自由を許している大牙のもう片方の腕が求めてくるものは――。

「くああっ！」

土狼は空中で身をのけ反らせた。

思った通り、大牙が再び指で菊門を弄び始めたのだ。感じる温い液体は唾が垂らされたものか。唾液まみれの穴がじゅぶじゅぶと下品極まる淫音を放ってまた苛められていく。だがすでに痛みなどなかった。潤滑液のせいとかそれとも先ほど丹念に解されたせいなのかもわからない。

しばらくして、ぬるりと侵入してくる物が指ではないと判断したのは、やはり音だった。

大牙が肛門を舐めていた。

ざらついた猫科の舌が愛玩動物でも可愛がるように排泄口を優しく舐<sup>な</sup>っていく。

その湿った音がいきなり激しく吸いつく音に変わった。

「うおっおっおっおっおっ、おほっ、おっおっ！」

あまりの驚きに土狼の喉が素っ頓狂に鳴る。

皺<sup>しわ</sup>が伸ばされるのがわかった。閉じていた括約筋を舌先が広げたのだ。熱くぬめった舌が押し入ってくる。物を食うための口が、糞<sup>ふん</sup>をひり出すしか能のない下の口と繋がっている。土狼の体を背徳的な気持ちよさが電流のごとく駆け抜けていった。意識が朦朧<sup>もうろう</sup>としていくなかで、彼の肉体がそれを快感と受け取った瞬間だった。

最後まで耐え抜いていた精神の柱が折らされるや、待っていたかのように快感がどっと押し寄せる。

「ぐあっあっあーっ、そんな汚い所をつ舐めるんじゃ、ねえっ！」

快美の濁流に流されながらも必死に口がプライドの残滓<sup>ざんし</sup>をこぼす。

「物欲しそうに俺の舌を締めつけてくるくせに説得力ねえなあ」

「くはあ……ああっそんなことしねえ俺は、俺は絶対そんなこと……」

その滓<sup>し</sup>すらも粉々に打ち砕かれた。

「ならこのガチガチにおっ勃<sup>は</sup>ったチンポはどう説明すんだい淫乱先輩？」

ニヤリと笑う男の手が股間を荒々しく掴む。

「ぐうっ！」

ショートスパッツにくっつき怒張<sup>どちやう</sup>を浮き立たせてしまつて

いたのだからどんな言い逃れも通じない。土狼は羞恥に顔を真っ赤にしながらしめるほかなかった。握られただけで思わず変な声が出そうになったなんて口が裂けても言えやしない。

そんな胸中などお構いなしに大牙の指がそこを吟味し始めていく。

覆い隠されたペニスの大きさを、形を、弾力を、探るがごとく丹念に這い回る指先。敏感な部分を爪に搔<sup>か</sup>かれるたびに甘い疼<sup>いた</sup>きが腰の奥から生じていった。

「ああ……はああ、あふっ……ううう」

優しく戯れるような愛撫に土狼のマズルから涎<sup>よだ</sup>が垂れていくのを本人は自覚しているかどうか。

五本の爪先が絶妙な力加減で隆起の上で踊っていた。

雁首<sup>かりけ</sup>をくすぐられたとき思わず熱い吐息が漏れた。そのうちの一本が今度は亀頭溝<sup>かめかぶち</sup>を何度も搔<sup>か</sup>きだしたのだから堪らない。布地のざらつきも重なって痺れるような快感が全身に走った。

蛇の生殺<sup>なまころ</sup>しだ、いつそのこと豪快に扱<sup>つか</sup>かれたほうがどんなに諦<sup>あきら</sup>めがつくか。

「先輩、チンポバッキバッキやねえか。それにこんなに恥ずかしい染みを作って！ そんなにぶっ放<sup>はな</sup>したいんならそろそろ自分に正直になつたらどうなんです？」

「……誰、が……ううそんな、こと……」

否定の言のなんとか細いことか。

いつの間の下ろされたのか背がマットについていた。すかさず奮<sup>ふん</sup>い立とうと脚に力を入れようとしたがその力が入らない。それどころか全身が脱力でもしてしまったかのように弛緩<sup>しかん</sup>していた。

それでも何とか逃れようと体を捻<sup>ひね</sup>つてみたが魔の手は離れ



ない。

快感が途切れない。

右に左に腰を揺すってみても吸着してしまったかのように大牙の手が引っ付いてくる。

「ああ……ああ……」

どうにか拒もうと両脚を固く閉じるも、股の間で分厚い手は蠢き続けた。淡い快感がさざ波のように押し寄せる。絶え間ない継続的な愛撫は決して強いものではない。だが耳に吐息を吹きかけられるにも似たその繊細な快感の連続はジリジリと士狼の射精欲を焦がしていった。

出てしまいそうになる声を必死に押し殺した。

飲み込んだ嬌声はしかしマズルから抜ける荒い鼻息となつて陵辱者の耳を刺激したようだ。股間を這っていた手の動きがあからさまに激しいものになった。

「ぐあっ!? やっやめろっ、あああっ!!」

めくるめくほどの快感が士狼を襲う。

先ほどの比ではない。スパッツに深く食い込んだ五指ががっしり剛直を握って扱っていた。一切の手加減なく揉みしだかれて男の背が瞬く間に反っていく。にわか筋肉が緊張し、開き放しのマズルからは乾いた呻きがいくつもこぼれていった。異常だった。

男に扱かれているという嫌悪感を軽々吹き飛ばしてしまふほどの快楽に肉体が喜んでゐる。にちゃにちゃと耳に届く淫猥な響きの出所が己の股間だと知ったとき、天井を睨む士狼の目尻に涙がうつすらと滲んだ。

この状況下で、意思に反して肉体は与えられる性的刺激を浅ましくも甘受している事実。

汗と先走りにまみれて淫らな音を奏でている愚息が今なにを欲しているのか、

「先輩の睾丸、上がりきつてカッチカチじゃねえか! 早くぶっ放してえというわけだ」

大牙がまるで代弁するように言った。

そう、体が射精を渴望していた。たった一時の悦楽を味わいたいがために、これまで積み重ねてきた栄光をいとも簡単に捨てようというのだ。なんと不埒千万な肉体か。大切なコスチュームを己の汚液で穢すなど、ましてや長年王道を歩んできたチャンピオンが無様に観衆の前で絶頂を晒すなど断じてあつてはならない。

あつてはならないのだ。

決してあつては――。

駄目だ……迫ってくる。抗いようもないほどの超絶的な感覚が腰の奥から沸々と込み上げてくる。よせ、それ以上刺激するな。このままいけば俺は、俺は……もう二度と過去を振り返れなくなる。大切な何かを失ってしまう。

だが、その願いは虚しくも粉々に打ち砕かれた。

鷲掴みにされる限界にまで充血した龟头、そのままそこを激しく捏ねくり回された刹那、

「が、はっ……っ!!」

士狼の体が仕留められた獲物がごとく小刻みに痙攣した。

さらに一段膨張する膨らみ。スパッツにくつきりと血管の筋まで浮き立たせた怒張が何度も跳ねる。瞬く間に濃い染みができ、すぐさま大量の白い粘液が布地からどぶどぶと染み出していた。

「おぐっ、ぐうううっ!」



「おおっ凄え出てるっ、チンポがビクビク脈打ってらあ」

「はあっはあはあ、ち、畜生、糞があっ!!」

それは大牙へ放った言葉か、それとも辛抱できなかった不甲斐ない己を咎めた言葉か。

下腹部をじんわりと甘ったるい疲労感が包んでいる。

「おっほお、すっげえ量! いったい何日溜めてたんスカ先輩? ああ、奥さんが妊娠中だからか。それならそうと云ってくださいよ本当水臭いなあ、俺なら毎日でも先輩の性処理してやるのに……」

仄暗い笑みが見下ろしていた。

露骨に放たれる違和感に士狼は身震いした。男の本心が今や隠れることなくその瞳を狂気に染めていたのだ。越えてはならない一線を越えて何も怖れるものがなくなつたせいだ。

「ぐっ、なに馬鹿なことを言ってる。もう止める、俺には妻が」  
「馬鹿? どの口が言う? たった今まで野郎の手で扱かれてよがっていた男が先輩面して説教とは……こんなに淫らで浅ましい体液をたっぷり放出した男がよくもまあそんな台詞を言えるもんだ」

嫌味をふんだんに含ませてにやける大牙の暗い視線が手元に落ちている。

うっとりときと見つめているその手がおもむろに高く掲げられるや、広げた指の間に白い粘液が何本も淫らな糸を引いていく。

「……くっ」

士狼は齒軋りとともに目を細めた。

自身が放った欲望の証をまざまざと見せつけられたのだ。それは照明を受けて生々しく粘った艶を帯びて士狼の網膜を激しく焼いて責め立てた。

ぐっしよりと濡れる股間の不快感が夢ではないと告げている。

それもただの夢ではない、悪夢だ。ついに己は取り返しのない過ちを犯してしまった。神聖視しているリングの上で性的興奮を催すどころか、まさか絶頂に体を震わそうとは。穢れたコスチュームともども、自身にとってそれは大罪を犯したに等しかった。

積み重ねてきた栄光が、他人に誇れる人生が、崩れていく音がする。

こうも一瞬で失えるものなのか。長年を経て出来上がった血と汗と涙の結晶がこれほど脆く砕け散ってしまうものなのか。一時の快楽を得るために払った代償はあまりにも大きかった。精液の滴る指が大牙の大きな口の中へと消えていく。

彼の喉がゴロゴロと鳴っていた。

美味そうにゴロゴロと鳴っていた。

そうだ、これは血でも汗でも涙でもない、決して放つてはならない禁断の体液をここで放ってしまったのだ。不浄たる精液を聖なるリングに零してしまったのだ。なんと罪深いことをしてしまったのだろう。呆然とする士狼の空虚な胸の内を慙愧の念が埋めていく。

しゃぶり尽くされてほんのりと湯気を上げる大牙の指が穢れてしまったコスチュームの陰に落ちた。

「物足りねえ……もつとだ、もつとくれよ先輩」

好物の味を知ってしまった猛獣を誰が止められよう。

ショートスパッツの破れ目が乱暴に引き裂かれるや、まだ力を失っていない一物が風を切って飛び出した。大牙の目に、観客の数百の目が見つめる大型モニターに士狼の精液にまみれ

たペニスがつまびらかに映し出される。浅黒く淫水焼けした三十路男の露茎開帳に誰も彼もが大きく唸った。

最も間近で拝んでいる男に羨望と嫉妬の眼差しが集中する。「やっぱすっげえ先輩のチンポ……それにこの蒸れた玉の臭いたまんねえぜ最高だ」

大牙の鼻先が陰囊に突っ込まれていた。

ふがふがと鼻が鳴っている。男に性器の臭いを嗅がれている。士狼の目尻にじわりと涙が浮かぶ。

「くううつ、こんなつこんなことが許されてたまるか……もう、もう勘弁してくれ……」

士狼には抵抗する気力さえ残されていなかった。諦めたと言っている。霧のように紗のかかる意識のなかで悟ったのだ。この男の前では抵抗は無力であると。尋常でないほど火照るこの体を慰めてくれる存在が今はただ欲しかった。それがたまたま大牙という男だったというだけの話だ、それでいい。楽になれるのであればもうそれで――。

士狼の怒張を大きな口が含んでいた。

茹るほど熱い唾液の海のなかでペニスが跳ねていた。

野郎の口にしゃぶられて萎えるどころかますます海綿体に血が集まって硬くなっていく。そして限界までパンパンに膨らんだ亀頭へと舌は妖しく巻きつくのだ。男の感じるポイントを的確に責めて射精をうながすのだ。見事に張りだした雁首を舐り、鈴口を握ねくりまわしながら。

士狼は甘い息をついた。

不埒な舌によって腰の奥が疼いていた。再び呼び覚まされた射精中枢がにわかに絶頂へと肉体を導いていく。

「た、大牙っ口を離せつ、これ以上はもう、駄目だもうっ離し

てくれっ！」

急激に高まる射精感に牙を食いしばって懇願した。

だが一向に口が離れる気配がない。

見れば貪欲にフェラチオに励む大牙が、一心不乱に自身の男根を抜いていた。荒々しい鼻息をたてる男の表情は鬼のように険しく、口淫と千摺りに没頭する姿からは聞く耳などとうに持っていないことが一目瞭然だった。

切羽詰った士狼の声色に、迫る絶頂を感じ取ったか大牙の吸いつきがさらに増す。

「はっ、が、大牙あつ！ 出ちまうっそんなに吸ったら俺出ちまうっ！」

股間にしがみつく頭をのけようと伸ばした指は、しかし、徒に頭髪を掻き乱すだけだった。ペニスを根本まで咥え込んだ頭はびくとも動かず、ただ淫らに吸い続ける振動が手に響いた。射精するまで離れない吸精口の奥めがけてついに精が迸る。

「出る出る出るっ、がはっがっ……ぐっがあああっ!!」

腰の奥底から凄まじい勢いで精液が駆け上ってくる。膨大な量の熱する白濁に精管と尿道を限界まで拡張させられ、ジュウッと焼かれ、士狼は白目を剥いた。脳髄までもとろとろに溶けさすほどの絶頂感が体を襲う。

噴出している。

大牙の、後輩の、野郎の口の奥に射精してしまっている。

嗚呼……筆舌に尽くしがたいとはこのことか。

搾り取れるだけ搾り取る算段なのだろう。吐精するそばから舌が亀頭に快感を与えていく。もつと出せ、もつと食わせろと言わんばかりに亀頭溝をこそぎまくって催促している。その要望に士狼の肉体もまた殊勝にも応えた。会陰部を何度も脈打た



たせながら新たな獣液を口の中へ送り出していった。

マズルの端から涎を垂らしながら士狼は恍惚と酔った。

そんな夢見心地の彼の顔へ大きな影が落ちた。

判然としない意識のなかでそれはとても美味そうに見えた。肉々しい色艶に食欲を、いや性欲をそそられたのだ。てらてらと濡れている先端が迫ると自然とマズルが開いた。含んでみると少しのしょっぱさと雄の獣の味を舌の味蕾がひろった。本当に美味い、と思った。もしかしたら俺が忘れていただけで、ずっと前から好物だったのかもしれない。士狼は乳飲み子のようにそれを吸ってみた。

見下ろしている大牙の顔が苦しそうな、今にも泣き出しそうな表情に歪む。

「ぐううつ先輩っ、ううつイクっ!!」

口の中の異物が一際大きく膨らんだ次の瞬間、生臭い液体が一気に口腔に溢れた。

すぐさま士狼の唇を大牙の唇がふさぐ。

そうして口内に流し込まれてくるのは、己が先ほど放った劣情。侵入してきた舌によって二人分の精液が士狼の口の中で淫らに混ざりあう。粘度の高い濃厚な種汁まみれの舌を互いに絡ませながら士狼は切なげに鼻を鳴らした。野性味の強い雄の性臭が鼻から通り抜けていく。

子種が胃に流れ落ちていくその感覚にさえ快感が走った。

今や体を軽く触られるだけで、微風に毛が遊ばれるだけで、思わず嬌声を上げたくなるほどの悦楽が生まれていた。なぜだかわからない。わからないが理由などもうどうでもよかった。だからもつと慰めてほしい、こんなにふしだらになつてしまった体を、なあ大牙よ。

熱視線を送る先に、はたして求める物はあった。

疼いて仕方がない後孔を慰めてくれる物、大牙の灼熱が尻に宛がわれようとしていた。

「先輩……」

左右に大きく開かれた両脚の間から巨軀が覆いかぶさってくる。

凶悪な肉兜の先が焼印のごとく肛門を熱した。熱い。たまらなく、熱い。

「はああああ……あ、ああ……」

……予感がする。

途轍もない絶楽に襲われる予感が。

大牙が腰を進めるやそれは圧倒的な質量で入ってきた。肛門を引き裂かれんかと思えるほど広げられて士狼の喉が小さな悲鳴をあげた。

それは恐怖と紙一重の未知の快感。

雄の本懐、生殖を果たすべく侵入してくる巨根に腸の襲を翻られて毛穴という毛穴がぞわりと粟立つ。未だかつて経験したことのない快感に一瞬気が遠くなった。

「大牙っ、大牙っ!」

気を失うまいと必死に名を呼びながら襲いくる快美によがった。

排便するだけの器官がこれほどまで気持ちよかったとは知らなかった。女とのセックスの比ではない。その倍、いや数十倍に値するのではないか。男との初めて味わう肛交に士狼はついに溺れた。

「先輩、俺のチンポの味どうっすかい? もう根本までずっぱし挿入してるっすよ!」

「あああつ……凄え、凄え凄え凄えよお……」

この充足感ぶりよ。士狼は歓喜に涙した。

ミチミチに直腸が埋まってしまっている。その先端はS字結腸にまで達していた。S字を誇る太魔羅がいま丸ごと体内に収まっているのだ。そう思うだけで射精しそうになる。

大牙の腰が前後に動き始めた。

「はああつ……はあああつ、ひい、ひいひいひい！」

腸壁が擦られるたびに痺れるほどの快感が生じていく。

それだけではない。直腸内に複数ある狭まった弁の部分を、亀頭が無理くり押し広げて越えていくときの感覚は意識が飛ぶほど気持ちよかった。

ポタポタと顔を濡らすのは滴ってくる大牙の汗か。

上を向けば汗だくになりながらひたすら交尾に励む凛々しい雄の姿があった。

真剣な眼差しと目があつた。

犯している男をその瞳に焼きつけながら、征服者はどこまでも欲望に忠実に腰を振っていた。激しいアナルセックスで結合部が白く泡立つほどの逞しい腰遣いは、雄を雌へと変えるには十分過ぎた。士狼の雄々しい嬌声が長く尾を引いていく。

腰を打ちつけるスピードが忙しくなった。

大牙の強烈な抽挿運動は絶頂に近いことを告げていた。種つけの予感に士狼の肉体までもが絶頂を迎えんと色づき始めた。乳首を硬くしこらせ、背をのけ反らせ、鈴口の奥を覗かせ、そして睾丸を陰茎の付け根まで寄せ上がらせて。

大牙の腰が大きく引かれ、そして。

肉槍が渾身の一突きに最奥を穿つや、ついに獣の咆哮がオーガズムを宣言する。

「先、輩つ、ぐおつおおおつ、おつぐうううーっ!!」

士狼の尻をがっしり引き寄せながら大牙が射精していた。

射出される恐ろしい量のザーメンがS字結腸のさらに奥まで流れ込んでいく。精悍な虎の遺伝子を持った精子の群れが、受精すべく先を競って腸壁を真っ白に染めていく。この凄まじさならもしかしたら子を宿してしまうかもしれない。そう男の士狼に錯覚させてしまうほどの激しい射精ぶりであった。

膨れていく下腹部に、そして彼もまた盛大に精液をぶちまけていた。

立て続けに精を放った反動か、強い虚脱感が体を襲う。

だがそれ以上に体や心を満たしている名状しがたい感情が、多幸感だということに士狼ははたして気づいたかどうか。

大牙は自身のショートタイツの中にスツと指を滑り込ませた。そして内側の隠しポケットから小さな青色の錠剤を数粒取り出すと、気づかれないように士狼の肛門の中へとそれを捻じ込んだ。ちょうど直腸温に即座に溶けるように調整してある。経口投与より腸の粘膜から直に吸収させたほうが効き目ははるかに高いのだ。

連続の射精に萎えていた士狼のペニスが早くも膨張しだす。

さすが即効性の勃起薬だ。だが、ただの勃起薬ではない。勃起を促す成分は巷に出回る処方薬と変わりはないが、これは地下プロレスで使用するために特別に作らせたものだった。成分をとことんまで濃縮させて、さらに興奮促進、精力増強効果の高い原材料をふんだんに配合させてある。市井に出せば危険薬物として押収されるような代物だった。

先ほどの士狼の乱れぶりを見るにどうやら薬の効果は観面

だったようだ。

「先輩、眠るにはまだ早いっすよ。今度は俺が孕む番スから」  
眠たげにとろんと瞼の下りかかった半覚醒状態の士狼に言っても理解できているかどうか。

大牙は生唾を飲み込んだ。

ぐったりと体を投げ出す士狼の閉じなくなった尻穴から今しがた放った白濁が漏れていた。ライトにねっとり艶を浮かべるその光景のなんと淫猥極まることか。

そうだ、ついに先輩を物にしてやったのだ。

犯してやった。欲望のおもむくままに精をぶちまけてやった。そこにまったく後悔などなかった。引退を聞かされたときからずっと胸の内を占めていた虚無感が充実感に取って代わっていた。

「先輩には感謝してるんすよ、俺がここまで強くなれたのはあなたのお陰なんスから」

そう言うで大牙は懐かしげに目を細めた。

地下プロレスの世界へ身を投じたのはレッスルスターダム ZERO に所属したそのすぐ後だった。理由はルール無用という自由さが単純に気に入ったからだ。裏を返せばブックの存在する表のプロレスにはほとんど興味がなかった。士狼という片想いする男へ近づくために必要だったから選択したまで。先輩至上主義でプロレスは二の次。だから本腰を入れて頂点を目指す気などさらさらなかった。

地下プロレス——。

裏プロレスとも呼ばれるそれは、いわゆる表のプロレスとは一線を画す。

リアルファイト、賭博はもちろん、なかには性的行為を売り

にしたものまで存在する。さらに深淵を覗けば、セメントやガチンコなどといったものが生温く感じるほどの殺し合いの世界が広がっていることを知るだろう。

大小さまざまな団体が存在するがその総数を把握している者はおそらくいない。無名に近いものや、富豪が己の欲を満たすために広大な敷地内で秘かに開催するものなどは調べようもない。

もちろん世間に名の知れた団体も数多くある。

特色はそれぞれ違うが、『プロレスリング牙』『WWSプロレス』『闘龍門』といったところは、性的な要素を含みつつも同時に、強さとはなんぞや、真に最強の男を決めるにはどのようなにしたいのか、アングラに位置づけられながらも武人が求むそんな武道の真理を探求している興味深い団体も存在する。

そんな多種多様なアングラ団体のひとつに大牙は入った。

そこは性的行為を売りにした。それも男女間ではなく男と男がリングの上で性的に体を絡めあうところだった。相手を先に絶頂へと至らせた者が勝つという単純明快な勝敗ルールは多くの客と金を集めた。

大牙が王冠を戴くまでになるには在籍して一年と経たなかった。

格が違ったのだ。無論、その優れた体格によるところも大きかったが、何よりも他のレスラーより闘志が段違いに高かった。その原動力は、欲。それも日々悶々と溜まっていく性欲の強さが彼を一躍スターダムに押し上げていた。そこに入団した理由が、士狼へ募る性的な欲求をどうにか発散させるためだったのだから、わざわざ闘志を鼓舞させる必要もなかったわけだ。

リングコスチュームが視界に入るだけで股間が疼いた。

士狼とよく似た狼獣人のレスラーはとことん鬨りまくった。底無しの肉欲は狂気すら帯びて地下プロレス界隈を席卷した。性豪、大牙の前に立ちほかれる者などいるはずがなかった。彼の圧倒的な性的パフォーマンスを見るために客が客を呼び、金が金を生んだ。

ヘビー級王者を名乗るようになると手元に莫大なファイトマネーが入ってくるようになった。大金があつたらやってみることがあつた。自身でプロレス団体を主宰したいと思つていたので。大牙が『獣神リングス』を立ち上げるまでにそう時間を置かなかつた。

獣神リングス——それはピンフォール勝ちなど許さない男と男の性の狂宴の場。

そう、大牙がここまで強くなれたのはまさしく士狼のお陰なのだ。

退屈な表のプロレスよりも楽しめるだろうと、異常なほどに滾る士狼への想いをこれ以上こじらせまいと、地下プロレスの世界へ飛び込んだ大牙。同じレスラー姿の男に興奮し、彼らを犯しては性欲を解消する日々が続き、気づけばチャンプになっていた。

それでも、心が満ち足りることはなかった。

実際は士狼への執心は深まる一方だった。やはりどうしようもなく好きなのだ。たまらなく愛おしいのだ、滅茶苦茶に犯したくなるほどに。そんな膨れ続ける劣情を堰き止めていた壁に亀裂が入ったのは、あの一言を耳にしたときだった。

引退——。

堰を切って、一気に歪んだ愛情が溢れた。

獣欲が弾けた。

離れていくならいつそのこと犯してやる。俺の自慢の魔羅でよがり狂わせてやる。屈服させてもう二度とこんな辛い思いをしないように、

「先輩はもう俺の物だ……俺の物なんだ」

薬で強制的に勃たせた士狼のペニスの上に大牙はまたがつた。手に握るそれからドクドクと逞しい脈動が伝わってくる。薬の効果か火傷するように熱い。

大牙は愛おしそうに竿肌を撫でた。

この硬くいきり立つ肉棒を毎晩妻の膣にぶち込んでいるのだろうか。夫の夜の務めを果たしているのだろうか。ああ、狂おしいほど妬ましい。考えれば考えるほど胸の中にどす黒い感情が湧いてくる。

誰にも渡してなるものか。

大牙はゆっくりと腰を落としていった。

「おお、おおおっ」

入ってくる……俺を孕ませるために先輩のチンポが。

琥珀色の瞳が感動に濡れていた。夢にまで見た士狼との性交だった。夢精に何度下着を汚したことだろう。妄想して何度手淫に励んだことだろう。しかしこれは現実だ。妻に子を孕ませた夫の生殖器が今度は俺をも孕まそうとしている。

腸内を灼熱に炙られて大牙はたまらず天を仰ぎ見た。

これだ、これを俺は望んでいたのだ。

全身の細胞という細胞から白い粘液がどろりと滲み出てくるようだった。それはやがて体をねっとり包むと発情する雄の獣のフェロモンとなつて毛の先から放たれていった。

「おおああ、すっげ、あつはああ……」

士狼の鬱蒼と茂った陰毛を尻の下に押し倒すと、大牙は艶か



しい息をついた。

わかる。肛門に力を入れて何度かひくつかせてみれば直腸がはつきり知覚する。ずっぽりと挿入されている逸物の太さを、形を、弾力を。いま直腸がペニスの形に変形させられてしまっている事実を。

腰を動かさずにはばらくその状態を楽しもうとしたが、

「はう……う、ううぐ……」

快感に声押し殺すことができない。

鉄のように硬化した陰茎に舐められて腸の柔い肉が溶けるようだった。

肉体が求めているのだと知った。この男の種を欲しているのだと。この男の種を体内深くに注いでもらって子を身籠りたいのだ。その願いを叶えるために何が何でも射精させようと今から雄膺は懸命に奉仕することだろう。

子作りのために両者の思惑は合致しているわけだ。

つまり二人は相思相愛なわけだ。

愉悦を満面に浮かべる大牙の表情が凶悪に染まった。

愛する配偶者がいるというのにこのペニスは不貞にも妻以外の体内に種を植えつけようとしている。なんと不屈きな生殖器官か。だがそれを俺は拒むまい。危険を冒してでも妻よりも愛する人と契りたいのだから。離婚覚悟のセックスだなんて愛人冥利に尽きるといふものじゃないか。

「先輩、さあ俺と子作りしましょう……」

もう返事をする気力すら残されていないのか士狼の口はただ呆けたような呻き声を垂れ流すだけだった。

だが今さら子作りの了承など得る必要はないのだ。尻に咥え込んだこの少しも萎える気配のない男性器が全ての答えなの

だから。

士狼の腰の上で逞しい尻が大きくバウンドした。

腸液と我慢汁にしとどに濡れたペニスが激しく出入りする。肉の杭は的確に大牙の性感を突いた。いい塩梅に張り出した雁高が前立腺をこそぐのだからたまらない。抜き差しするたびに敏感なそこを引っ搔かれて大牙は悶えた。

意識が朦朧としていてもどうやら快感は伝わっているらしい。

「……う、うう……ぐ、あつ、あうう……」

眉根を寄せ、開けっ放しのマズルから咽び泣くような甘い吐息が漏れている。

しかし、本人はどこまで自覚しているのだろうか。快楽をもたらせているものが男の尻穴だということを。精を搾り取ろうとペニスへ戯れているのがむさび野郎の直腸の柔褻だということ。肉体が後輩の尻の中に種付けようと必死になって海绵体を充血させている事実を。

激しいまぐわいはセックスというより完全に猛獣の交尾だった。

これほど見応えのある淫乱ショーは他にあるまい。大牙の試合に人が殺到するのも道理。今や会場のそこかしこから悩ましい男の呻き声が聞こえてくる。彼らの血走った目はひとつ残らず交接部が映し出された画面へと釘づけになっていた。その誰もの片手が一様に同じ動きをしていたのだが何をしているかは想像に難くない。

場内に充満する野郎どもの淫の氣に当てられて大牙の気分も高まっていく。

腰をリズムカルに弾ませながら大牙は己の乳首を抓った。

「おぐうつ！ おっおおっ」

電撃のような刺激が体を痺れさす。

もつともつと全身で先輩を感じたかった。

士狼の腰にもはや檻褌切れのようにへばりついていいるショートスパッツを剥ぎ取ると鼻に押し当てた。汗と精液にぐっしより湿ったその蠱惑的な雄の臭いに頭がくらくらした。次いで口の中に押し込んだ。吸った。音を立たせてじゅうじゅう吸った。先輩のどんな体液でも体内に入れたかった、養分として吸収し己の血肉の一部にしたかった。

「おああっ、凄えよ先輩っ先輩いい！！」

最後にそれを愚息に巻きつけて抜きまくった。先輩のスパッツは分泌されたありとあらゆる男の体液を吸って具合のすこぶるいい極上の性具と化していた。

最高潮へと突き進む快感に脳裏が明滅し星が散る。

そして前立腺が凹むほど強く亀頭に殴られたのが絶頂の引き金となった。

「おごおっ！？ お、おお、おおおっ……イク、イクイク！ くんぐううーっ！！」

くっぱりと広がった尿道口から熱された精液が噴水のごとく噴き上がる。

次々と何弾も打ち出されるそれは大牙の頭を高らかに越え、辺り一面に飛沫となつて飛び散っていく。白く粘った顔面シャワーを恍惚と浴びる男のなんと幸せそうなことか。

射精にきつく締まる肛門にどうやら士狼もたまらず絶頂を迎えたようだ。彼の蟻の門渡りを手で探ると、体の奥深くへザーメンを送り届けるべく力強く脈打っていた。

「すっげえドクドクいつてらあ……できちまう、先輩と俺の子

ができちまうよお、ああ……」

大牙の目尻に滲むのは感涙か。

腹が子種で満たされていくのがわかる。受精必至、懐妊必至の大量の獣液が流れ込んでくる。優秀な灰色オオカミの子孫を残そうと躍起になった数億匹の精子が一個の卵子目指して死に物狂いで遡上してくる。どれほど仕込む気か、しばらくして貯精タンクが空になる頃合になつてもなお子種を送り込もうと会陰を脈動させているのだから、どうやら相手を実に孕ませる気満々らしい。こうなつたら赤子ができたら何が何でも認知してもらわなければならない。一人親だと生まれてくる子があまりに不憫でならないから。そうして二人と子の三人で仲睦まじく幸せな家庭を築いていこう。

そんな倒錯的な狂愛と蜜より甘い快樂に酔いながら大牙は幸福を噛みしめていた。

男の味の良さを覚えてしまった最愛の人の耳元に囁きかける。

「レスラーを引退だなんて絶対許さない。これからはずっと俺が先輩を指導してあげますね……もちろん地下プロレスの世界で」

優しくマズルの先に口づける。

精を吐き終えてすっかり萎えていた士狼のペニスが再び硬くなつていくのを尻の中で感じて、大牙は至福げに目を細めた。

——士狼は聞いていた。

混濁する意識がさらに彼方へと遠のくなかで、後輩からのその申し出とともにけたたましく流れてくるゴングの音を。それは士狼の試合続行不能を代弁する響きであった。

敗北したのだ。





勝利が確約されていた私的な引退試合で、前代未聞の醜態を晒した挙句に惨敗したのだ。

しかし不思議と恨み辛みはなかった。

意識が途切れる寸前、最後に網膜に焼きついた大牙の表情に釣られて彼の顔もまた柔和に解れていたことを本人は気づきもしないだろう。あの健気で朴訥な後輩の笑みがそこにあった。その柔らかい微笑と心地いい疲労感に包まれながら臉はゆっくりと下りていった。

\*

赤子を抱く妻に送り出されて男は家を出た。

仕事場は住まいから車で十五分ほど走らせた先にある、長年生業にしていたプロレスラー業を退いて新しく始めたパーソナルトレーニングジムだ。

三十歳の若さでレスラーを引退したことには少しの躊躇いもなかった。生まれてくる子のために少しでも命の危険が伴う仕事は避けたかった。家庭を最優先にしたかったのだ。妻も賛成してくれた。知己の連中からは臆病風に吹かれたかと冗談半分で笑われたものだが、たとえそう本気で思われていたとしても一向に構わなかった。

男の元王者という肩書きはジムの経営をすぐさま軌道に乗せた。

それからしばらくして男は経営の一切を数いる後輩の一人に任せるようになった。妻はそのことを知らない。そして今後教えるつもりもない。

運転して三十分が過ぎた頃、男の車は都会の繁華街に吸い込

まれると大通りから細い脇道へと曲がり、寂れた路地裏にある小さな駐車場で停まった。

相変わらず狭い空だ。

男は車から降りると、四隅をコンクリートに切り取られた歪な空を辟易と見上げた。

それから助手席に投げっていた手提げ鞆を拾うと歩き始めた。夜間に比べてさらに閑散と静まる午前の路地をしばらく行くと、地下に続く階段がぼっかりと黒い口を開けていた。男の足は立ち止まることなく、なんの飾り気もない無機質なその階段を下りていく。

段に靴音が響くたびに男の口から同じ数だけの甘く熱っぽい吐息が漏れていった。

下った先に伸びる通路を歩めば歩むだけ男の股座にできる影が色濃くなっていた。

突き当たりにある扉の前で男の足は止まった。

その重苦しい樫の扉の真ん中に掲げられた金属プレートには『1st RING』の文字がか細いダウンライトの光に輝いている。その横文字を見るや、手提げ鞆を握る男の手がじつとりと汗ばんだ。

鞆の中にはスパッツとリングシューズ、そして一枚の覆面が入っていた。

覆面レスラーとして今夜も男の試合がこの場所で行われていた。相手はよく見知った、男がかつて所属していたプロレス団体の後輩だった。試合が始まる夜七時までには時間はまだたっぷりである。それまでの数時間はその後輩とマンツーマンのスパリングで汗を流すのがいつもの決まりとなっていた。

小さな電子音が静寂を破って鳴る。



男は特別に与えられていた団員専用のカードキーで扉を開錠するとドアノブに手をかけた。扉の向こうから差ししてくる光の線がゆつくりと太くなっていく。  
男に刻まれる光は、肉情にだらしなく緩んだ狼の顔を照らし出した。

快楽の園へと続く淫靡の扉は開かれた。

そして男は踏み入る、男を愛してやまない者が待つ禁断の世界へ。

完

エピローグ――

1st RINGの一角にあるシャワーブースの中で、筋トレに苛め抜いた体を冷水が勢いよく流れ落ちていく。

黒峰が地下プロレス団体『獣神リングス』に籍を置いてかれこれ一年が経とうとしていた。

気づけば大学の学業を疎かにしてまでアングラの世界に夢中になっていた。初めの頃は新人の仕事といったらプロレスとは無縁の雑用ばかりで、胸を張って所属団体名を名乗ることは少々気が引けていたのだが最近は何もなくなくなった。先輩たちからようやく稽古をつけてもらえるようになったのだ。今も練習生扱いなのは変わらないもののリングに上ることを許された事実は間違いに黒峰のモチベーションを上げた。

もしかしたらあの大牙選手から直接教えを乞えるかもしれない。

シベリアンハスキーの青年の胸中を占めるそんな淡い期待。この場合、本格的に心技体を磨ける機会がやってきたことを真っ先に喜ぶところなのだろうがこの黒峰という男は違った。何よりも優先するものがその一点なのだ。

獣神リングスを創設した男であり現役チャンプでもある大牙へ黒峰が抱く感情は、憧れよりも恋情が増した。

一目惚れというやつだった。

きっかけは大牙のファイトスタイルにあった。対戦相手を超人的な力技でマットに沈めてから問答無用で颯る嵐のような一連の流れに目を奪われたのだ。まるで溜まりに溜まった憂さでも晴らすかのような荒々しい腰遣いに圧倒されっぱなしだった。観戦中に気がついたら股間が硬くなっていた。

本能の赴くままの動物的な雄の交尾。

そう表現できるほど、知性の欠片もない性交に堪らなく興奮した。

敗者に骨の髄まで叩き込ませるのである。どちらが雄として優れているのかを。体を蹂躪し、執拗に尻を犯し、なけなしの男としての矜持までズタズタに粉砕する。お前は勝者の慰み物になるためだけに存在を許されているのだとわからせるのである。

ああ、なんと甘美な男の世界だろうか。

黒峰はその世界に浸りたかった。

夢想のなかで大牙との肉体的接触に興奮を覚えるようになって久しい。いつか自分もあの逞しい体に抱かれたい。組み伏せられ、抵抗虚しく無理やりに犯されたい。

二十歳そこそこの猛々しい性欲が燃えていた。大牙の試合を陶酔の眼差しで見やつては、対戦相手を自分に置き換えて欲情したのも二度や三度ではない。堪らずに試合が終わったあとは急いでトイレの個室へ駆け込んだ。閉じた瞼の裏にさっきまで見ていた大牙の一物を思い描きながら今まで何度精を放ってきたことだろうか。

——そうだ。

その秘かな楽しみが、あろうことか本人の知るところとなつてしまったのだ。

先日の選手控え室で繰り広げられた光景が生々しく黒峰の脳裏によみがえる。

唐突に本人の口からトイレでの秘め事を指摘されたときは心臓が止まる思いだった。すべての血が凝固した体に激しい叱責と団体追放の旨が叩きつけられるものと覚悟した。だが……

手招きに彼のそばへ寄ってみれば状況は一変した。自身の下腹部へと大牙の手が伸びてきたのだ。驚きに見やれば彼の鋭い目に怒りの感情などではなく、その代わりに今まで見たことのない色を瞳は帯びていた。肉欲だった。ぞわり、と背筋が痺れた。その目を見た瞬間、黒峰は悟った。熱望していた甘美な男の世界へついに己は招かれたのだと。

こうも早く夢が叶うとは予想外だった。

未だリングネームを持たないただの新米がオーナーである大牙と接点を強くすることは容易でないと思っていた。会話を交わした機会も片手の指で数えられるほどのものだ。それがまさか向こうから誘ってくれるとは。

分厚い手に扱かれた先日の余韻が今なお黒峰の下腹部に熱くわだかまっている。

思い出ただけで眩暈のするような夢心地のひと時であった。

甘い記憶が黒峰の手を胸元へ持つていく。筋トレ直後のパンブアップした形のいい胸板が醜く崩れてシャワーの水滴を高く弾いた。

目を閉じて黒峰は胸を揉んだ。荒々しく愛撫してくれたあの人の手に見立てて乱暴に揉みしだいた。むちむちと肉付きよく育った胸筋が、まだ誰にも愛されたことのない無垢な乳首が、雑に弄ばれていく。——違う。こんなものではない。あの人の愛撫はこんな生易しいものでは……もっと激しくもっと。それでも、生まれる刺激は明らかに肉体に変化をもたらしたようだ。体表を流れ落ちていた水の一筋が臍の下で著しく流れを変えられて飛び跳ねていた。

強めのシャワーが諫めるように裏にふしだらな妄想を描く

臉を穿つ。

黒峰は構わずさらに水量を上げた。漲る男の先端をしたたかに連打する水滴が心地いい。

今度はいつだろうか。あの人がこの熱い滾りを慰めてくれる日の再来を願った。次回はただ突っ立っているだけでは済むまい。全力を出し切った末に敗北した無抵抗の体をあの人の好きなように料理されるに違いない。倒れ伏した己へののしかかってくる欲情した巨体、それを思い描くだけで黒峰の屹立の先に透明な粘液が浮かぶ。が、それはすぐさま水の流れに混じって排水口へと消えていった。

ふと、大牙との妄想に耽る脳裏に一人の影が差した。

完全に閉じられた、蜜月にある二人だけの世界に割って入る第三者。

そんな大それたことができる存在はこの世に一人しかない。

灰色オオカミの男はある日突然現れて、意識の外から土足で入り込んできた。男の名は士狼と言った。言わずと知れた表のプロレス界を牽引してきたジュニアヘビー級の王者だ。だがどんなに勇名を轟かそうともアングラを舞台に生きる黒峰には無縁の、住む世界の違う存在だった。あの日まで――。

どのような顛末があつて彼が 1st RING のリング上に立つまでに至ったのかは詳しくわからない。ただ何となく大牙の意向にそつてあの試合が組まれたことが察せられる程度だった。

栄光を極めた男がなぜ恥辱にまみれた試合に挑む必要があるのか。

レスラー人生を締めくくる最後の最後でつくかもしれない汚点、それすらも楽しめるほどの境地に至っていたのか、それ

とも単純に敗北を喫しない絶対的な自負があつたせいかもしれない。

理由はどうあれ、士狼は大牙と対峙し、そして敗れた。疑いを挟む余地のまったくない大牙の完璧な勝利だった。その場に居合わせた誰もが両者の熱い闘いを讃えるなか、しかしただ一人黒峰の胸中は穏やかではなかった。

大牙のファイトスタイルがわずかに変化していたのだ。

それは、加減を知らない暴力の嵐でもつて対戦相手を蹴り尽くす男の、闘いになんら支障のない機微に含まれるほどの些細な部分が変わっただけかもしれない。だが黒峰にとっては衝撃に等しかった。

士狼の肌へ触れる指先に、慈しむような情が宿っていた。

それだけではない。いつもは闘志に爛々と輝くはずの瞳を、情念めいた暗い膜が覆っていた。一段高い息遣いと言ひ、纏う雰囲気すらもどこか普段とは異にしていた。

なるべく身近で、恋心を焦がして大牙の姿を目に焼きつけてきた黒峰だからこそ気づけたと言つていい。

やはりこの試合は士狼の酔狂で組まれたものではない。

大牙の思惑がおぼろげに黒峰には見えた。試合中に素顔を晒してでも叶えたい何かがあつたのだろう。そして結果は彼の望み通りにおそろくなつたのだ。ここ最近の大牙を見ていたらわかる。これまでの憤懣を滲ませたような表情からすっかり陰が取れていたのだから。

変わったことと言えどもう一点ある。

黒峰は邪魔の入った妄想を早々に打ち切るとシャワーを止めた。火照る体を伝つてたちまち生温くなった水気をタオルに吸わせながらそしてそのまま乱暴に頭を拭いた。士狼を少しで

も早く脳裏から追い出したかった。頭の片隅にすら残したくなかった。

士狼の顔を見るのはあの日一日限りだと思っていた。

それがまさか……誰が表のプロレス界を極めた元王者が獣神リングスの一門に加わることを想像できただろうか。

午前中から付きっ切りで大牙が地下プロレスのいろはを教えているらしい。らしい、と言うのは誰も練習場に入ることを許されていないのだから仕方ない。文字通りマンツーマンのスパリングが秘密裏に行われていると聞いては黒峰の心中も安らかではなかった。

ある日、立ち入りを禁じられているその一室へと続く通路の向こうから二人が並んで歩いてくる場面に出くわしたことがあった。練習後なのだろう、コスチューム姿で全身汗みずくになった彼らとすれ違う際にふわりと香ってきたのは、二人の汗の匂いに混じる、微かな栗の花の匂いだった。

それを鼻腔が感じ取った瞬間、胸がざわざわとさざめくのを黒峰は感じた。

反射的に盗み見た大牙の表情は片時も忘れたことはない。発情した雄の顔がそこにあった。

許容しがたいのはそれが両者ともだったことだ。会話を弾ませる大牙の紅の差す顔を見上げる士狼の瞳もまた熱を帯びていた。どうやら彼らの目に黒峰の姿は映っていないらしい。短いやりとりすら交わすことなく、仲睦まじげに通路の角へと消えていく二人の後ろ姿をただ黙って見送るしかなかった。両者の間に入れる隙などありはしないと悟った。開かずの扉の向こうで濃密な時間が流れていたことを窺わせるにはそれだけで十分だった。獣神リングスの勝敗ルールからして何らその匂い

がしても極自然ではあるのだ。しかし、大牙にあのような表情をさせる士狼との間に男の性臭を漂わせている事実がどうしようもなく青年の胸を掻き糞るのだった。

シャワールームから出ると時刻は正午を回ろうとしていた。彼らが練習場にこもってからすでに二時間近く経っている。

今夜も二人が対戦するシングルマッチが組まれているからいつもより念入りに体を温めているのだろう。密室で二人きりで……どうしても湧いてしまうつまらない雑念に悶々としながら黒峰は外食をしに出口へ足を向けた。

いつも昼飯はこの路地裏の片隅にある銀杏亭と決めている。

冴えない中年親父がやっている七、八人入れば満席になるような小さな定食屋なのだが、それでも席が埋まっているのをついぞ見たことがない。場所柄、繁盛しにくいのかもしれないがもう少し注目を浴びても罰は当たらないだろうに、と黒峰は常々思っていた。その海老フライ定食が絶品なのだ。タルタルソースのたっぷりかかった、カリカリに揚がってやや髭の焦げた海老の頭をマズルの奥で噛み砕く瞬間が堪らなかった。

今日は左右どちらの奥歯で噛み砕いてやろうか。

小さな幸せに思いを馳せる青年の足は、しかし、出口へ向かわずにどこへ行こうというのか、しばしフロントを行ったり来たりしたのちに、足先は脇の通路へと伸び、そしてとある扉の前でぴたりと止まった。

黒峰の喉仏が大きく上下する。

焦燥に駆られる肉体はどうやら無視できないらしい。あの日にめくるめくほどの快感を心身に刻まれてしまったのだから然もあらん。鮮烈な性体験が彼を件の練習場の前まで運んで



いた。

やはりか……。黒峰は苦笑した。

片想いをすっぱり諦められるほど出来た性格でないことは自覚していたが、大牙たちがただならぬ関係で結ばれていることを知ってもなおおめげない己の根性に半ば呆れるほかなかった。彼があの日と言ってくれた、『辛抱できなくなったらいつでも俺のところに来い。たっぷり相手してやる』その途轍もない殺し文句が頭の中で何度もリフレインする。

泡沫の恋で終わらせてなるものか。

そうだ、もし泡が弾けたら今日は両方の奥歯で海老の頭を噛み砕いてやろう。

鬼が出るか蛇が出るか、青年は禁じられている扉を開いた。



# 士狼

シロウ

■リングネーム

士狼(しろウ)

■年齢

30歳

■獣人種

狼獣人(灰色オオカミ)

■身体データ

176cm 95kg 灰緑色の瞳

弱冠二十歳にしてジュニアヘビー級チャンピオンの座についた。

打撃系や実践的な技術を用いるシュートスタイルを得意とし、彼の華麗な技に魅了されるファンも多い。

ストイックに黙々と練習に打ち込む性格で面倒見もよくないが、ただ一人、後輩の虎鉄だけは可愛がって指導をつけてやっている。



# 虎鉄

コテツ

■リングネーム

虎鉄(こてつ)

■年齢

25歳

■獣人種

虎獣人(アムールトラ)

■身体データ

198cm 137kg 琥珀色の瞳 ギザ耳

中学時代にチャンピオン士狼の勇姿をテレビで偶然見かけたのがきっかけでレスラーになった。ヘビー級の恵まれた体格にパワーファイターとして周囲の期待も大きかったが、現在のところあまりいい戦績を残せていない。純朴な性格で人懐っこく、憧れている士狼の役に立ちたいと日々思っている。

獣神  
リングス

大牙  
タイガ

■リングネーム  
大牙(たいが)

■年齢  
25歳

■獣人種

■身体データ

虎獣人(アムールトラ)

198cm 137kg 琥珀色の瞳 ギザ耳

裏プロレス団体『獣神リングス』の創設者であり現役のヘビー級チャンピオン。虎鉄の純朴とした雰囲気は消え失せ、代わりに剥き出しになった獰猛な闘争心が言動に表れている。

対戦相手を凌辱するほどの凄まじい精力、その原動力はひとえに土狼への盲愛とも言うべき底知れない愛情からであった。





上記QRコードを読み取ることで、ご感想フォームにアクセスできます。

## COMMENTS FROM GUEST ARTISTS

今回参加頂いたゲスト様からコメントを頂きました。  
ご多忙にもかかわらず素敵な作品を寄稿頂いた  
ゲストの皆様に厚く御礼申し上げます。



**蒼葉カゲトラ**

pixiv : 669115

Twitter : @aoba\_kagetora

今回は貴誌にお声がけいただきまして  
ありがとうございました！  
虎鉄と土狼の甘ったるいほどの純愛は楽しめました  
でしょうか？  
ちょっと強引な後輩くんっていいですよ……。  
pixivでも活動していますのでご興味あれば是非に。



**k太郎**

pixiv : 11394033

Twitter : @t\_kawakyun1

こんにちは、k太郎と申します。  
寄稿のお話を頂きまして、大変嬉しく思っております。  
オリジナルキャラ同士を絡ませるイラストが描けて、  
大変楽しい一時でした。  
皆さんも楽しんでご覧いただけましたら幸いです。



**毛虫**

pixiv : 10817129

Twitter : @imomushi34

お誘いありがとうございます！  
普段あまりプロレスは描いてないので、毎回目を覆う  
ような出来になってる気がしますがお許しを…(泪  
覆面って性的ですよ！ あのド派手なマスクに迸る  
雄汁だけでご飯3杯イケる！

## あとがき



原作・キャラ原案担当

**あき**

pixiv : 948890

Twitter : @akituki0306

皆様こんにちわ。久方ぶりのプロレスリング牙はお楽しみいただけましたでしょうか？ 放課後プロレスとはまた違う、地下プロレスの雰囲気少しでも伝われば幸いです。

さて、早いものでGROWLの本はこれで5冊目となりました。

光陰矢の如し、もうそんなになるんだなあ…等と思いつつ、

よーし次は10作目を目指すぜ！と考える今日この頃。

これからも、熱くてエロい【GROWLらしいケモレス】をモットーにくっちーと2人で頑張りたいと思いますので、

皆様どうぞ、これからも宜しくお願い致します！



作画・デザイン担当

**くっちー**

pixiv : 7552963

Twitter : @wrestle\_tiger46

本誌を手にとっていただきありがとうございます！

コロナ禍で制作期間が変わったのに加え、今回は5冊目としてかなりガッツリめに The 地下プロレスな"牙"を描こうということになり、試合前のゆるくも緊迫した？やりとりからしっかりとプロレスシーンを、そして白濁溢れるエロレスシーンまでフルボリュームで描き切ることができました…！

今回もゲストの皆様から素敵な作品を寄稿頂き本当に感謝です…！ 蒼葉カゲトラさんからの作品でも挿絵を担当させて頂きましたが、読んでいてすぐにキャラや映像が浮かんできて最後まで楽しく描くことができました。イラスト数枚ではありますが、カゲトラさんの作品に少しでもプラスになっていれば良いなと思っています。



BOOTHにて既刊DL販売中！



DL販売：BOOTH



下記QRコードから、ご感想フォームにアクセスできます。

今後の制作に活かすため、皆様のご感想をお聞かせください。

サークル一同、泣いて喜びます！



## 奥 付

誌 名 : プロレスリング牙 2nd Bout  
発行日 : 2022年 4月 30日  
発行元 : GROWL  
発行者 : くっちー／あき  
連絡先 : tigerwrestle\_29@yahoo.co.jp  
印刷 : 株式会社 栄光 様

許可の無い転載、複製、転売、アップロード等を禁止します。

All rights reserved. Reproduction, republication, uploading of this book is not allowed.





